

石塚山古墳群

1993年3月

綾歌町教育委員会

石塚山古墳群

1993年3月

綾歌町教育委員会



1号墳埴丘盛土の状況



1号墳竪穴式石室の基礎構造



2号填第1主体部



3号填第1·第2主体部

は じ め に

本書は昭和61年12月6日から翌年3月31日まで発掘調査を行った石塚山古墳群の調査報告書であります。石塚山古墳群は猫山に源を発する中大東川東岸の丘陵地にあって、その名が示すとおり古くからその所在が知られていました。

今回の調査の原因である町役場と琴電栗熊駅とを結ぶ道路建設は地元住民と町当局の待望であります。昭和62年度から古墳群東の水橋地区土地改良整備事業に伴い当地に農道が建設されることになり、県教育委員会の指導を得て発掘調査を実施することにしました。期間が短い悪条件ではありましたが、県教委、作業に当られた方々、さらに四国学院大学実習生などの献身的な御努力により、予定の期間内で調査を完了することができました。

今回の調査によってかつては円墳5基が所在するとされていた古墳群が、前方後円墳1基、前方後方墳1基、円墳1基、方墳か方形台状墓1基の4基から構成されていることが判明しました。千数百年の昔から眠り続けた古墳を調査して、改めて郷土の先人たちの偉大さと尊厳さを痛感いたします。

21世紀を前にして発展を期して努力する当町を思う時、私どもはこれらの遺産を尊敬とともに大切に保存して後世に伝えていかなければならないとの思いを強くします。今回の調査を契機に町当局並びに町民ともども埋蔵文化財の関心を一層深め、今後の文化行政の推進に役立てていきたいと考えています。

最後になりましたが県教委文化行政課の方々、特に現地調査と報告書の刊行を担当していた國木健司先生に厚くお礼申し上げますとともに、さまざまな形で御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げ発刊の言葉とします。

平成5年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 西 浦 廣 海

例　　言

1. 本書は香川県綾歌郡綾歌町栗熊882-7番地に所在する石塚山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会の指導のもと、綾歌町教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査期間は昭和61年12月6日から昭和62年3月31日である。
4. 発掘調査は香川県教育委員会事務局文化行政課技師國木健司が指導・担当した。
5. 発掘調査及び整理期間を通じて次の方より多大な御指導、御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。(敬称略、順不同)
都出比呂志、松木豊胤、廣瀬常雄、渡部明夫、大山真充、福永伸哉、松木武彦、
大久保徹也、片桐孝浩、山元敏裕、森下英治、藏本晋司、森格也、大林英雄、
 笹川龍一、亀田修一、田中克枝、直江敏子、深井絹子、國木博史、國木武史、
 國島浩正、四国学院大学生諸氏、高尾猛、飯南農協
6. 本書中では4基のうち明らかに墳丘墓と考えられる4号を除く他の3基については1～3号墳という呼称を使用した。
7. 本書の挿図中に建設省国土地理院発行5万分の1地形図「丸龜」を使用した。
8. 本書の執筆・編集は國木が担当した。

目 次

第 1 章	調査に至る経過	1
第 2 章	調査の経過	3
第 3 章	立地と環境	7
第 4 章	1 号 墳	15
第 5 章	2 号 墳	29
第 6 章	3 号 墳	47
第 7 章	4 号 墳	59
第 8 章	まとめと考察	63
I	石塚山2号墳の石積み墓壙について	63
II	石塚山1号墳の竪穴式石室について	65
III	石塚山古墳群の築造時期について	68
IV	讃岐における弥生時代終末期から古墳時代前期の埋葬施設	70

挿 図 目 次

第1図	昭和26年調査時の1号墳箱式石棺	6
第2図	古墳群周辺の地形図	8
第3図	周辺の遺跡地図	10
第4図	西土居遺跡掘立柱建物	11
第5図	平尾2・3号間鞍部の土壙墓群	11
第6図	町内出土遺物実測図	12
第7図	車塚古墳	13
第8図	犬塚古墳	13
第9図	大道墓地古墳	13
第10図	宇門神社古墳横穴式石室	13
第11図	調査前の墳丘測量図	16
第12図	1号墳土層図	17
第13図	1号墳丘測量図	18
第14図	1号墳墳丘たちわり土層図	20
第15図	第1主体部実測図	22
第16図	礫敷き実測図	24
第17図	石室構築過程模式図	25
第18図	第2主体部上面図	26
第19図	第2主体部実測図	27
第20図	1号墳出土遺物実測図	28
第21図	2号墳墳丘測量図	30
第22図	2号墳土層図	31
第23図	2号墳墳丘たちわり土層図	32
第24図	白色円礫群実測図	33
第25図	第1主体部上面図	34
第26図	第1主体部残存部実測図	35
第27図	石積み墓境壁実測図	(折り込み)
第28図	第1主体部壇築過程模式図	41
第29図	第2主体部実測図	42

第30図	第3主体部実測図	44
第31図	第4主体部実測図	45
第32図	第1主体部出土鉄劍実測図	45
第33図	2号墳出土土器実測図	46
第34図	3号墳墳丘測量図	48
第35図	3号墳土層図	49
第36図	第1主体部実測図	51
第37図	第1主体部墓域実測図	52
第38図	第1主体部構築過程模式図	54
第39図	第2主体部墓域実測図	56
第40図	第2主体部実測図	57
第41図	第3主体部実測図	58
第42図	3号墳出土遺物実測図	58
第43図	4号墓実測図	59
第44図	溝状造構実測図	60
第45図	4号墓主体部実測図	62
第46図	4号墓主体部出土刀子実測図	62
第47図	1号墳竪穴式石室断面模式図	66
第48図	奥10,11号墓竪穴式石室	71
第49図	高松平野の竪穴式石室	73
第50図	床面構造分類図	74
第51図	割竹形木棺使用の古式古墳	78

図版目次

- 図版1-(1) 古墳群周辺の航空写真
(2) 調査前の古墳群遠景（東から）
- 図版2-(1) 調査中の古墳群遠景（西方町役場より）
(2) 同上（北方綾歌町役場より）
- 図版3-(1) 1号墳墳丘（2号墳より）
(2) 同上（北から）
- 図版4-(1) 1号墳南くびれ部
(2) 1号墳北くびれ部
- 図版5-(1) 墳丘南辺側溝
(2) 第1主体部内埋土
- 図版6-(1) 第1主体部完掘状況（東から）
(2) 同上（北から）
- 図版7-(1) 第1主体部完掘状況（西から）
(2) 粘土床たちわり状況
- 図版8-(1) 第1主体部粘土床下の礫敷
(2) 矶敷及び壁体石積み状況
- 図版9-(1) 矶敷、壁体構築状況
(2) 第1主体部周辺の墳丘盛土状況
- 図版10-(1) 第2主体部検出状況
(2) 第2主体部蓋石除去後の状況
- 図版11-(1) 第2主体部完掘状況（西から）
(2) 同上（南から）
- 図版12-(1) 1号墳墳丘たちわり土層（北辺側）
(2) 同上（南辺側）
- 図版13-(1) 2号墳調査前の状況（西から）
(2) 2号墳南アゼ土層
- 図版14-(1) 2～4号墳墳丘（1号墳より）
(2) 2号墳南西斜面部の塊石群
- 図版15-(1) 2号墳第1主体部上の白色円礫群

- (2) 白色円礫、石室覆土、石室蓋石の状況
- 図版16-(1) 2号墳第1主体部蓋石検出状況
- (2) 第1主体部上面検出状況
- 図版17-(1) 第1主体部蓋石検出状況
- (2) 同上
- 図版18-(1) 第1主体部内の発掘風景
- (2) 第1主体部残存部の状況
- 図版19-(1) 第1主体部棺床部の状況
- (2) 第1主体部石室内遺物出土状況
- 図版20-(1) 第1主体部石積み墓壙(西から)
- (2) 同上(東から)
- 図版21-(1) 石積み墓壙東壁及び床面の状況
- (2) 同北壁石積み状況
- 図版22-(1) 石積み墓壙床面敷石除去後の状況
- (2) 石積み墓壙北側の墳丘たちわり土層
- 図版23-(1) 2号墳第2主体部完掘状況
- (2) 第3主体部壺棺検出状況
- 図版24-(1) 第3主体部壺棺とその埋設状況
- (2) 壺棺埋設壙完掘状況
- 図版25-(1) 第4主体部及び壺口縁出土状況
- (2) 第4主体部完掘状況
- 図版26-(1) 2号墳丘たちわり土層
- (2) 同上
- 図版27-(1) 3号墳調査前の状況(東から)
- (2) 2、3号墳調査前の状況(西から)
- 図版28-(1) 3号墳墳丘全景
- (2) 3号墳前方部
- 図版29-(1) 3号墳第1、第2主体部検出状況
- (2) 同上(北から)
- 図版30-(1) 3号墳第1、第2主体部並列状況
- (2) 第1主体部被覆粘土検出状況
- 図版31-(1) 第1主体部被覆粘土たちわり状況
- (2) 3号墳第1、第2主体部

- 図版32-(1) 第1主体部蓋石検出状況（西から）
(2) 同上（北から）
- 図版33-(1) 第1主体部蓋石下の密閉粘土
(2) 第1主体部壁体の状況（西から）
- 図版34-(1) 第1主体部壁体の状況（北から）
(2) 第1主体部基底石及び床面敷石
- 図版35-(1) 第1主体部墓壙（西から）
(2) 同上（北から）
- 図版36-(1) 3号墳第2主体部検出状況
(2) 第1、第2主体部並列状況
- 図版37-(1) 第2主体部検出状況（石室埋土除去後）
(2) 同上（南から）
- 図版38-(1) 第2主体部残存部
(2) 第2主体部墓壙
- 図版39-(1) 第3主体部検出状況
(2) 同完掘状況
- 図版40-(1) 3号墳南裾遺物出土状況
(2) 3号墳墳丘たちわり土層
- 図版41-(1) 3号墳南基底部付近の土層
(2) 3号墳前方部たちわり土層
- 図版42-(1) 4号墓丘（2号墳周溝に切られた状況）
(2) 同上（1号墳周溝に切られた状況）
- 図版43-(1) 4号墓周溝（南から）
(2) 同上
- 図版44-(1) 4号墓土壤内埋土、刀子出土状況
(2) 4号墳土壤完掘状況
- 図版45-(1) 4号墓土壤（西から）
(2) 4号墳たちわり土層
- 図版46-(1) 1号墳出土土器
(2) 2号墳出土土器
- 図版47-(1) 2号墳出土土器
(2) 2号墳第1主体部出土鉄劍
(3) 3号墳第3主体部出土土器
(4) 4号墳出土刀子

第1章 調査に至る経過

綾歌町水橋地区では、農林省の補助事業である団体営土地改良総合整備事業が実施されており、昭和62年には地元の要望が強かった町役場と琴電栗熊駅を結ぶ農道が新設されることになった。琴電の路線が石塚山古墳群の所在する丘陵を分断する形で架設されており、路線両側が崖面となって車両等の通行が全く不可能な状態であったため、幅員5mの道路を新設しようとするものである。

この事業計画によれば、古墳群の所在する丘陵は比高10~15mの急峻な法面もっていたため、安全勾配を確保すれば2基の古墳が切り崩されることとなっていた。また、残りの2基の古墳については、町有地と琴電用地との換地処分を行う上で必要であるとの理由から削平されることになっていた。既に昭和61年度の初めから丘陵西側において採土が開始されており、3号墳の裾付近まで掘削が及びつつあった。

こうした開発側の動きに対し、町教育委員会は採土の中止を申し入れるとともに、昭和61年4月21日に県教育委員会に古墳群の取り扱い等対応に関する指導を申し入れた。県教育委員会から事業計画について把握すること、古墳の保存協議に必要な資料を得るために確認調査を実施することの2点について指導を受けた町教育委員会では、昭和61年5月15日付け綾歌発第81号で発掘調査の通知を提出するとともに、経費及び体制の充実を中心とした調査の準備を開始した。その後教育委員会と県教育委員会との間で調査体制、調査方法及び内容等に関する調整が度々行われ、昭和61年7月23日より8月27日まで古墳の員数、規模等を確認するための第1次調査を町教育委員会が主体となって実施した。

石塚山古墳群は5基から成る古墳群であることが『快天山古墳発掘調査報告書』に記載されており、遺跡台帳にも同様の内容が登載されている。しかし、この第1次調査の開始時には雑木が繁茂し、かろうじて2基のマウンドが視覚的に把握できるという状態であった。したがって、この第1次調査は伐開及び測量調査を中心とし必要に応じてトレンチ調査を行うというものであった。調査も最終段階にさしかかった8月26日に県教育委員会職員が現地を視察したところ、3基の古墳（1~3号墳）について位置・規模等が確認されていた。さらに、この現地指導により1号墳と2号墳の間に小規模なマウンドが存在することが注意され、4号墳として保存協議対象に含めることになった。

翌8月27日に第1次調査を終了した町教育委員会は數日後県教育委員会に調査結果を報告、今後の対応についての指導を求めた。その際、報告を行った調査結果の概要は以下のとおりである。

- ① 古墳は造成予定地内に4基所在し、L字の配列をとっている。
- ② 1号墳は直径15m程度の円形マウンドをもつ。
- ③ 2号墳は直径25m、高さ3.5mの円墳であり、損壊した主体部が1基存在する。
- ④ 3号墳は直径12m程度の円形マウンドをもち、墳丘中央に形状不明の2基の主体部が存在する。

主体部については4基の古墳ともに内容が不明であり、築造時期についても出土遺物が皆無に近かったため手がかりさえ掴みがたい難い状態であった。県教育委員会からはさらに詳細な内容を把握するための調査が必要であるとの指導がなされたが、調査経費・担当者・調査期間の確保等解決していかなければならない問題点が多かった。

その後、発掘調査は終了したとの判断から採土工事が再開され、1号、2号墳の基底部付近まで掘削が及んでくるという状況になった。県教育委員会と町教育委員会との間で、古墳の保存措置及び継続調査の実施方法等について数度の協議が行われていたが、町教育委員会にも町当局の工事であり地元住民の待望する事業であったことから、開発側に同調する動きも見られた。先の試掘調査結果では町当局との保存協議上資料不足は否めず、県教育委員会は早急に工事の停止を求めるとともに本調査を実施するよう町教育委員会を指導した。

こうして町からは11月17日に文化財保護法第57条の3に基づく発掘の通知が提出され、調査費用についても補正による予算化（150万円）がなされた。問題となる調査体制については、発掘通知の提出と同時に指導者の派遣申請書が提出されていたが、年内は県教育委員会の担当職員は他の現場を抱えており指導者の派遣は不可能であった。一方、工期との関係から調査期間は昭和62年3月31日までとされていたため、止むをえず当分の間町教育委員会単独の発掘調査を行うこととなった。

調査は12月6日に着手した。調査開始後、適宜進捗状況及び古墳の内容について両教育委員会は連絡を取りながら調査を進めていたが、12月26日に県教育委員会の職員が現地視察を行ったところ、遺構内容が予想以上に複雑でありこれ以上単独の調査継続は不可能であると判断された。そこで1月9日より日程の調整がつく範囲内で県教育委員会より指導者を派遣することになった。こうして、町教育委員会が主体となって県教育委員会が調査指導を行うという形の調査を3月31日までの予定で開始した。

第2章 調査の経過

第1次調査時に行った地形測量により4基の古墳はいずれも円墳である可能性が高いと思われたが、墳丘精査中に各古墳に変更すべき点が認められたために調査当初は墳形の確認に主眼を置いていた。1号墳については墳丘の南北両側が直線的な形状を持つこと、東側にくびれ部とともに小規模な張り出し（突出部）が認められたことから、前方後方墳ではないかと考えられるようになった。2号墳は突出部ではなく円墳であることに変更はなかったが、4号墓は墳丘東側で古墳に伴うと推定される直線的な溝状遺構が検出されたため、方墳あるいは方形台状墓の可能性が強まつた。3号墳については調査終了直前まで楕円墳と考えていたが、最終的に墳丘西側へ調査区を拡張した結果西に向かって低い張り出しを持つことが判明した。以下各古墳ごとの調査経過を述べることにする。

（1号墳）

比較的調査の早い段階で第2主体部の箱式石棺を検出した。蓋石等が一面敷きつめられた状態で検出されたため未盗掘ではないかとの期待もあったが、昭和26年に調査を実施された石棺であることが調査中に判明した。当時の写真には側壁石のみを残すまで発掘が進められた様子が写されており、大半の石材が移動を受けていることが判明したため、今回の調査では石棺本来の形状全てを明らかにすることはできなかった。

墳丘中央の第1主体部は第1次調査時のトレンチで塊石群を検出していったことから、その位置については早くから確認されていた。かつてこの位置には電柱が立てられていたらしくその際の攪乱部分は数カ所容易に検出されたが、墓壙が上面では検出されずそのプランを把握ことができなかつた。そこで第2主体部と平行にトレンチを設定して掘り下げるに、石室の石積みが検出され竪穴式石室であることが判明した。壁体とともにその内側に充填された粘土床も検出されたが、期待された遺物は全く出土しなかつたためその後は石室構造の解明に主眼を移した。一方では懸案であった墓壙の確認にも努めたが結局確認されず墳丘盛土と併行して石室が構築されていることが判明した。粘土床はU字形に凹むことから木棺の痕跡を残すことが判明したが、さらにその厚さと断面形を確認するため断ち割りを行つたところ下部に礫床の存在が確認された。そこで、粘土床を全て除去したところ礫床は粘土床下のみならず側壁石の下まで広がっていることが判明した。

墳丘については北側のくびれ部は早く検出されていたが、南側でも対応する位置に調査区を拡張したところ確認された。また、墳丘に沿つて直線的に延びる浅い溝状遺構も検出され、主丘部が方形であることも判明した。最終的に墳丘測量図を作成した後、断ち割り調査を行い墳

丘の築成過程を検討した。その際、地山直上に薄く堆積する黒色土の存在が注目された。同層中には炭化物と土師器片が含まれており、平面的な確認が行えれば墳丘築造前の祭祀に関するなんらかの知見が得られたと思われるが、時間的な制約から調査が行えなかったことは悔やまれる。なお、1号墳の墳丘築造時に4号墳の墳丘が削り取られており、両者の前後関係は容易に確認された。

(2号墳)

第1次調査により墳丘頂上やや南寄りの位置から第2主体部、その西側から第3主体部である壺棺が検出されていた。第2主体部は後世の盗掘・攢乱が著しく、埋土中に板石及び小塊石が小量混入するのみであった。かろうじて床面に板石を抜き取った跡と思われる溝が検出されたことから、本来は箱式石棺であったと推定されるにとどまった。

墳丘基底部付近の調査を進める段階で南西基底部付近から配石土壙が1基検出された。やはり本来の形状は留めていないが、周辺埋葬の存在を示しており注目された。また、この土壙墓周辺からは壺棺等の破片が比較的多く発見されている。

第1主体部は第1次調査時に設定したトレンチからは検出されておらず、調査期間が残り2週間余りになるまでその存在は確認されなかった。第2主体部より北側の墳頂部には白色円碟群が広がっていたが、その断面図作成のため断ち割り調査を行っている際に30cmほど下から発見された。白色円碟の広がりが第1主体部の上面をほぼ覆っていることも確認され、両者が密接な関係を持つことも推定されることとなった。この竪穴式石室は蓋石がほぼ完全な状態で検出されたことから保存状態が良好であろうと思われたが、石室基部付近を除き壁体の石がほとんど内側に崩落していた。したがって、石室の構造については不明瞭な点が多く基部付近を除き詳細な内容は判明しなかったが、それら壁体を構成していたと推定される板石やその裏込めの塊石を取り除いている段階で注目すべき事実に気付いた。壁体及びその裏込めの周囲に、面を削えて塊石を積み上げた石垣状の施設が取り巻いているというものである。内側の板石、塊石群は容易に取り上げることが可能であったが、この石垣状の積石はいずれも墳丘盛土により強固に固定されていた。最終的に内部の石を全て取り除くと、底にも塊石が敷きつめられており石室全体を包む箱状の施設であることが判明した。墳丘の断ち割り調査によってこの箱状の積石は墳丘盛土と併行して構築されていることが確認され、石室の墓壙に相当する施設であることが判明した。

墳丘の断ち割り調査によってその築成過程を確認して調査は終了したが、2号墳については調査期限に追われ、かつ最終段階で重要な遺構の検出が相次いだことから、充分な記録化を行えなかった部分が多くあった。たとえば、墳丘西側斜面の下半部には葺石状の塊石群が検出されたが、大型石材と挙大の石が不規則に混合していたこと、ほとんどが地山面からはかなり浮いた状態で検出したこと、墳丘上には同様な円碟群が存在したこと等から上方からの転落石群で

あると考え記録化は不要と判断した。これについては本来墳丘に伴っていた石も存在していた可能性はある。また、第1主体部の板石および裏込めの塊石群については崩落していたとはいえた断面図の作成は不可欠であった。調査員としての力量不足からくる失敗ではあるが、事前調査であったことを思うとき担当者としては良心の呵責に耐えない。恥ずべきことではあるが敢えて記し、今後の糧としておきたい。

(3号墳)

第1次調査で2基の主体部の上面が検出されていたため、各古墳の墳丘調査後はこれらの主体部調査に主眼を移した。いずれも保存状態が比較的良好で、特に第1主体部は被覆粘土も完全に残っており全容が判明する唯一の埋葬施設であった。それだけにその構造とともに構築過程の解明を心がけて調査を行った。被覆粘土を取り除くと安山岩の板石を使用した蓋石が隙間なく敷き並べられていた。この蓋石を開ける際には緊張感ははしったが、内部からは若干の人骨を除き副葬品は全く発見されなかった。壁体は長側壁は塊石を積み上げ、短側壁は扁平な石を立てて使用しており、小竪穴式石室の範疇で把握できるものであることが判明した。底部はやはり安山岩の板石を敷いていた。

第2主体部は被覆粘土及び蓋石は検出されず、石室自体も東半分は攪乱を受けていたが、残存する部分から第1主体部と同様の構造であったものと推定された。特に墓壙及び基底部の構造は全く同じものであった。遺物はやはり出土しなかった。

両主体部の調査終了後墳丘の精査を行っていたところ、第1部主体部から3mほど西側で土塙墓が1基検出されたため第3主体部とした。石材は全く使用していなかったが、土壙内部から土器片が出土している。

3号墳は調査終了間際まで円墳であると考えていたが、再度墳丘精査を行っていたところ円丘部の西側が円弧状を示さず、西に向かって張り出しが存在することが確認された。前方部の有無は大きな問題となるため、この部分について直ちに断ち割り調査を実施したところ盛土の存在が確認され、前方後円墳であることが確実となった。また、墳丘南側の裾付近からは土器片がまとまって出土している。

(4号墓)

きわめて低いマウンドであったため測量調査時には疑問視されていたが、調査の比較的早い段階で土壙が検出されその存在が明らかになった。墳丘は1号、2号墳の構築時に掘削されており形態等明確ではない。やはり当初は円形のマウンドを持つものと考えていたが、土壙の東約6mで直線的な溝状遺構を検出したため方形の平面プランを持つ可能性も考えられるようになった。

主体部である土壙も早い段階で完掘した。埋葬施設としては貧弱であったために遺物の検出は期待されなかったが、刀子が一振出土している。

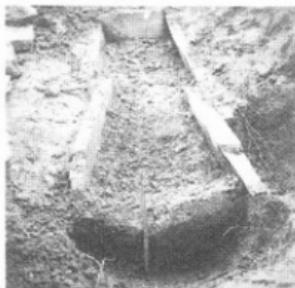
4号墓については調査が比較的早く終了したが、墳丘・主体部ともに確認すべき部分が乏しく、その内容についても確定的なことは把握できなかった。

以上各古墳ごとに概要を記述してきたが、ここで全体的な調査の経過と状況について若干触れておきたい。

調査は町教育委員会単独で約1カ月間進められたが、1月9日から県教育委員会が調査指導の形で参加した。この時点では調査工程に比較的ゆとりがあったが、その後1月の中・下旬は展示会の準備でほとんど指導が行えず、また2月16日から3月6日までは他の古墳調査を行っていたため、実質的に調査に参加できたのは約1カ月余りであった。したがって、3月に入ると日曜・祝日はもちろんのこと雨天の日も休めない工程となってしまった。特に最後の2週間は朝7時ごろから夕方7時過ぎまで、休憩もほとんどなしという強行スケジュールとなった。夜間に実測を行っていた日もあった。このような劣悪な条件のなかを最後まで調査に参加していただいた作業員の方々には本当に頭が下がる思いで一杯である。まぎりなりにも調査を終えることができたのは、このような方々の献身的な御助力があったおかげであり、記して心から厚くお礼申し上げたい。

また、2月9日から3月24日までは四国学院大学の考古学実習の場となり、12名の学生諸氏が発掘調査に参加した。ほとんどの学生が3月上旬までに単位取得に必要な日数をクリアしたが、中にはその後も調査に参加してもらえた人がいた。主に参加したのは表土剥ぎや墳丘調査など比較的単純で面白みのない部分の調査であったが、不満もこぼさずに熱心な参加ぶりであった。また、不謹慎ではあるが乏しい調査費用の中で、実習とはいえ無報酬で参加してもらえたのは非常に有り難かった。

調査は3月31日に終了したが諸般の事情により報告書刊行がこれまで延びてしまった。整理作業を通じて、山元敏裕氏には多大な御援助を得た。また、報告書執筆に際しては県教育委員会及び（財）香川県埋蔵文化財調査センター諸氏には多大な御指導・御協力を得た。記して謝意を表します。



第1図 昭和26年調査時の1号墳箱式石棺

第3章 立地と環境

1 古墳群の分布

石塚山古墳群は香川県綾歌郡綾歌町栗熊西877番地に位置する。

4基の古墳のうち1, 2, 4号の3基は、南から北に延びる尾根稜線上に直線的に分布している。尾根筋は2号墳の中心付近から西方に向かって屈曲しており、3号墳はこの稜線上に位置しているため、4基の古墳は北から見ればL字形の配列をなして分布している。

この尾根筋は古墳付近で本来標高50～51mをはかるもので、周辺の低地部分からの比高は10～15mをはかる。稜線上には幅10～15m程度の平坦部があり、緩傾斜部を挟んで側面は比較的急峻な傾斜をもつ。したがって、全体的には蒲鉾形の地形をなしており、4基の古墳はいずれもこの尾根筋平坦部と緩傾斜部を最大限に利用・整形して築造している。

4基の古墳は互いに基底部を接する形で築造されており、後述するように4号は1号及び2号により墳丘が削り込まれているなど前代の墓域を重視・尊重した様子は窺えない。一方で、3号はその築造に際し2号の周溝を含めた墓域を避けている節が見受けられることからすれば、最大の墳丘規模を持つ2号を中心とした群構成を展開している観がある。

調査時には周辺に古墳の存在が見受けられず今回調査対象となった4基の古墳が群構成を成していたが、かつては5基からなる古墳群であったとされている。それらの分布状況や内容等詳細を記した資料はないが、1号墳西方約30mの畠地を所有する高尾氏によれば同氏の畠開墾時に石積みが現れ内部を発掘すると多数の土器が出土したことである。同氏はその土器を丁寧に保管されていたが、現在は町教育委員会に寄託されている（第6図1～10）。いずれも土師器碗であり10世紀代に比定される。土器が出土した石積みは破壊されていたが、昭和62年の段階では石垣状に乱積みされた人頭大の川原石群が実見された。土師器出土地点から尾根稜線上から西に下る斜面であり、使用石材が多数の川原石であったことを考えれば横穴式石室であった可能性が高く、出土土器はその再利用時の供献土器とみなすのが妥当であろう。いずれにしても1～4号墳とは異なる性格の古墳が存在していたことは確実とみなしてよいが、今回の調査対象となった4基の古墳群の性格・意義を考える上では除外しておいても差し支えないであろう。

1号墳からは東に派生する細長い尾根筋が存在したが、その先端付近には墓地として削平を受けていたものの広いテラス面が認められ古墳の所在を指摘する意見もあった。また、琴電架設時の掘削地点にも他の古墳が所在していた可能性がある。平成4年の今となっては当該地周辺の改変が進み確認する術がなくなってしまったことが残念でならない。



第2図 古墳群周辺の地形図

2 地理的環境

綾歌町は香川県のほぼ中央に位置し、坂出市・飯山町の南に境を接する。阿讃山脈の最前線をなすともいえる高見峰・猫山・城山の連山を南限とし、前面に肥沃な丸亀平野を望む大まかな地勢をとる。町北東部は横山連山を境に綾歌町・坂出市に接するため眺望は遮られるが、北西部は土器川地域の沖積平野に向って幾筋もの洪積台地が延び起伏にとんだ複雑な地形を形成している。南方の連山と北東の横山連山との間には前者に源を発する大東川に沿って盆地状の沖積平野がひろがっており現在も阿野郡条里の南限を示す方格地割が良好に残存している。町全体としてみれば南方及び北東部を山塊が占め、西半部に起伏に富んだ洪積台地、東半部の中央に沖積平野が広がるといった構図に集約される。

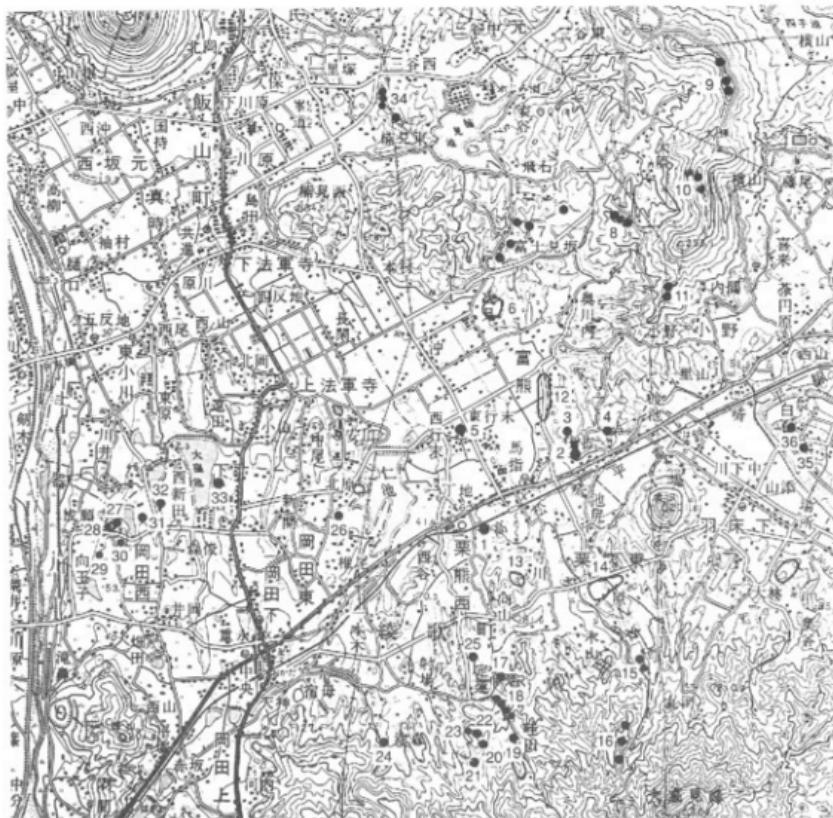
石塚山古墳群は町南方の山塊・丘陵部と沖積平野が境を接する地域に所在する独立丘陵北端部に位置する。古墳群からは北方向に沖積平野を望むため視界は北に大きく広がる位置にあたる。南は猫山から北に向かって多数の尾根・丘陵が派生しており、その間を縫うように北流する小川沿いに狭い沖積平野・扇状地が形成されているといった複雑な景観を呈している。このような丘陵地形も石塚山古墳群が所在する丘陵以北の一丁地・馬指地区に至ると小流路が集水された中大東川及び東大東川沿いに比較的広範囲にわたる沖積平野が広がる平坦地形へと転換する。この沖積地にも荒・徳部・行末地区等で低い独立丘陵の形成がみられ、また北東方向の横山連山から南西方向に尾根筋が派生しているなど細かな起伏はみられるが、古くから開墾された生産力豊かな地域であったことは容易に推察される。

古墳群から東方向にも概ね平坦地形が広がるが約1.5km離れた位置にそびえる羽床富士こと堤山によってより以東への眺望は遮られる。とはいえ、堤山北裾の狭い低地を抜けると綾川流域の沖積平野いわゆる羽床盆地へと容易にたどりつくことができるため、この地域との交流を密接に行なう位置にある。綾歌町の歴史を考える上で大東川水系で結ばれた海浜部との交流とともに、陸路で結ばれた羽床盆地との交流は無視できないものがある。

3 歴史的環境

綾歌町内ではこれまで縄文時代以前の遺跡は発見されておらず、採集経済段階で人々がこの地でどのような生活を送っていたかを知ることはできない。しかしながら、この地域は国分台、城山といったサヌカイトの産地に近く、隣接する綾南町では旧石器の発見が相次いでいることを考えれば今後当該期の遺跡が発見される可能性はきわめて高いといえよう。

弥生時代に入ると町内数か所で発掘調査が行われている他、各所で弥生土器及び石器類の出土が知られている。前期では昭和59年度に発掘調査が行われた富熊の次見遺跡で古段階の土器



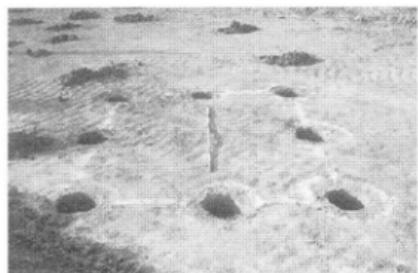
1. 石塚山古墳群（5基）
 2. 快天山古墳（全長100m）
 3. 菊跡山古墳（箱式石棺）
 4. 住吉神社古墳
 5. 行末遺跡（弥生前・後期）
 6. 次見遺跡（弥生前・後期）
 7. 地神山古墳群（5基・中期）
 8. 阵の丸古墳群（3基・前期）
 9. 横山古墳群（積石塚）
 10. 横峰古墳群
 11. 奥川内古墳群
 12. 油山遺跡（須恵器他多数）
 13. 水橋池南遺跡
 14. 原遺跡
 15. 原竜王山古墳（2基）
 16. 休場池東丘古墳
 17. 定連遺跡（弥生末）
 18. 定連池東丘古墳
 19. 駒田古墳群（7基）
 20. 平尾2号墓
 21. 平尾3号墳（前期）
 22. 平尾4号墳（前期）
 23. 平尾5号墳（前期）
 24. 深森穴巣跡古墳（横穴）
 25. 宇閉神社古墳（横穴）
 26. 北原古墳（古式須恵器）
 27. 車塚古墳
 28. 犬塚古墳
 29. 北ノ宮古墳
 30. 光照寺墓地古墳
 31. 大道墓地古墳
 32. 富野氏東古墳
 33. 西土居遺跡（弥生中・後期）
 34. 城山古墳群（前・中期）
 35. 津頭東古墳（4末～5中）
 36. 津頭西古墳（6初）

第3図 周辺の遺跡地図

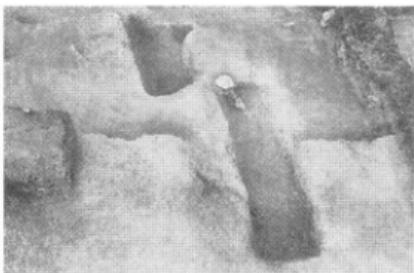
片が多数出土している。遺構は検出されなかったが付近に当該期の遺跡が所在していることは確実である。前期でも後半期になると溝・炉跡等とともに多量の土器・石鎌・石包丁等が出土した行末遺跡が著名である。出土土器（第4図15～21）へラ描き沈線文を中心とするものである。遺跡は北方に沖積平野を見下ろす台地上に位置している。また、石塚山古墳群が所在する丘陵でも今回の調査で当該期の土器が発見されている他は明確なものは確認されていない。ただ、町内の山丘・丘陵を中心とした高所で石器の出土が知られており高地性集落の発見が期待される他、前段階で開墾が進んだ大東川流域の沖積地の放棄は考え難く低地周辺にも集落遺跡が所在している可能性は高い。

後期に入ると次見遺跡で竪穴式住居、土壙が多数検出されている他、下土居遺跡で竪穴式住居や掘立柱建物等が発見されている。その他にも数多くの土器出土土地が知られており、後期段階になると沖積地、台地、丘陵部を問わず町内の開墾が一層進んだとみなしてよいであろう。こうした人口と生産力の増大を背景としてこの段階では有力首長層の造墓活動が活況を呈していく。これまでに知られているのは南方丘陵部に所在する石塚山古墳群、平尾墳墓群、定連遺跡等であるが、その他にも箱式石棺の出土を伝える地点が数多くあり、今後調査が進めば集団墓から特定首長墓への進展を解明する上で重要な地域となるであろうことは疑いない。

平尾墳墓群は詳細が未報告であるが前方後円形のマウンドを持つ2・3・4号と円形マウンドを持つ5号からなる。大型の箱式石棺と多数の土壙が検出された2号には集団墓的な様相がみられるが、3・4号には密集した土壙群ではなく中心埋葬の隔絶がみられる。いずれも割竹状の形態を持つ木棺の安置を考えることからみて古墳時代前期に下る時期の所産と思われる。その他に2・3号間の鞍部では3基の土壙が検出されている。定連遺跡は平尾墳墓群とは谷筋を挟んで東隣の尾根頂部に位置し、径約12mの円形マウンドとともに川原石群及び終末期頃の土器片（11～14）が発見されている。工事中の発見であり攪乱が著しかったため主体部構造は不明であるが、50cm程度の盛土の存在からみても本米墳丘墓であった可能性が高い。

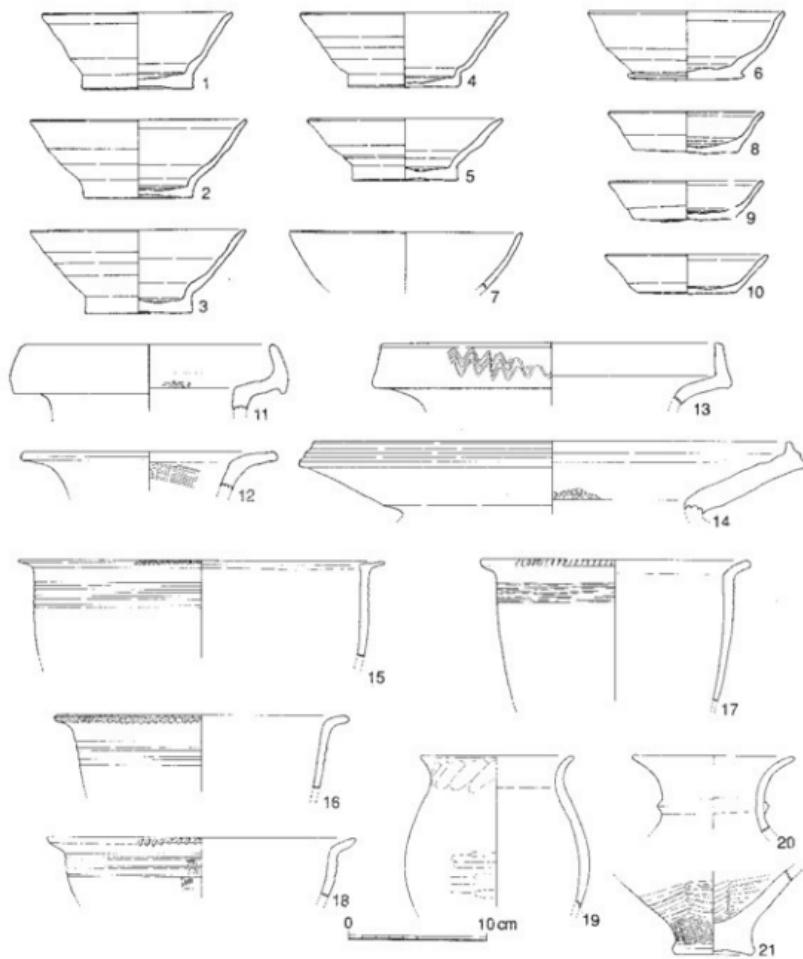


第4図 西土居遺跡掘立柱建物



第5図 平尾2・3号間鞍部の上壙群

古墳時代に入ると町南部及び北東部の山丘・尾根上や西部の岡田台地上を中心に多種多様な古墳が築造されている。前者については前半期古墳の築造が顕著であるが、古墳の位置からほぼ3群にそれらの分布を区分できそうである。南方丘陵上にあり北方に大東川水系の平野部を見下ろす位置にある原竜王山古墳・休場池東丘古墳群・定連池東丘古墳群、横山連山から南に



第6図 町内出土遺物実測図

派生する尾根上にあり大東川及び綾川両水系の平野部を東西方向に見下ろす位置にある住吉神社古墳・薬師山古墳・快天山古墳、横山連山周辺の高所に位置する横山古墳群・横峰古墳群・奥川内古墳群・陣の丸古墳群等である。詳細な内容、時期等が判明しているものが快天山のみであるためそれらの相互関係は不明であるが、前期段階では大東川上・中流域に複数の首長墓系譜があったものとみなすことはできよう。

快天山古墳はそれらの中心ともいべき位置に築造された最有力墳である。全長約100mをはかる前方後円墳で、後円部には段築の痕跡がみられる。基底部には円筒埴輪列が確認された。後円部には3基の割竹形石棺が発見され方格規矩四神鏡、石剣、仿製内行花文鏡、武器類、玉類、工具類等の多種多様な遺物が出土した。前方部でも先端付近から5基の箱式石棺が発見されている。4世紀後半段階に築造されたものと思われ、先にみた複数の小首長を統合した有力首長の存在を想定すべきであろう。また、大東川下流域で展開する蓮尺茶臼山・吉岡神社・田尾茶臼山古墳の有力首長墓系譜も後二者間に若干の断絶時期が見られることからすれば、丸龟平野東半部全域をその勢力圏に想定すべきかもしれない。



第7図 車塚古墳



第8図 犬塚古墳



第9図 大道墓地古墳



第10図 宇閉神社古墳横穴式石室

快天山古墳に後続する大型古墳は栗熊地区には見当たらず、かわって5世紀代には周辺地域に中小古墳が数多く築造されるようになる。西方の岡田台地上には前方後円墳の可能性もある車塚古墳を中心として數十基からなる岡田万塚古墳群が形成されている。車塚古墳は出土遺物に乏しく時期決定が困難であるが、周辺の多くの古墳が発見されている古式須恵器が検出されていないことからみて5世紀前半以前の所産であろう。岡田万塚のうち現存するのは光熙寺墓地古墳、北ノ宮古墳、大塚、大道墓地古墳、富野氏東古墳のみであるが、古式須恵器・玉類・冑等の出土を伝える古墳も數多く古式群集墳として理解すべきであろう。万塚の東方約2kmにはやはり古式須恵器の出土が知られる小円墳の北原古墳が所在している。

羽床盆地でも快天山古墳に後続すると考えられる径35mの津頭東古墳に続き、古式群集墳の築造が顕著となる。これまでに知られているだけでも岡の御堂古墳群・浦山古墳群・津頭西古墳・城下古墳群・滝宮万塚古墳群・中尾古墳群・御山古墳群・末削古墳群等が挙げられ、県内でも際立った当該期の古墳密集地域である。綾歌町北部でも地神山古墳群、飯山町に入るが城山古墳群等中小古墳群が点在している。このような大規模前方後円墳の終焉後甲冑をはじめとする武器類を副葬した中小古墳群が急増する地域としては、他に大川郡内の富田茶臼山古墳周辺地域が挙げられる。両地域が相前後して大きな歴史的変動を経験したことと示す事象と考えられよう。

長い古墳断絶期を経て後期には再び南部の丘陵地帯に古墳が築造されるようになる。単独で立地し比較的大型の横穴式石室を持つ宇門神社古墳、畦田1号墳、津森穴薬師古墳等が開口している。また、畦田1号墳南の約150mには6基からなる畦田古墳群が所在する。いずれも石材の盜掘を受けたため大きな陥没が見られるが、視界の狭い奥まった谷筋の緩斜面部に築造されているという立地面が注目される。ただ、巨石墳や大規模群集墳の築造がみられない点は後期古墳文化受容の面での後進性を感じさせる。続く白鳳期に至って県内各地で建立が始まる古代寺院の造営が綾歌町内では行われなかったが、後期古墳の退潮性にみられる有力氏族の不在に起因するものとみなしてよいであろう。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて造墓活動で活況を呈してきた町南部の丘陵地域が再び注目されるのは中世後半に至ることである。長尾大隅守元高が城山の西長尾城に拠って東方の高見峰山塊にも栗熊城を築くなど鶴足・那珂群に勢力を伸ばし、豊臣秀吉によって滅ぼされるまで二百年以上その一族が勢力を保ち続けた。今、南部丘陵には大規模レジャー施設が建設され、再び脚光を浴びようとしている。閑静な山村地城が3度目の大きな歴史的転換期を迎えてみるとみなすことができる。

第4章 1号墳

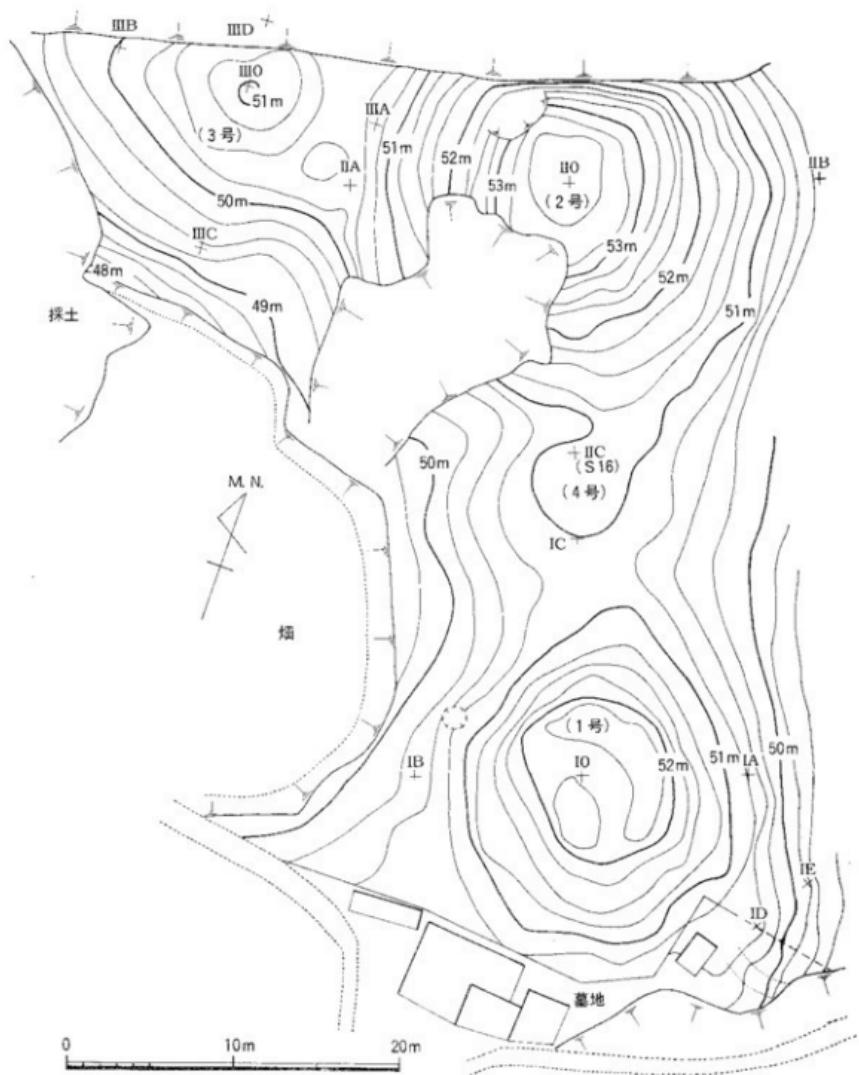
1 墳丘の形状及び規模

古墳群南端に築造された古墳である。古墳が築造された位置からは南東方向に細長い馬の背状の尾根筋が延びており、1号墳は両尾根の接点付近を利用して築造されている。かつて墳丘上のほぼ中央部に電柱が立てられ、後述の第1主体部が一部改変を受けているほか、東方向への突出部上には石碑が建立されて若干の削平を受け地山面が露頭していた。その他の部分の遺存状態は比較的良好である。また、第2主体部は昭和26年に発掘調査が行われ人骨等が発見されている。

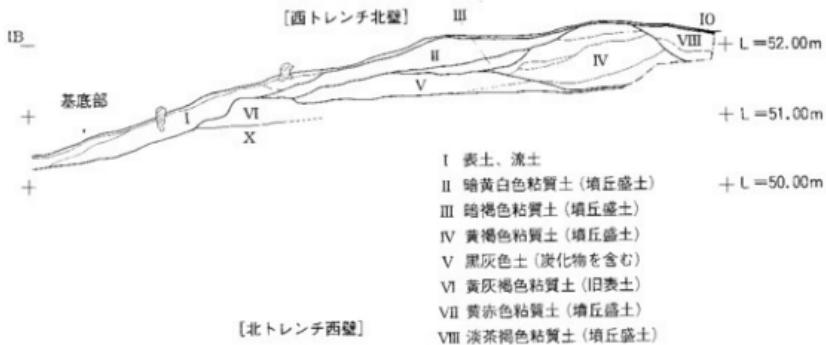
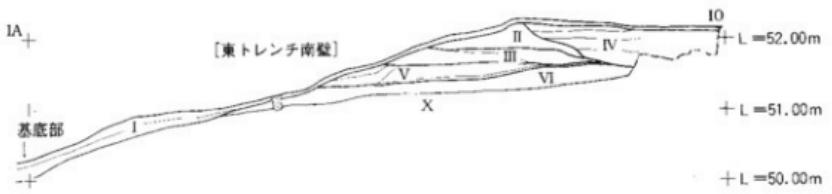
主丘部では墳丘南側で幅50cm～1mの溝状遺構が検出された。位置関係からみて1号墳に伴うものと考えられる。50.48mでの検出時点では第14図に示すとおり幅約1m、深さ約15cmを測るものであった。この溝状遺構は墳丘北西隅部付近で立ち上がり消滅する。また、南西隅部付近でも次第に幅が狭くなり立ち上がる。したがって、墳丘周囲を取り巻く周溝を構成するものではなく、南側面の側溝とみなすべきものである。丘陵の上方部に構築されていることからすれば、堀切り状をなす溝でもある。墳丘北側面については溝状はなさないものの、墳丘斜面部において50.55mの位置を境に傾斜角度が変換する。すなわち上方側は23°前後であるのに対し下方側は32°前後の傾斜角度をもつ。また、この傾斜変換点は局地的なものではなく、墳丘北側側面で一様に確認された。注目されるのはこの傾斜変換点と先述の南側測溝の肩とがほぼ同一レベルに設定されていることである。側面の基底部を同一レベルに設定することを明確に意識した所産であると考えられる。なお、この下段の急な傾斜部の外側は幅1～2mの平坦部があり、立ち上がりは検出されなかった。したがって、側溝を構成するものとはなっていない。

墳丘西側はやはり側溝は検出されなかったが、50.20m～50.30mの位置に傾斜変換点が検出された。レベル的に墳丘側面側より若干低くなるのは、この斜面部が尾根筋の傾斜部にかかる位置であることから地形に制約された結果とみなすことができる。この傾斜変換点の示すラインも墳丘北側と同様直線的である。

以上のとおり墳丘3方の側溝、傾斜変換ラインはいずれも直線的であり、また特に側面のコンターラインも直線的である。当初この主丘部は円丘であるとみなして墳丘発掘を行ったため各隅部の屈曲部を明確にできなかったが、以上の状況証拠から主丘部は方形の平面プランをもつものとみなすことができる。

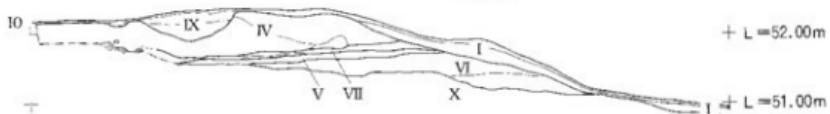


第11図 調査前の墳丘測量図



[北トレンチ西壁]

- I 表土、流土
- II 暗黃白色粘質土(埴丘盛土)
- III 暗褐色粘質土(埴丘盛土)
- IV 黃褐色粘質土(埴丘盛土)
- V 黑灰色土(炭化物を含む)
- VI 黄灰褐色粘質土(旧表土)
- VII 黄赤色粘質土(埴丘盛土)
- VIII 淡茶褐色粘質土(埴丘盛土)



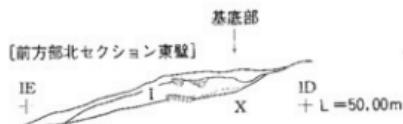
基底部

IC + L = 51.00m IX 茶褐色土(後世の攪乱)

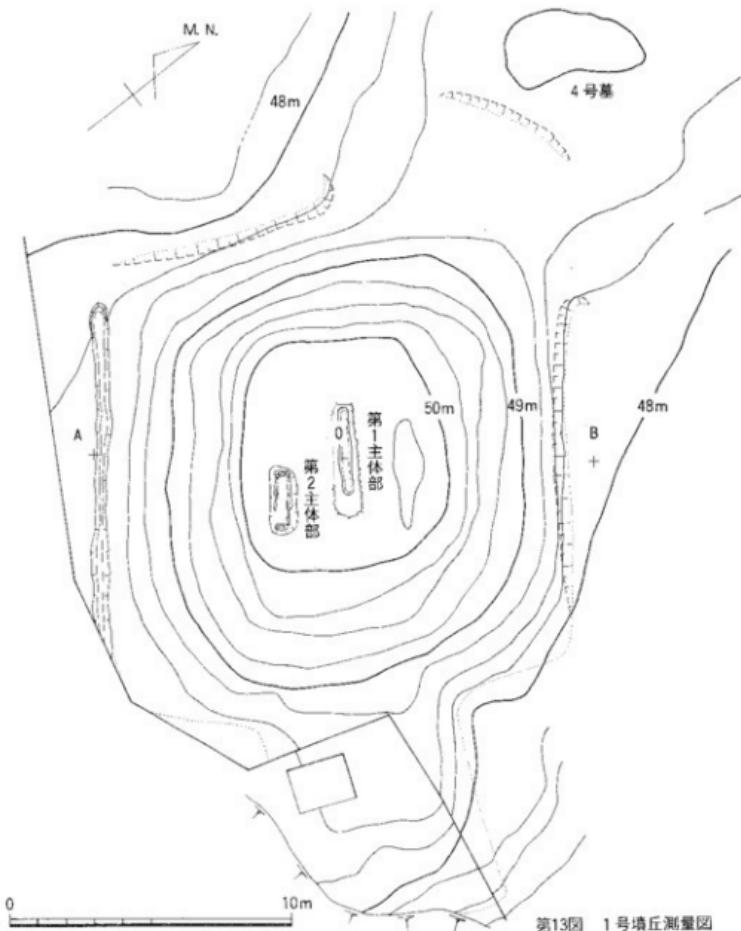
X 黄白色、灰褐色粘質土(地山)

4 号墓

0 1 2 3 4 5 m



第12図 1号墳土層図



第13図 1号墳丘測量図

墳丘東側については基底部ラインは北東、南東両隅部から4mほど直線的に内側に走るが、いずれも直角的にくびれて東側に向かって再び直線的に延びる。この突出部は幅は約8メートルをはかり、先端部に至まではほぼ同幅である。基底部からの比高は北側で0.6m、南側で0.4mをはかる。上面は平坦であるが先端に向かってゆるやかに下り、くびれ部から4.5mほど東側で1m以上の比高をもって急激に下る。この先端部は調査区域外であり、道を構築する際に掘削を受けている部分であるため基底部の位置は不明瞭であるが、旧地形からみてもこの急傾斜

部分以東に続くことは想定しがたい。長さについては6mと考えておく。

以上の検討結果を総合すれば1号墳は前方後方墳であるとみなすことができる。規模については以下のとおりである。

(墳丘長)	23m	(前方部長)	6m
(後方部長)	17m	(前方部幅)	8m
(後方部幅)	16m	(前方部高)	0.6m
(後方部高)	1.8m		

墳丘主軸方位はS56°Eで、前方部は先述の南東方向に延びる尾根筋を利用して築造している。この主軸方位は後述するとおり主体部の主軸方位にはほぼ一致する。また、後方部は主尾根の主軸方位とは斜行する方向に設定されている。墳丘の傾斜角度は17°～23°であり、比較的緩やかである。また、葺石、列石等は施されていない。

形態的には前方部が極めて短く低いという特徴がある。前方部先端は基底部を明確に設定したかどうか不明瞭であるが、尾根斜面部へと自然に連続していた可能性もある。とすれば、この前方部は主丘部へ至る道としての機能を有していたものと考えられ、むしろ突出部とみなすべきものとなる。後方部は頂上に東西約8m、南北7mをかる長方形の平坦部がみられる。墳丘主軸方向に長い平坦部は主体部の規模、形状に関連し、一方で基底部各辺の規模の相違にも連動している。

後方部は側溝、傾斜変換により南、北、西の3方の基底部を明確に設定しているが、北西部については幅約9mにわたって一段高く張りだした部分がみられる。北辺、西辺の溝状の削り込みを途中で収束させて削り出したもので、比高は0.3mと低いながらも突出部に近い形状を示すものである。一方で隣接する4号墓との関係をみると、この北西隅部は基底部から4mほど外側まで4号墓の墳丘を弧状に削り込んで広いテラス面を形成した部分でもある。したがって、前方部あるいは道としての機能を想定することは困難であり、類例もないためその機能についてはわからない。ただ、この張り出し状テラス部は1号墳の墳丘成形時に併せて構築されたものであることは土層から明らかであり、この縁辺部までを古墳の兆域とみなすことができるとともに、その中でなんらかの機能を果たしていたものと考えられる。また、この張り出し状テラス部の構築に際して4号墓の墳丘を削り込んでいることからすれば、1号墳は4号墓より後出するものとみなしうる。

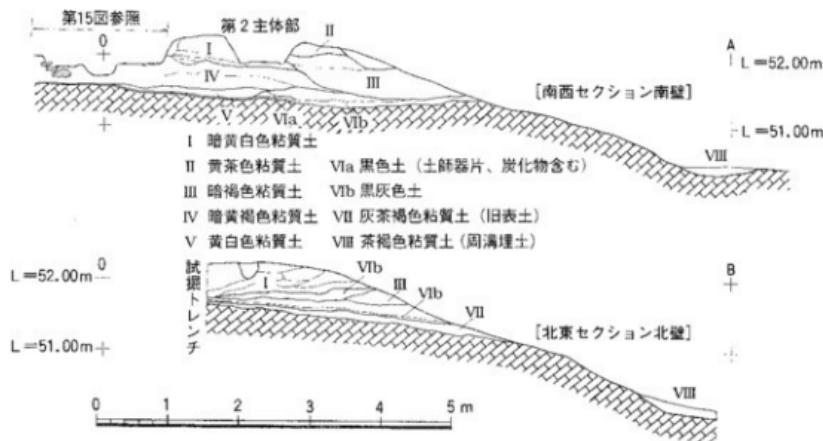
2 墳丘の築成

後方部は1～1.2m地山を削り出して1辺11m程度の概ね平坦な方形基壇部を形成した後、0.6～1mの盛土を施して築成している。前方部についてはすべて地山削り出しによって形成

している。

盛土で注目すべきは地山直上に認められた炭化物を含む黒色土の存在である。地山削り出しによる基壇状平坦部の全域を覆うもので、主体部の礎床直下にも認められた。墳丘中央以東では1~4cm程度の薄い層であるが、W2~4にかけての部分は厚さ20cmと極端に厚くなり弥生土器あるいは土師器を比較的多く包含している。土器は細片が多く器種、時期等を特定できなかった。0~W2にかけての範囲は地山面が低く黒色土も最も薄い部分であるため、5~15cmの厚さに黄白色系の粘質土を充填し、黒色土と上面レベルを合わせている。先述の地山成形面は全体として概ね平坦ではあるが、東半部は緩やかな傾斜が、西半部には小規模な凹凸が観察される。それに対し、この黒色土と黄白色粘質両層の上面が形成する平坦部はより水平に近く、特に主体部付近でこの傾向は顕著である。また、この上面平坦部は第1主体部構築上の基礎ともなっている。したがって、墳丘及び石室構築状の基盤としての機能をこの両層が発揮することになり、黒色土が古墳に伴うものであることは明らかであろう。また、炭化物の存在は從来から言われているように、古墳築造に際して植生を焼き払う儀礼の存在を推測させる。

黒色土上の盛土は黄色あるいは褐色系の粘質土であるが、土層観察よれば墳丘東側から順に盛土が行われたことを示している。特に、第2主体部以西の部分はその他の部分の盛土がほぼ完了した後一気に盛られた様子を示しており、石室を含めた墳丘構築手法を復元する上で示唆的である。この点については第3節以下で検討を加える。



第14図 1号墳墳丘たちわり土層図

3 第1主体部

後方部には2基の埋葬施設が築かれている。中心主体部には竪穴式石室、その南側にほぼ平行して箱式石棺が築かれているもので、以下前者を第1主体部、後者を第2主体部と呼ぶことにする。第1主体部は後述するように通常の形態・構造とは異なるが、その略式と考え便宜的に竪穴式石室と呼称する。この石室は南側壁の中央付近と西端付近に大規模な攪乱がみられ、粘土棺床及び石室石積みが改変を受けているが、北半部は比較的保存状態が良好である。

(1) 位置

竪穴式石室は後方部のほぼ中央に構築されている。墳丘横断面をみると、基底部推定ラインの中心が粘土棺床の中央部にあたっており、極めて正確に墳丘中央へ位置決定がなされたものと考えられる。また、石室方位もS 56° Eで墳丘主軸に一致する。後述するように石室構築は墳丘築成と併行して行われているから、古墳築造当初から正確な企画に基づいて石室位置が決定されたものと評価される。

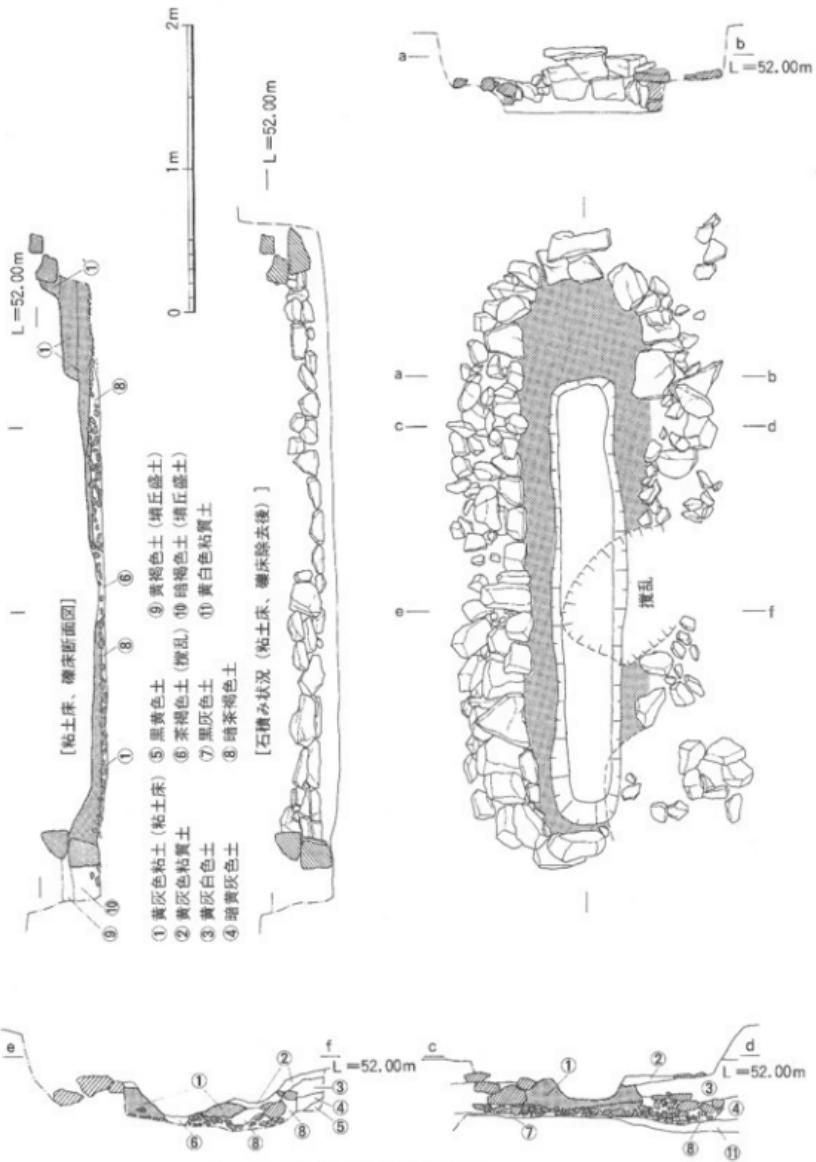
粘土床及び石積みの基盤となる礫敷きの上面の標高は石室中央部で51.66mであり、墳頂からは約0.6m下に、基底部からは約1.15m上に設定されている。

(2) 構造

この石室は調査当初の上面精査時に墓壙が検出されず、周囲にその検出のためにトレンチ調査を行っても検出されなかった。最終的に石室を横断する形で墳丘立ち割り調査を行ったところ、石積みと墳丘盛土が併行して行われていることが確認された。したがって、この石室は通常の竪穴式石室のように墳丘盛土後掘込まれた墓壙内に構築されたものではなく、壁体構築と墳丘盛土が併行して実施されたものである。

墳丘盛土との関係でいえば、地山直上にみられた水平な黒色土及び黄白色粘質土上を基盤面として石室が構築されている。この基盤面上には3~10cmの大の中礫が敷きつめられている。礫敷き範囲は南北約4.7m、東西約1.8mで、粘土床、壁体及びその控え石積み下に一様に敷きつめられている。礫敷きを行う時点では墳丘盛土は行われておらず、周囲は黒色上面の平坦部が広がっている光景が想像されるので、この礫敷きにより石室の位置や規模、方位等を決定したものと考えられる。礫敷きの厚さは5~10cmで、上面はほぼ水平に整えられている。

礫敷き直上には粘土棺床及び石室壁体が構築されている。壁体は小児頭大~人頭大の塊石を積み上げたもので、1~3段が残存する。石材はほとんどが安山岩で、加工痕の認められない自然石である。南側壁は盜掘・攪乱等により遺存状態が極めて不良であったが、北側壁及び両短側壁は比較的良好に残存する。石室の内法は長さ4.04m、幅は東端付近で0.94m、西端付近は攪乱が著しいが推定0.75mをはかる。幅については東から西に向かって次第に狭くなる形態となっている。四隅は直角をなさず隅丸を呈している。特に2段目の石はいわゆる三角持ち送



第15図 第1主体部実測図

りを行っている。

北長側壁の石積みは1～3段のみ残るが、2～3段残る部分の上端レベルは51.88mで一致する。また、南側壁でも遺存状態が良好な東端付近の上端レベルは51.88～51.90mとほぼ等しい。南側壁の石積みがみられない部分では粘土床に至まで水平な填丘盛土が観察され、石材盗掘が行われたとは考えられない部分もみられる。また、石室内に転落した石は数個程度で壁体をさらに高く積み上げていたと推定しうるほどの数ではない。したがって、北側壁についても石材盗掘等は行われず、本来から1～3段積みの極めて低い壁体構造であった可能性が高い。両短側壁についてはいずれも2段持ち送りに積み上げて構築しているが、両者の上端レベルも52.0m前後でほぼ一致する。この部分についても本来の形状を留めるものとみてよいであろう。こうみると長側壁と短側壁の上端レベルに約10cmの比高差がみられることになる。

壁体周囲には小塊石による控え積みが施されている。壁体と同様の石を使用し、壁体周囲の30cm～50cmの範囲に充填されているものであるが、この構築手法についても南北両長側壁間で相違がみられる。北側壁については壁体を構成する石の間を埋めて安定させるとともに上面を整えるなど丁寧な作りをしている。特に壁体を安定・強固にするための控え積みである点に特徴がある。南側壁については石の使用量については変わらないものの、壁体の石を欠く部分についても同様に控え積みのみ施されている部分が見られる。したがって、壁体を安定させるための控え積みではなく、別な用途のための敷石であったと考えるべきものである。また、壁体の石を欠きながらも控え積みは一様に施されていることからすれば、この控え積み（敷石）の方がむしろ主であった可能性も指摘できる。この点は以下の粘土床との関係で検討していく必要がある。

壁体構築は先述のとおり填丘盛土と併行して実施している。すなわち、塊石を1段あるいは2段控え積みとともに積みながら、外側には黄褐色、黄灰色粘質土を充填して両者を同時に構築するするというものである。

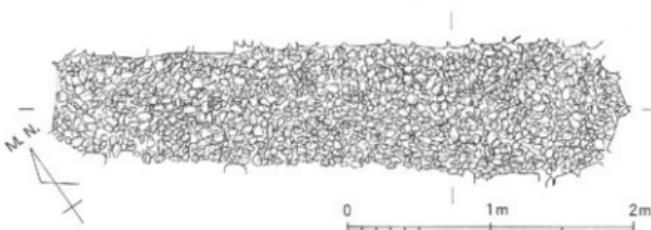
壁体の内側には粘土が充填され棺床を構成する。この棺床部は通常の粘土床とは異なり棺と壁体との間を粘土で充填するもので、棺外は堤状をなさず壁体まで上面を水平に埋めてしまっている。したがって、粘土床構築時には壁体の石積みは覆い隠されることになる。棺位置は石室西短側壁寄りに設定されており、東短側壁側は棺部と壁体との間に75cmもの間隙がある。この間隙にも粘土が上面水平に充填されており壁体をほぼ覆い隠している。棺床部は断面U字形に凹み、その内法は上端で長さ3.14m、幅45cm～55cm、深さ16cm～20cmをはかる。粘土の厚さは棺床部で3～5cm、壁体と接する水平充填部で20cm～25cmである。棺床底面は東側が若干高く東西両端で4cmの比高差がある。また、東端部は垂直に近い立ち上がりをみせるのに対し、西端部は緩やかに立ち上がるため棺端の形状に差異があった可能性もある。断面形状から樹木の半裁による割竹形木棺あるいはそれに近い形状をした木棺の棺身の使用は想定されるが、棺

蓋部の被覆粘土の存在は確認されず、より上方には石室壁体も構築されていなかったと推定されることからすれば、棺蓋の存在及び形状については確定的なことは言えない。もし、割竹形木棺の棺蓋が存在したとすれば、墳丘の盛土による被覆がなされていたことになる。

粘土床設置と壁体構築との先後関係については、粘土が石積みの間隙にも充填されていること、棺位置が極端に西寄りに設定されていること等から、壁体構築後に粘土床が設置されたものと考えられる。石室の壁体がまず墳丘盛土とともに構築され、次に石室長より90cm短い木棺を安置する位置が西短側壁寄りに設定され、最終的に両者の間隙を粘土で充填したという構築過程が想定できる。

この粘土は壁体との間を埋めきっているばかりでなく、一部は壁体上まで及んでいる。したがって、粘土床設置時点で石室壁体は埋設されていることになり、その壁体としての機能は消滅することになる。埋設された部分以上には壁体は構築されていなかったと推定されたことからすれば、石室自体の機能喪失としても把握される。これまで便宜的に竪穴式石室と記述してきたが、その呼称自体にも再検討の必要があろう。この点については第8章で検討を加えることにする。

蓋石についてはその存在を証明するような大型石材は検出されなかった。木棺の棺蓋が存在したとすれば蓋石を架構するには壁体をさらに高くしておく必要があるが、石積みによる残存部以上の壁体構築はなかったものと推定されるから、土壁等による壁体が構築されていたことになる。このような構築は事実上不可能であろう。また、木棺を墳丘盛土により被覆していたとすれば、蓋石架構の必要はない。したがって、蓋石は本来無かったものと考えるのが妥当であろう。また、石室内及び周辺に朱の使用は確認されなかった。石室内の遺物も皆無であった。

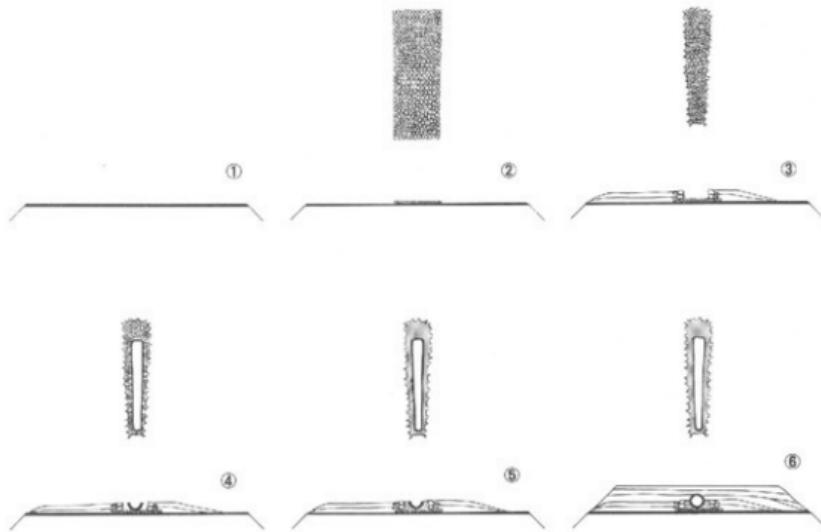


第16図 砧敷き実測図

(3) 石室及び墳丘構築過程の復元

以上、石室形態の様々な特徴について個別に記してきたが、ここで石室構築過程について整理しておきたい。なお、この石室は墳丘盛土と併行して行われているので、その築成過程も含めて整理しておく。

- ① 地山整形後後方部の平坦部上に、薄く黒色土が敷かれる。同層中には炭化物・土器片の混入がみられることからこの敷設は意図的というよりはむしろ、草木を焼き払い墳丘築造に先立つ祭祀を行った結果として形成された可能性が高い。
- ② 後方部中央に石室の基盤となる小礫が敷かれる。この時点で石室の位置、方位、規模が決定される。
- ③ 石室の石積みが控え積みとともに行われる。その際、その周囲は墳丘盛土が併行して行われ石積みを固定していく。
- ④ 高さ20cm～25cmの壁体完成後、木棺の身が搬入され石室西側付近に安置される。
- ⑤ 木棺と石室壁体との間隙に粘土が充填され棺身が固定される。この時点で石室は被覆されその主たる機能を喪失する。
- ⑥ (棺蓋設置後) 墳丘盛土が行われ棺を被覆するとともに、墳丘を完成する。



第17図 石室構築過程模式図

4 第2主体部

第1主体部の南側にほぼ平行に構築された箱式石棺である。発掘当初蓋石が一面に敷き並べられていたため未盜掘ではないかとの期待もあったが、調査が進むにつれ昭和26年に行われた発掘調査時の石棺写真と符号することが判明した。その時の写真には石材の大半が除去された状態の石棺が写されており、現存する石材のほとんどが現位置を留めるものではないことも判明した。また、調査を担当された大林英雄氏より、石棺中から人骨を発見したがそのまま元の位置に埋め戻したという証言も得られた。

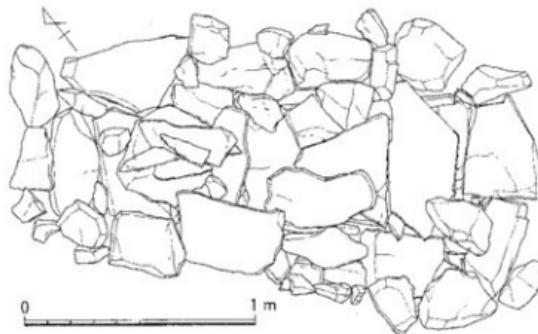
(1) 墓 墓

大半の石材が移動を受けているため全容は明らかではないが、残存する石材と抜き取り跡から大まかな構造の推定は可能である。この石棺は墳丘頂上から掘込まれた墓壙内に構築されたもので、この点から第1主体部より後出することは明らかである。石材抜き取り時に攢乱を受けた部分もあるが、墓壙の規模は長軸2.47m、短軸1.02mをはかる。深さは床面まで約25cmであるが、側壁の棺材設置部分には溝状に10~15cm程度の深掘りが行われている。また、石材は残存していないが両短側壁ともに棺材設置のための深掘りが検出された。この深掘りは北側のものは長さ64cm、20cm、南側のものは長さ51cm、幅21cmをそれぞれはかり、深さはいずれも約30cmをはかる。かなり大型の石材を立てて使用していたものと推定される。

第1部主体部には墓壙が掘削されなかったことから礫床が石室の位置等を決定したが、第2主体部についてはこの墓壙が石棺の位置、方位、規模を決定していることになる。

(2) 構 造

東西両長側壁とともに2枚合わせて4枚の側壁石が現位置を留めるのみであったので全容は明かではない。抜き取り跡を含めれば東側の長側壁は2枚、西側のそれは3枚の板石を使用して



第18図 第2主体部上面図

いたことになる。石材は安山岩を板状に加工したもので、長さは最大のもので1.26m、最小のもので67cmとばらつきがあるが、幅は30cm前後、厚さは5cm前後に統一されている。短側壁は掘り方からみて厚さ10cm前後の比較的厚い石材が使用されていたものと推定される。

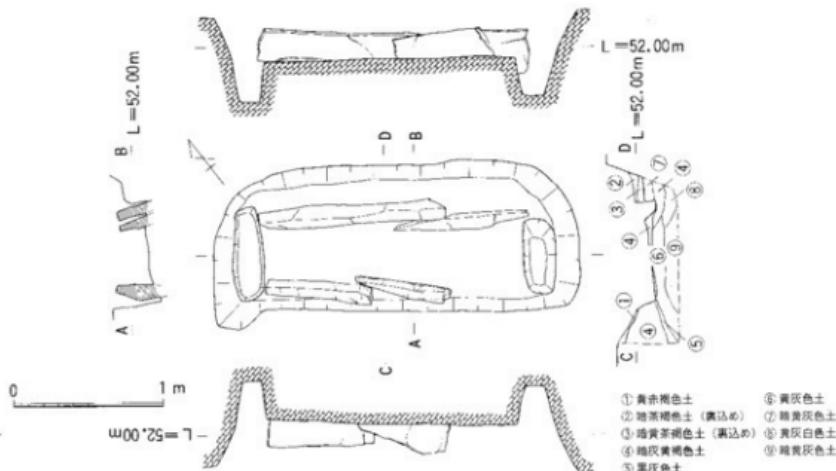
長側壁は内傾気味に板石を立てているが、溝状の掘り方の中に10cm程度埋設することにより安定させている。南からみて北側の板石が外からハの字形に挟み込むように立てており、上面はほぼ水平に整えられている。

先の調査でその他の石は移動を受けているが、側壁石と墓壙壁の間には人頭大の塊石が埋め戻されていた。これらの石が本来この位置に存在したとすれば、裏込めあるいは控え積みの石であったことになる。側壁石上に数段、石室状の石積みが行われていた可能性も高い。また、側壁石の上には蓋石を構成していたと推定される安山岩の板石が隙間なく敷き並べられていた。現位置は留めていないが、これらの板石が蓋石を構成していたことは間違いないまい。

(3) 規模・方位

石棺の内法は長さ1.75m、幅35cm~45cmで、床面までの深さは20cm前後である。主軸方位はS52°Eで第1主体部より4°南に振っている。

床面は墓壙を掘り込んで形成した平坦部をそのまま使用しており、貼土や敷石は認められなかった。床面のレベルは51.91~51.94mで、第1主体部より25cmほど高い位置にある。また、東に向かって床面は次第に高くなっている、東西両端付近近くでのレベル差は3cmほどである。



第19図 第2主体部実測図

(4) 頭位

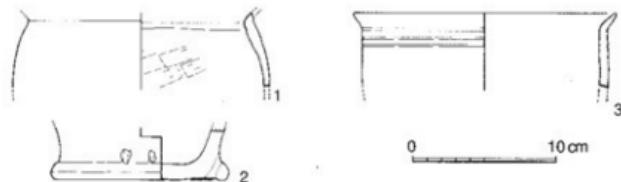
石棺の東端付近からは頭蓋骨が出土した。先の調査時に一旦掘り出されたが原位置に埋め戻したということなので、頭位が逆になるほどの移動は受けている。床面も東に向かって若干上昇しており、東頭位の埋葬が想定される。

5 遺物

1号墳は主体部からの出土遺物が皆無であり、墳丘外からも近世土師器が出土したのみであった。したがって、遺物から築造時期を特定するのは不可能である。第1主体部は西半部で粘土棺床下まで攪乱が及んでおり、その他の部分も棺床部まで墳丘盛土とは異なる汚れた土が入り込んでいたため、かなり徹底した盜掘が行われたものと考えられる。本来は棺内副葬品が存在した可能性は認められるが、棺外遺物及び石室外遺物は皆無とみなしてよいであろう。

図示したものは墳丘盛土の黒灰色土中から出土した弥生土器である。①は甕体部で、内外ともに茶灰色を呈する。口縁部との屈曲は比較的明瞭である。焼成不良で特に外面の摩滅が著しく調整は不明であるが、内面は斜め方向のヘラケズリが認められる。3mm以下の石英、長石をやや多量に含む。②は不明土器底部で、底径12.6cmをはかる。底部外縁部に突帯を貼付け肥厚させている。突帯の上方には内下方に向って2孔1対の穿孔がみられる。焼成良好で赤褐色を呈するが、表面の剥離が著しい。内外面ともにヨコナデ調整を施す。5mm以上の石英、長石粒を多量に含む。③は弥生前期後半の甕で、体部に3条のヘラ描沈線を巡らす。如意状口縁部をもつが端部は剥離し刻目の有無は不明である。暗灰黄色を呈し、粘土は粗い。

これらは時期決定が困難であるが古墳の築造年代とはかなり懸け離れており、旧表土中に包含されていたものと推定される。とすれば、古墳築造に際して旧表土は残したまま削り取ることなく伐採と焼き払いの儀式が行われたものと考えられる。



第20図 1号墳出土遺物実測図

第5章 2号墳

1 墳丘

古墳群の北東端に位置し、西は3号墳、南は4号墓に接している。

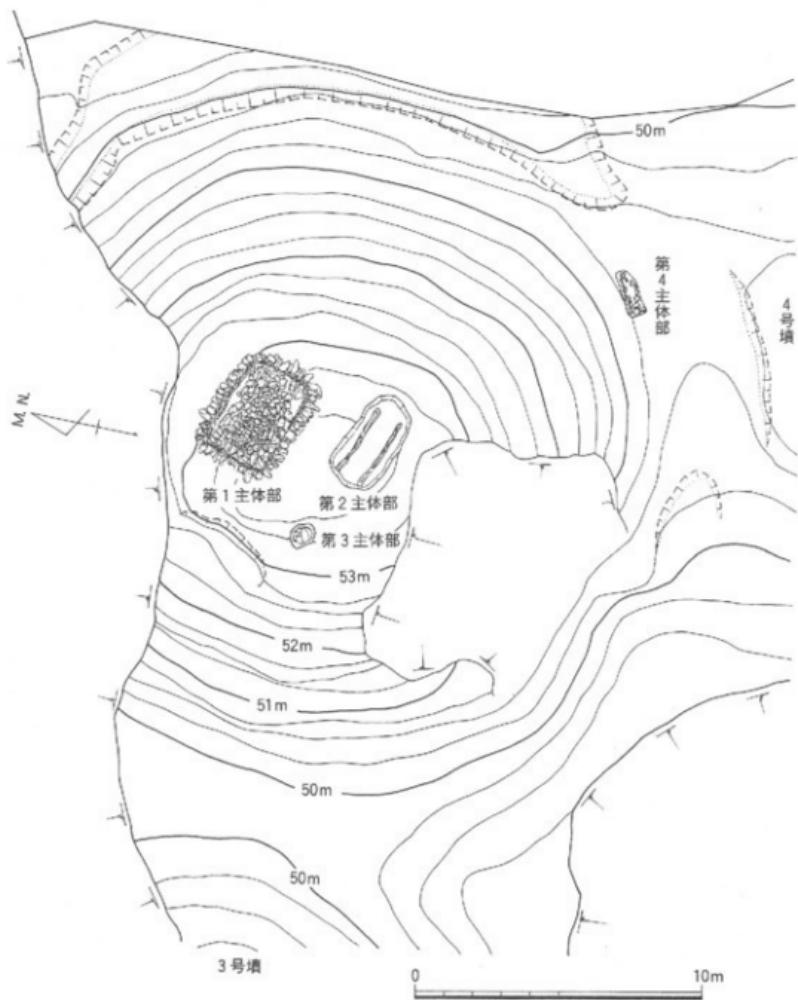
墳丘は北側3分の1程度が琴電建設工事により削られており、南西の斜面部も幅約10m、奥行約6mにわたって採土工事により掘削されている。その他の部分は比較的整然としたコンターが巡っており、掘削部分に突出部の存在は考え難いため円墳と考えられる。規模は直径が約25mをはかり、高さは東西両側からは約3.7m、南側からは約3mをはかる。墳丘の傾斜角度は18°から28°の間に分布し、平均角度は24°程度である。墳丘頂上部には径10m程度の平坦部がみられる。

墳丘南側の4号墓と接する部分は4m程度の幅をもつテラス面が認められる。このテラス面は同幅で10m程の長さにわたって墳丘を巡るが、墳丘基底部ラインと平行に円弧状に形成されているため2号墳に伴う施設と考えられる。テラス面を形成する際には4号墓の墳丘を一部削り取っているため、2号墳が後出することは明らかである。テラス面をもつのはこの部分のみであり、その他の部分は浅い溝状遺構を設けるなどして基底部を明確化している。特にテラス面の両側には明瞭な溝状遺構が掘削されており、相対的にテラス部分を削り出すことによってあたかも陸橋部のように見せかけている。このような陸橋状テラス部分の構築手法は1号墳の北西隅部に共通するものである。

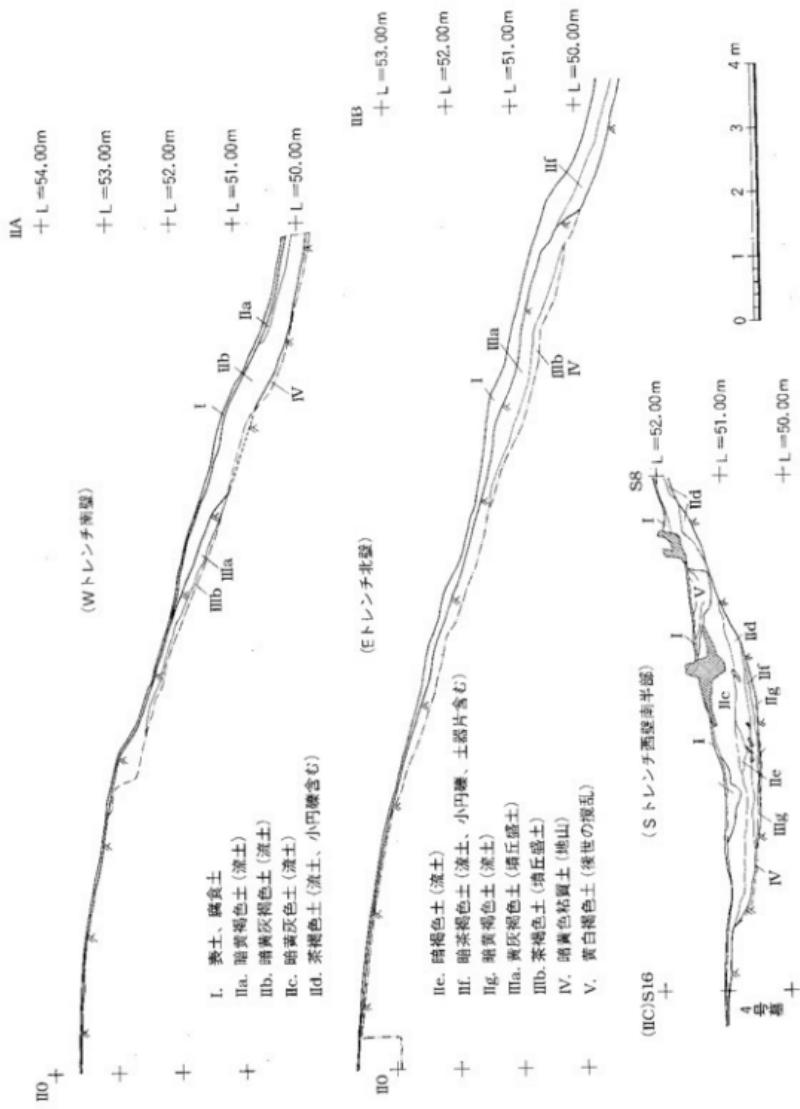
墳丘東側の溝状遺構は幅2~4m、深さ30~60cmをはかる。北側付近で浅くかつ狭くなるため、墳丘北側には構築されていなかった可能性もある。とすれば、墳丘の東側のみに構築されていたことになり、その意義を検討する上で興味深い特徴であると言えるであろう。遺物は土器片が小量出土したのみであった。

墳丘は1.2mほど地山整形による削り出しを行った後、2~2.5m盛土を施して築成している。この地山整形面上には1号墳でみられたような薄い炭化物混じりの黒色土層は認められなかつた。古墳築造に対する意識の違いを表わしているのかもしれない。また、後述するように第1主体部は墓壙掘り方を伴わず石垣状をなす墓壙壁が石室周囲を取巻いているが、墳丘盛土はこの石垣状墓壙壁の構築と併行して行われている。

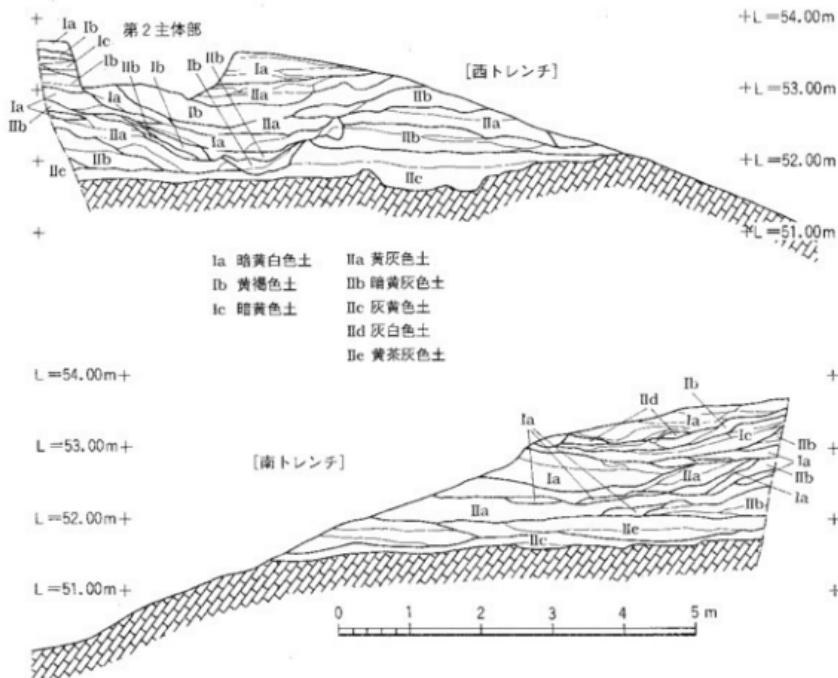
盛土の状況についてはおおまかに分けて、下半部は灰色系の粘質土、上半部は黄色系の粘質土で構成される。また、墳丘周縁部より中央部にかけて盛り上がるような土層からみて、盛土が墳丘中央部から順次外に向かって行われたことを示している。なお、1号墳のような墳丘盛土中からの遺物出土は認められなかった。



第21図 2号填堆丘測量図



第22図 2号墳土層図



第23図 2号墳埴丘たちわり土層図

2 第1主体部

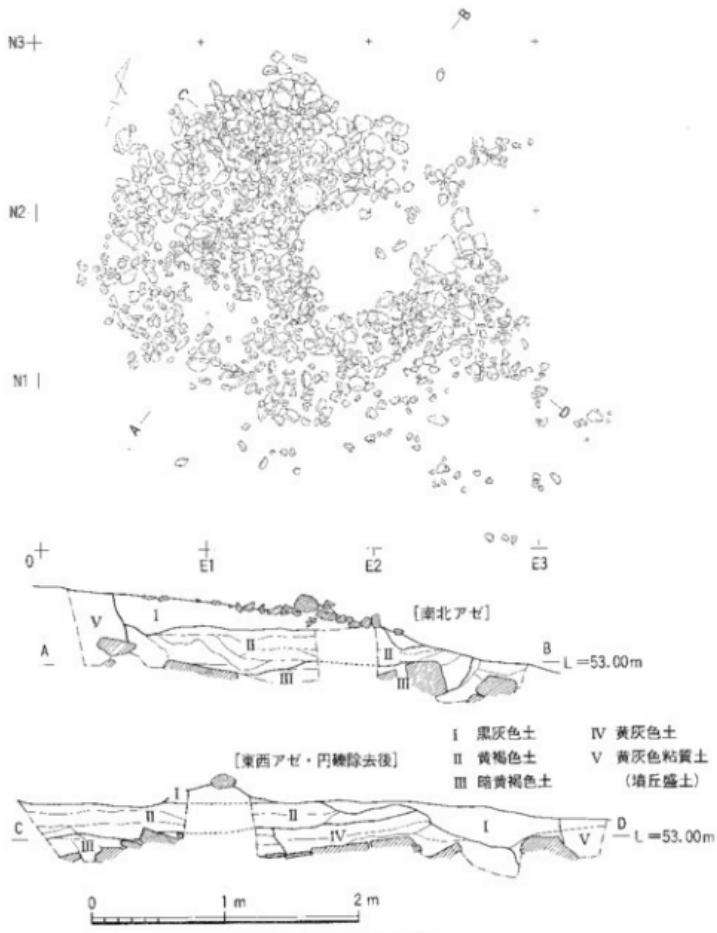
(1) 石室構造

墳丘中央よりやや北寄りの位置から検出された竪穴式石室である。第2章で述べたように石室上には白色円礫群が一面に敷かれていた。一部擾乱が認められるものの径約2.5mの範囲内に円礫を敷きつめられたもので、その範囲はほぼ石室上の全面を覆うものである。円礫の厚さは5~15cmである。ほとんどが拳大の小円礫であるが、中には人頭大の大型のものが含まれる。円礫群上にあるいはそれらに混じって弥生土器片、土師器片が小量出土している。

石室は円礫群の下約40cmから検出したが、その円礫群の下には墳丘盛土層と同様の黄灰色、

黄褐色系の粘質土層がみられる。これらは数cmずつ水平に堅く敲き締められながら盛られており、蓋石の被覆粘土は認められなかった。

この覆土を掘り下げるに安山岩の板石群を検出した。これらは比較的大型の扁平な割石で、10枚程度上面をほぼ水平にして並べられていることから、下部に存在する石室の蓋石に相当するものと考えられる。蓋石群の周囲は若干レベル的に低くなるが小兒頭大の塊石群が検出され

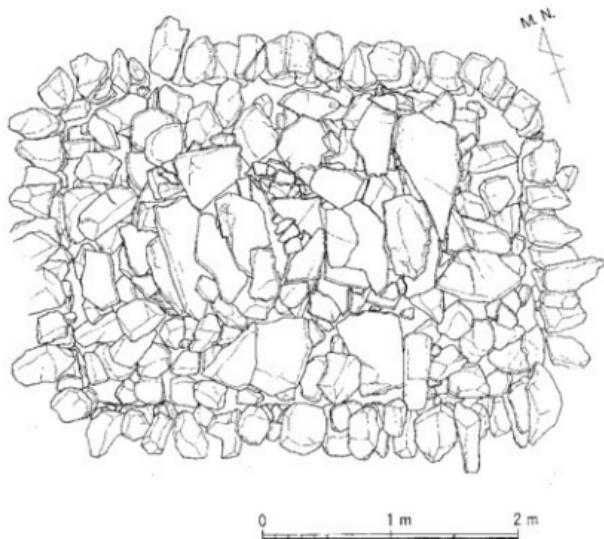


第24図 白色円陣群実測図

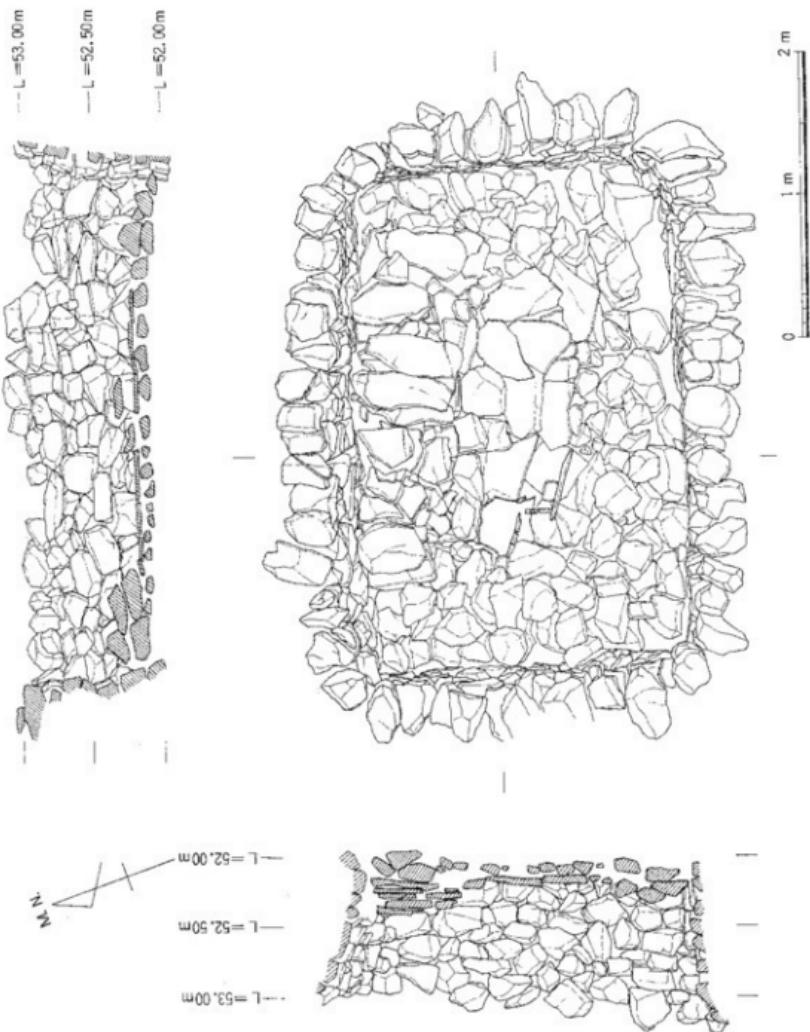
た。この塊石群は後述する石垣状の墓壙壁と板石群の間を埋めるように詰め込まれた状態で検出されており、石室壁体周囲の裏込め石に相当するものと考えられる。

蓋石群が整然としていたことから石室の保存状態は良好と思われたが、蓋石下にはやはり安山岩の板石が何重にも雜然と重なった状態で検出された。室と呼べるような空間を検出するため1枚1枚丁寧に取り上げていったが、全く検出されなかった。ただ、この板石群は蓋石下の幅1m強、長さ3m程度の範囲で集中して検出されており、また、その周囲は裏込め用の塊石群が墓壙壁間に充填されていたことから、本来は石室の壁体を構成していたものと考えられる。壁体を形成するため小口積みされていたものが、外的的な力によって内部に崩壊したものと推定される。なお、これら板石群及び塊石群の隙間に土はほとんど見られず、壁体安定用あるいは裏込め用に土は使用されていなかったものと考えられる。

石室の基底付近では、北側で旧状を留める板石の小口積みが検出された。2~4段が残存しているが、南側では同じ高さにまで塊石積みが行われた部分があり、壁体の基部構造に相違があることになる。底部は東西2.1m、南北0.8mの範囲にわって安山岩の板石が敷かれている。上面がほぼ水平になるよう敷かれていることから棺床としての機能を果たしたものと推定される。棺痕跡はないが、板石上には粘土床はみられず水平な板石敷が直接棺床として機能して



第25図 第1主体部上面図



第26図 第1主体部残存部実測図

いたことからみて、木棺を使用していたとすれば組合式木棺であった可能性が強い。板石の検出状況からは箱式石棺の存在は想定できない。棺規模については棺床部の規模を最大とみなすことができようが、正確にはわからない。板石の上面レベルは長軸方向については西端から東に向かって次第に高くなっており、最大で5cmの比高差がある。この比高差は棺の傾きにも反映されていたであろうから、頭位を高くしていたとすれば東頭位の埋葬を行っていたことになる。板石群の主軸方向から推定される棺主軸方位はS70°Eである。また、板石は南北方向についてはほぼ水平に整えられている。

この棺床部の板石敷と北側の板石積みによる壁体の間には、直列に4個並んだ塊石が検出された。この塊石列の中には壁体の下に挟み込まれた部分もあり、転落したものとは考え難い。組合式木棺を使用したと仮定すれば、その側板を外から固定するために置かれたものかもしれない。

短側壁側には板石の残存部は検出されなかった。この部分は内側への崩落を推定し難い位置であるため、板石の小口積みによる壁体構築は行われていなかつた可能性が高い。この部分は裏込めに使用されている塊石がほとんどを占めていたことからすれば、塊石積みによる壁体構築が行われていた可能性も考えられよう。

以上の状況から石室規模を推定すると長さ約2.1m、幅約0.6mとなる。規模の面からも組合式木棺の使用を想定するのが妥当であろう。また、高さについては壁体が崩壊しており確定はできないが、棺床の板石上面から蓋石まで約0.7mをはかる。

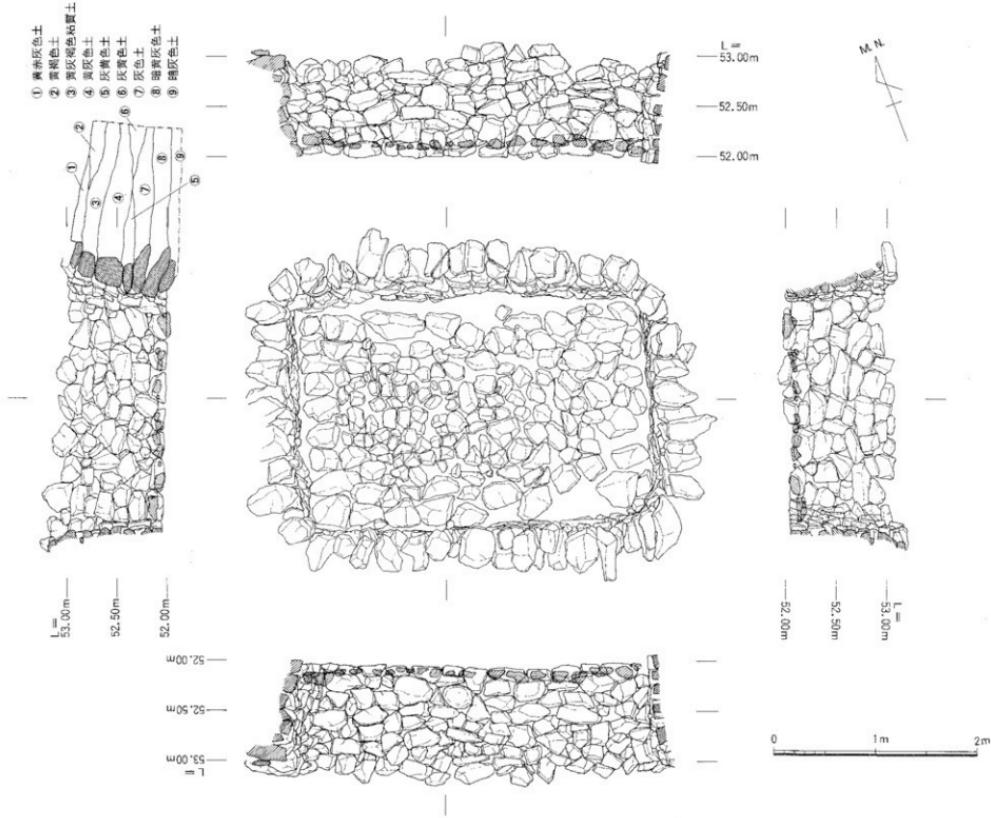
壁体と墓壙壁との間には小児頭大の塊石による裏込めが行われていた。部分的には板石を使用していたが土は混入されておらず、塊石間は空洞となっていた部分が多くあった。このような裏込め手法が壁体の不安定化を招き、その崩落につながったものと推定される。

石室西短側壁付近の棺床部板石直上から鉄剣2振等鉄器類が出土している。

(2) 石積み墓壙壁

石室及びその裏込め石群を包むような形で石垣状の石積み壁が構築されていた。石室の周囲ばかりでなく調査の最終段階で石室の下部にも敷石が検出されたため、全体的には石室を包む箱状施設とみなすことができる。石室を内包する施設であるため、通常の竪穴式石室にみられる墓壙に相当するものと考えられる。

壁体部は人頭大の塊石を6~8段積み上げるもので、若干上方にいくほど外開きとなるように構築されている。その内法は上面では東西3.65m、南北2.55m、下端では東西3.4m、南北2.3mをはかる。高さは0.9m~1.25mとばらつきがあるが、1m前後でほぼ統一されており、かつ石材盗掘の痕跡は認められなかつたので本来の高さとみるとできよう。なお、壁体石と石室蓋石群は上面をほぼ同一レベルに設定している。使用石材は安山岩、花崗岩等で、石室の裏込めに使用されているものと特に変わりはない。



第27図 石積の基壇検査図

底部はやはり一面に塊石を敷きつめていた。石室の基礎となる部分であり、上部の安定化のためには礫敷きが行われるべきであろうが、このように比較的大型の塊石を使用しているのは主に排水施設としての機能を果たせるためであったと考えられる。石材の使用方法は壁体のようにアッランダムではなく、上部の石室構造に合わせた規則性が伺える。すなわち、棺床である板石敷の下部にあたる範囲はやや小型の塊石を使用し、その周囲の裏込め石の下部には大型の石材を使用しているもので、石の大小に明確な相違がみられる。壁面と接する敷石群の外縁部にはほぼ直列に特に大型の塊石を使用している。石室下部の小塊石群中には一部大型の石材も含まれるが、扁平なものに限られその上面は小塊石群と水平になるよう整えられている。したがって、上部に棺床としての板石敷を想定しその安定化をはかるため小塊石を用いた敷石を行ったものと考えられる。また、小塊石群は東に向かって次第に大型のものを敷いて上面が少しづつ上昇するように配慮されており、それが結果的に棺床部の高低差に反映している。とすれば、東頭位の埋葬を行うため東に向って棺床部を高くする工夫は、この敷石段階から行われていることになる。なお、この敷石外縁部の大型石の中には壁体部の基底石上に乗りかかっているものもあり、敷石が外周の基底石設置後に行われたものと考えられる。

壁体部は内側の面を描いた石垣状の積石であるが、この上部には墳頂部まで先述のとおり約40cmの盛土が施されている。この盛土について興味深いのは、墓壙壁体部上にその内面と面を合わせるように垂直に近い盛土がまず行われ、その後内側の石室蓋石及び裏込め石上に充填するような盛土が行われているというものである。したがって、墓壙壁は石積み部まで完結するものではなく、墳頂部に至るこの盛土部分も墓壙としての機能を共有しているものと考えてよい。石室上面までの墓壙壁は石積みによる強固な壁体を構築し、それ以上の部分は盛土による壁体を構築するというように、この墓壙は2種の手法を使い分けて構築したものである。

壁体部が通常の竪穴式石室の墓壙に相当するとすれば、この墓壙壁を構築するための掘り方が存在するのかどうかが問題となる。すなわち、石積み墓壙壁を構築するためのさらに大型の土坑が墳丘構築後に掘り込まれているのかどうかという問題である。この点について確認するため石積み墓壙壁外の断ち割り調査を行ったが、掘り方の存在は確認されなかった。土層からは石を1段積み上げるごとに周囲を粘質土で固めている状況が確認されたので、むしろ墳丘盛土と石積みが併行して実施されたものと考えられる。とすれば墳丘完成と同時にこの石積みによる壁体も形成されることになり、この点がこの石積みは墓壙壁としての機能を果たしていたと考える所以でもある。

次に墳丘全体の盛土との関係について検討を加える。墳丘は先述のとおり地山整形により平坦面を形成した後盛土を行って築成している。この地山成形面のレベルは51.6m～51.7mである。その後30cm程度水平な盛土が行われ、再び52.0mの高さで水平面が形成されている。石積み墓壙壁の基底石は52.0mの高さから積み上げられていることからすれば、この第2次水

平面を基盤として構築されていることになる。したがって、墳丘築成過程の途中から石積み墓壙壁の構築が併行して開始されたものとみなすことができよう。

中心主体部であるこの竪穴式石室は位置的には墳丘中央より北寄りに構築されているが、その位置はこの石積み墓壙壁構築時に決定されていたことになる。それが墳丘築成と併行して構築されていたのであるから、墳丘築成段階では既に主体部の位置が決定されていたと考えられることも注目される点である。1号墳も墳丘築成と併行して竪穴式石室が構築されていたが、この石室は後方部の中央に設定されており、第2主体部の箱式石棺は墳頂平坦部の端寄りの位置に構築せざるを得なくなっている。しかし、2号墳の場合は当初から第1主体部が北寄りに設定され、第2主体部構築のためのスペースが確保されている。墳丘の中心点は両主体部の中間付近にあることからみて、墳丘築成時点で既に2つの平行する主体部を構築する意図があったものと考えられる。

なお、この主体部では赤色顔料の使用は認められなかった。

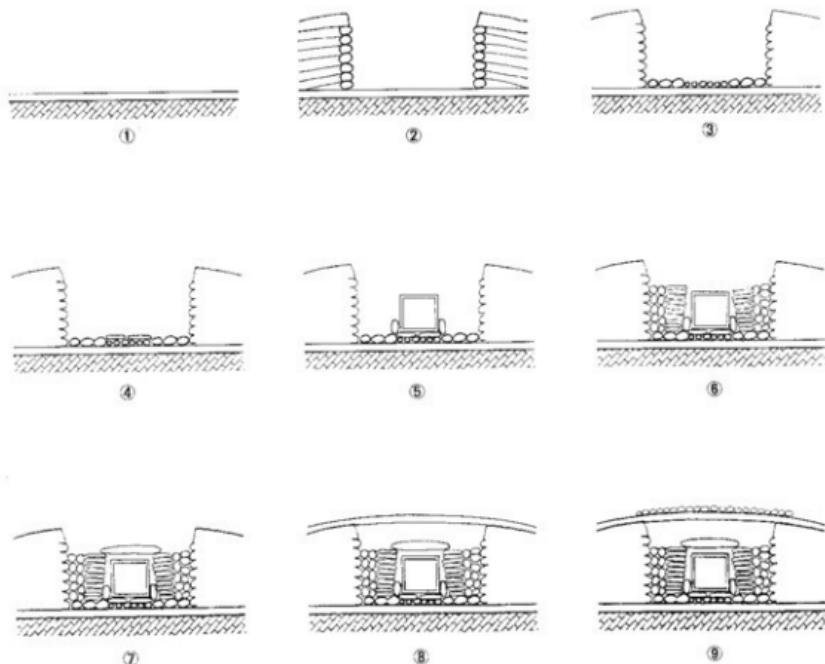
(3) 石室構築過程の復元

墳丘構築と併行して実施された石積み墓壙壁の構築から白色円礫の敷設に至る全構築過程を想定しておきたい。

- ① 地山整形後30~40cmの盛土を行い、石室の基盤となる水平面を形成する。
 - ② 石積み墓壙壁の基底石を並べることにより主体部の位置を決定する。その後、墳丘盛土と併行して墓壙壁の石積みが行われる。
 - ③ 墓壙壁内部に敷石が行われる。この段階で木棺の規模に合わせて棺の下部には小塊石が敷かれるとともに、東に向かって上面を上昇させ頭位を高くする配慮がなされる。
 - ④ 敷石の中央部に木棺規模に合わせて棺床となる安山岩の板石が敷かれる。
 - ⑤ 板石上に木棺が安置される。また、木棺を固定するために棺側に塊石が置かれる。
 - ⑥ 石室の壁体が構築される。同時に壁体石の周間に塊石を用いた裏込めが行われ、壁体石が補強される。
 - ⑦ 蓋石が設置され石室が完成する。
 - ⑧ 蓋石上の覆土により石室内が密閉される。覆土は墳丘上面に至るまで行われ、この段階で墳丘が完成する。
 - ⑨ 墳丘上に白色円礫が敷設され第1主体部の構築と埋葬に関する全工程が終了する。
- 以上構築過程を概観したが、以下の4点については前後関係等詳細は不明である。
- i 墓壙壁の石積みと床面の敷石の前後関係について。石積み墓壙壁を通常の掘削墓壙と同様の施設と考え上述の②、③のとおり構築過程を想定したが、敷石が先に行われた可能性もある。とすれば、棺位置及び頭位が墳丘築成以前に決定されていたことになる。
 - ii 壁体の構築手法が不明であるため、木棺上端面に相当する位置で構築手法に節目及び変

化があったのかどうか。すなわち、⑤及び⑥について木棺安置が壁体構築に先行するのか、一部壁体構築後木棺を搬入したのか等は判然としない。また、遺体の搬入時期についても不明である。

- iii 石積みの墓壙壁上への墓壙を構成する盛土が石室完成後に行われたのか、石積み墓壙壁構築に続けて行われたのか。
- iv ②の墓壙壁構築の段階で墳丘が全て完成していたのかどうか。墓壙壁構築のための暫定的な中央付近の盛土が行われ、その後全ての埋葬過程と石室構築が行われた後に墳丘全体の盛土が行われた可能性も否定できない。



第28図 第1主体部構築過程模式図

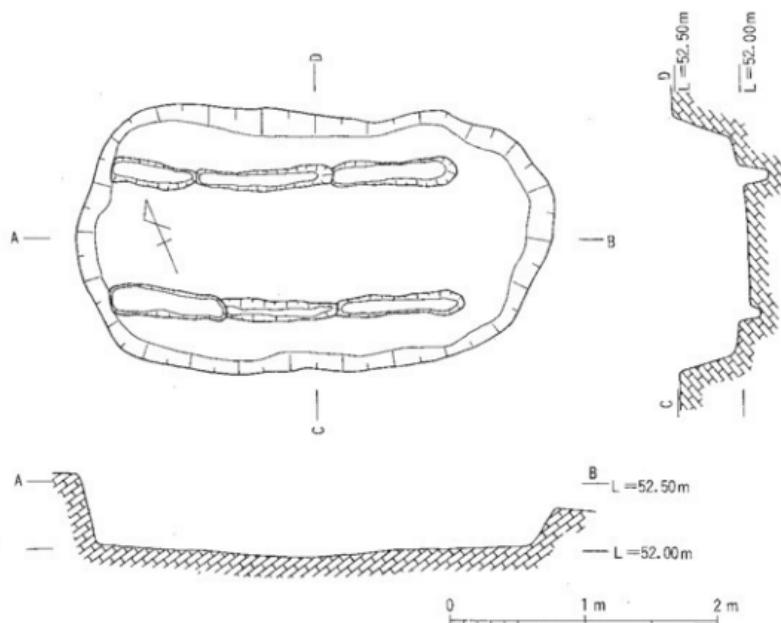
3 第2主体部

(1) 墓 壇

第2主体部は石材を全て抜き取られておりその全容について不明瞭な部分が多い。墓壇についても墳丘の表土剥ぎの段階でその上面が明瞭に確認されたが、それが構築段階の形状を示すものであるのか、盗掘の痕跡を示すものであるのかがます問題になる。

確かに墓壇内の埋土は5層に分けられる黒灰色系の小礫混じり土であり、いずれも水平の堆積状況をみせていたためかなり徹底した盗掘が行われたものと推定される。しかし、その掘り方の底面にはさらに長側壁石を埋設するための細長い溝状の掘り方が認められ、その小溝と掘り方壁との間には一様に幅20~30cmの平坦面を有しているなど掘り方は極めて規格性に富んでいる。したがって、この掘り方がすべて盗掘によって形成されたものとはみなしづらい、主体部構築段階から墓壇として掘削されたものと考えられる。

第2主体部が墳丘完成後に構築されたとすれば、墳丘築成と併行して構築された第1主体部



第29図 第2主体部実測図

より後出することになる。また、その墓壙は墳丘の中央やや南寄りの位置に第1主体部と平行に掘り込まれており、墳丘の中心は両主体部の中間に位置している。とすれば、墳丘及び第1主体部の構築段階すでに第2主体部の構築も意図されていたとも可能であろう。両主体部相互の関係を検討する上で重要な点であろう。

墓壙はほぼ東西方向に主軸を持つ長楕円形の掘り方で、その規模は上面で長さ3.62m、幅1.80~1.96mをはかる。底面では長さ3.28m、幅1.60~1.72mをはかる。深さは上面が傾斜しているために一様ではなく、28~52cmとばらつきがある。底面は両端付近はほぼ同一レベルに設定しているが、中央に向って緩やかに下り中央付近が最も深く掘り込まれている。両端付近と中央最深部との比高差は約9cmである。

先述のとおり底面には幅13~23cmの溝状の深掘りが検出された。長軸方向のみに2条掘り込まれたもので、本来棺の側板等を埋設しその安定化をはかるための施設であったものと推定される。この小溝の外側には幅20~30cmの平坦面が形成されているが、そのレベルは小溝の内側より5~8cm程度高く設定されている。

(2) 棺構造

第2主体部は徹底した盗掘に見舞われており棺構造に関する情報が極めて乏しいが、墓壙底面で検出された小溝の存在から何らかの棺が存在していたことは確実である。

底面が平坦であったことからすれば割竹形木棺が安置されていた可能性はない。また、2条の小溝はいずれも底部が平坦でなく起伏に富んでおり、3小区に細分されたような検出状況であった。したがって、長側壁は3枚の板材を立てて構築されていたものと考えられ、組合式木棺が使用されていたとみるのも困難であろう。墓壙形状からすれば木棺の使用について否定的にならざるを得ない。3枚の板材使用が想定される棺構造としては箱式石棺とみるのが妥当であろう。しかし、短側壁には板材を埋め込むための深掘りは検出されず、長側壁同様に板石を立てて使用したものと断定するのは危険であろう。短側壁について塊石積みの構造を推定するべきかもしれないが、全体として箱式石棺の使用を想定するのが最も蓋然性が高いと思われる。

石棺の規模について小溝から推定すると、長さは2.2m前後となろう。幅については80~90cm程度であるが、若干とはいえ東に向かって次第に広くなっている。したがって、東頭位の埋葬が行われた可能性が高い。高さについては墓壙の深度から推定するほかないが、西端で約52cm、東端で約28cmをはかる墓壙からみて25cm前後とみなすのが妥当であろう。

2条の小溝はいずれも西端が墓壙壁に接しているが、東端は30~40cm程度の間隙がみられる。この部分はほぼ平坦で、レベル的には棺内部より若干高く小溝周囲のテラス部分とほぼ等しい。とすればこの部分は短側壁石の裏込めの位置に相当するものとみなしうる。西側の短側壁石が長側壁石に挟み込まれた構造であったことは墓壙から明らかであるが、東側についても短側壁

石は長側壁石に挟み込まれていたものと考えられる。

棺内のはば中央にあたる位置には東西約70cm、南北約40cmの範囲で赤色顔料が部分的に認められた。遺物は後世の土師片が数点出土したのみである。

4 第3主体部

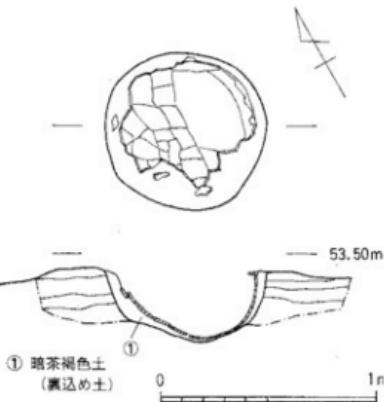
第1・第2両主体部の西約2mに構築された壺棺である。墳頂平坦部の西端に位置する。調査前の段階で既に破片が墳丘上に散乱しており、埋没した状態の壺下半部も露出している状況であった。

壺棺の形態・大きさに合わせた掘り方内に埋設しており掘り方との間の隙は2cm程度しかない。東方向の斜め下に底部を向け口縁部を西方向に向いている。埋設の主軸方位が第1・第2主体部とほぼ同一である点は注目される。

原位置を保っていたのは底部付近のみであったが、墳丘上に散乱していた破片の中に体部上端の付近のものが含まれていた。第33図1は図上復元を行ったものである。最大径は体部中央よりやや上方にあり、推定胴径約60cmをはかる。器高も60cm前後とほぼ等しいものと考えられる。口縁部は欠損していたが埋設前に故意に打ち欠いている可能性がある。底部は幅9.8cmの平底を留める。外面調整は下半部がヘラミガキの後タテハケ、上端部はナデである。内面調整は上端部のみ横方向のヘラ磨きで、他は丁寧なナデである。焼成は良好で、黄褐色を呈する。胎土中に微細な石英、長石を比較的多く含んでいる。

5 第4主体部

墳丘の南東裾部で検出された配石土壙である。東西両側で掘削された周溝状の溝が途切れる位置に構築されている。土壙の縁辺部にそって拳大～人頭大の塊石を配置する。塊石群は土壙部分の検出面より上方で検出されており、土壙内には暗褐色土が充填されている。遺体埋葬後埋め戻されその上面に配石が行われたのであろう。東半部の塊石群が西半部よりも大きいのは頭位置に対する配慮かもしれない。規模は長さ1.70m、幅0.63mで、深さは0.2mを測る。主軸方位はN49°Eで、墳頂部の各主体部とは大きく異なる。土壙内からの遺物は皆無であった。



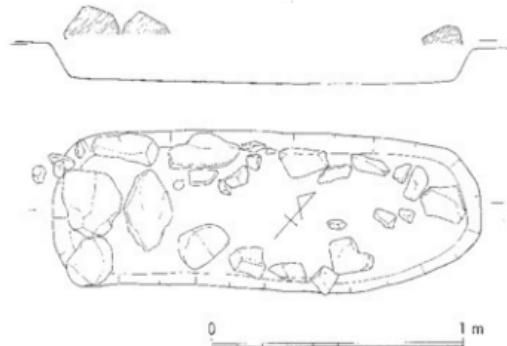
第30図 第3主体部実測図

6 遺物

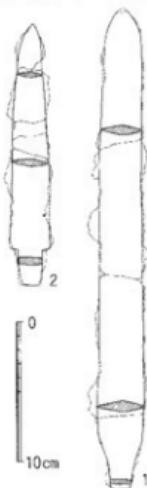
2号墳から出土した遺物は第1主体部から出土した鉄剣2と墳頂部の白色円礫群及び墳丘南裾周辺から出土した上器群とに大別される。鉄剣はいずれも竪穴式石室の西端に近い位置の床面敷石直上から出土している。

1は全長34.4cm、剣身30.8cm、幅3.3cm、厚さ0.9cmを測り、断面はレンズ状を呈する。鋒は身の先端近くから緩やかに幅を狭めている。茎部は短く、闊は斜めである。2は全長18.7cm、剣身15.1cm、幅3cm、厚さ0.6cmを測り、断面はレンズ状を呈する。鋒は闊から先端に向かって幅を狭めている。闊は垂直に近い。

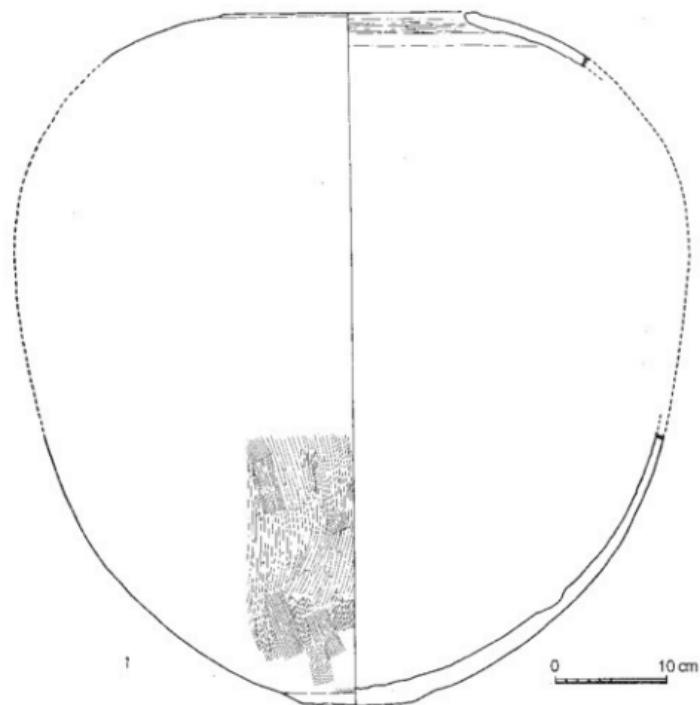
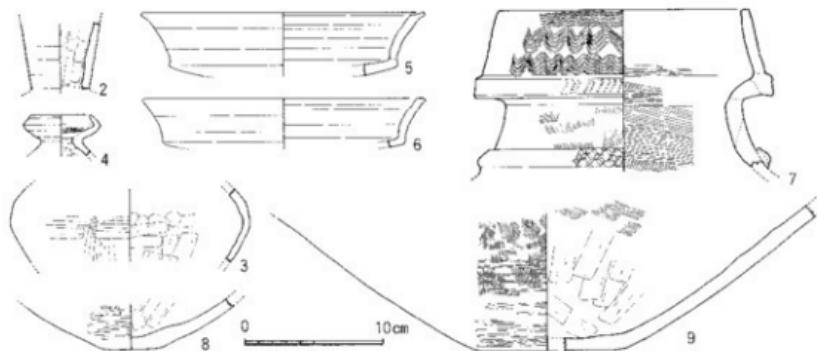
白色円礫群中から出土した土器で古墳に伴うものは長頸壺の頸頭片（第33図2）のみであり、その他に攢乱土中から奈良時代以降の遺物が少量出土している。2は上半部を欠くが直線的に開く。内面調整はタテナデで外面は丁寧なヨコナデ。3～9は墳丘南裾からの出土である。3は長頸壺体部で最大径17.4cmを測る。内面下半部を部をヘラケズリ、外面は丁寧なヘラ磨きを施す。4は台付小型壺で口縁部を欠く。体部は垂直に屈曲する。体部上端の外面にヨコハケ、内面下半部にヘラ磨きを施す。内面下半部に赤色顔料が付着している。5・6は高杯の杯部で上半部の外反が顕著である。内面の上端近くに強いヨコナデによる凹面がみられる。口径はいずれも20.6cmを測る。2～6はいずれも焼成良好で茶褐色を呈し、胎土中に角閃石、金雲母を含む。7は壺口頸部である。内斜する頸部は上端で外側に強く屈曲し、内傾する幅広い口縁部を持つ。口縁部境は外側に肥厚され、列点文を施す。口縁部外面は5条1単位の波状文、頸部には2本の粘土紐を擦り合わせた押圧突帯がみられる。内面調整はヨコハケ。雲母、長石、石英粒を含み褐色を呈する。8、9は壺底部で平底を留める。内面はヘラケズリ、外面下端部はヘラ磨き調整。8は茶褐色、9は黄褐色を呈する。



第31図 第4主体部及び壺片出土状況実測図



第32図 第1主体部出土鉄剣



第33図 2号墳出土土器実測図

第6章 3号墳

1 墳丘

(1) 形状・規模

調査開始前は1、2号墳に比べてマウンドが低平であることから古墳であるかどうかを疑問視されていたが、試掘調査時に主体部を2基検出したことから存在を確認したものである。したがって、調査前の段階では基底部の位置はもちろん墳丘の形状についても不明確であり、直径8m程度の円墳であろうと思われていた。

調査の結果、円丘部の西側で低い突出部が確認され前方後円墳であることが判明した。墳丘の北半部が琴電架設工事により掘削されているため全体の形状は不明であるが、南側では円丘部から突出部に自然に移行するくびれ部を検出している。

墳丘は尾根筋上付近に築造されている。後円部東（後方）側の2号墳と接する稜線部は堀切り状を呈し、ほぼ同一レベルに明確な基底部を設定しているものの、側面にあたる南側は基底部が不明確である。したがって、南側基底部の特定は困難であるが、ほぼ水平に整形された地山部分と盛土部分との境界に若干の傾斜変換が認められる。この傾斜変換は盛土によって意図的に造り出されたものと考えられるため、この位置（49.60m付近）を基底部に想定しておく。

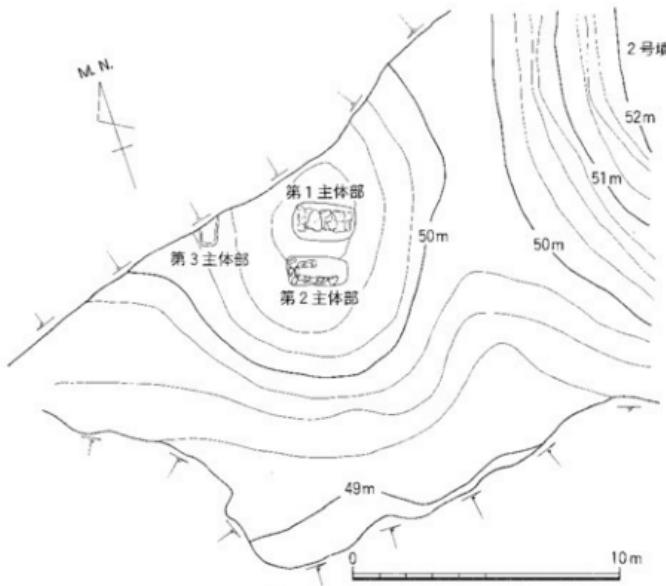
以上のとおり基底部を想定すると、後円部は南北方向に顕著な梢円丘を呈することになる。北側基底部付近が掘削を受けており正確な規模が測定できないが、後円部の推定復元規模は南北約13m、東西約11mとなる。高さについては東側からみて約1m、南側からみて約1.4mである。本県の前期前方後円墳のうち尾根筋方向に長い後円部を持つ古墳は数多いが、その直交方向に細長いことからすれば、地形に制約された結果という見方はできない。このように後円部が梢円丘を呈するようになった要因について、2号墳築造時に東側基底部付近が削り込まれたのではないかとも考えられる。しかし、4号墳では1号及び2号墳により墳丘が弧状に削り取られた状況が明確に確認できたが、3号墳ではそのような痕跡は確認できなかった。3号墳が先に築造され後円部の東西径も13mをはかるものであったとすれば、その基底部は2号墳付近まで及んでいたことになり、2号墳築造時に弧状に削り取られるものとなっていたはずである。このような状況証拠が認められなかったことからすれば、3号墳が2号墳に先行して築造され後者の築造時に墳丘が削り込まれたとみなすこともできない。

以上のように考えれば、3号墳は2号墳と同時かあるいは後に築造されたことになる。3号墳の後円部が顕著な梢円丘を呈するのは、先述とおり地形に制約された結果とみなすことでも

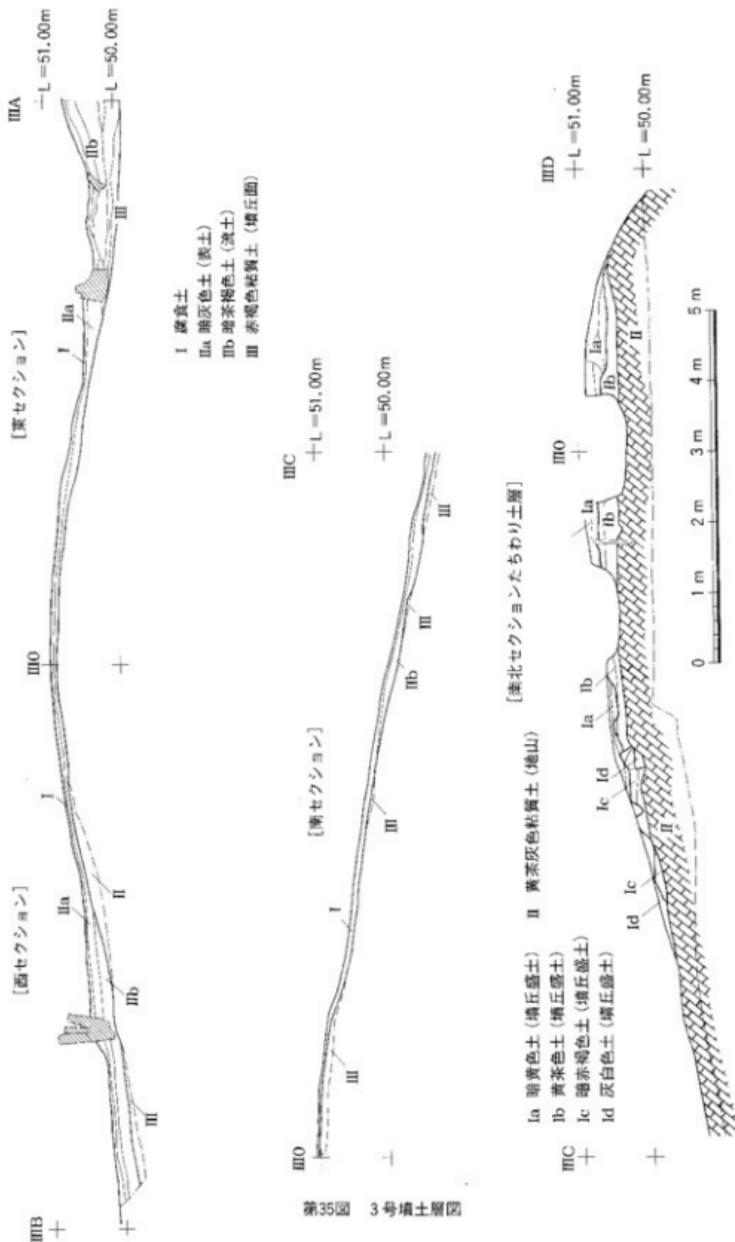
きないから、2号墳の墳丘域を意識したためとみなすことが最も妥当であろう。2号墳の基底部から2m程度離して基底部を設定しているのは、3号墳の東及び南側で検出された周溝の幅に相当する範囲をも避けた結果とみることができよう。

前方部は大半が掘削を受けており、南側くびれ部及びその周辺のマウンドを一部検出したに留まる。基底部はほぼ49.75mのセンター付近に求めることができる。主軸方向と直交方向に設定したトレンチでは約10cmの盛土を確認したが、その盛上と地山成形面との境界が49.70mであることから基底部の想定に問題は無いものと思われる。基底部ラインは緩やかな弧状を描きながら約4.5mの長さにわたって残存する。ほぼ尾根筋稜線上に構築されたものと思われ、その主軸方位は第1主体部のそれに一致するN67°Wである。基底部ラインはその主軸ラインにほぼ平行に延びるが、先端付近の形状はわからない。

その規模については不明とせざるをえないが、先端付近が1号墳のように緩やかに下り自然傾斜へと移行するような形状であれば5m前後の短いものであったろう。また、先端に向かって上昇するバチ形あるいは柄鏡形の一般的な前方部を持つとすれば10m前後をはかるものであったと考えられる。くびれ部は残存する墳丘から推定して幅5~6m、高さ0.4m程度であったものとみなしうる。



第34図 3号墳測量図



第35図 3号填土層図

(2) 築成

後円部、前方部ともに地山整形後盛土によって築成されている。盛土の厚さは後円部で約50cm、前方部では約10cmである。

後円部の地山面は盛土以前にはほぼ水平に整形されているが、特に第1、第2主体部周囲は水平志向が顕著である。また、第1主体部の北側約1.5mから地山面が上昇することからみて尾根稜線はさらに北方にあったものと考えられ、墳丘が稜線よりやや南に下る位置に構築されたものと考えられる。したがって、地山整形は尾根稜線を水平に削平するものではなく、南向き傾斜面を基底部付近で段カットすることを基本としている。また、後円部の中央付近で特に水平志向が著しいのは、主体部設定の基盤面としての配慮からくるものであろう。

前方部は基底部付近はほぼ水平に整形され、盛土により墳丘傾斜を表現している。すなわち、基底部から外側は約2mの幅の水平面がみられるが、基底部を境に墳丘部は約10°の傾斜角度をもつ。

後円部の盛土には1、2号墳のような大きな特徴はみられないが、概ね次のような傾向が指摘できる。第2主体部より南に約1.5mから南方位は地山面に凹凸・傾斜がみられ、整形していたものとも思われない状況であるが、盛土はますこの部分から行われ凹凸を解消するとともに地山水平面に上面を合わせている。さらに段カットによる水平面にも最初の盛土（④層）が行われ、この時点で上部盛土の基盤面となる平坦面が完成する。一方で、この段階では墳丘の平面プランも決定されていることになる。その後、第1、第2主体部周辺に上部盛土が行われ、墳丘が完成する。両主体部周辺はほぼ水平な盛土が行われている。

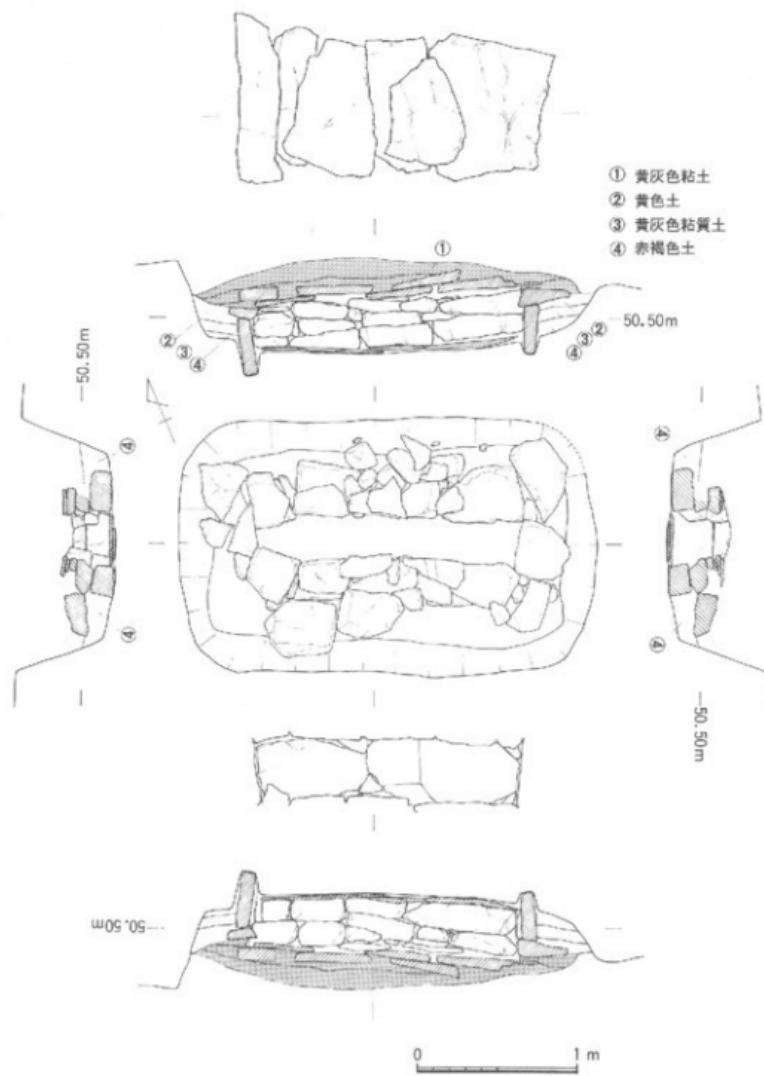
2 第1主体部

(1) 位置

主体部の中心は後円部東側基底部から約5m、南側基底部から約7mの位置にある。したがって、後円部のほぼ中心の位置が構築されたものとみなしうる。墓壙及び石室の規模が第2主体部を若干凌駕することからみても3号墳の中心的埋葬施設とみることができよう。中心主体部が主丘部の中心に設定される方式は2号墳とは異なり、1号墳に共通するものである。

(2) 墓壙

墳丘上面精査時点では被覆粘土とともに明確な墓壙が確認された。形態的には上面、底面ともに隅丸長方形を呈する。上面の規模は長さ2.65m、幅1.55～1.60mをはかる。幅は東西両端付近とともに1.55mであり、頭位を意識して広く設定するといった造作はみられない。底面は長さが2.22m、幅は東端付近で1.25m、西端付近では1.10mと東に向かって次第に広くなっている。墓壙掘削壁面の傾斜角度は60～70°である。

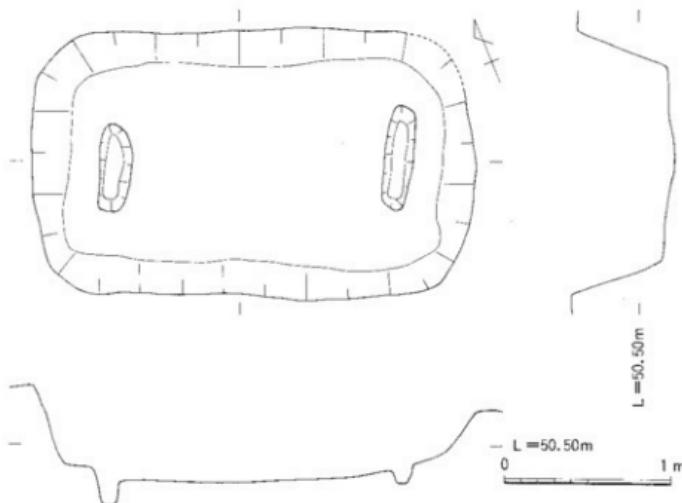


第36図 第1主体部実測図

底面は東西両短辺近くに石室短側壁石を埋設するための深掘りがなされている。東側のもの（以下「東壁石埋設壇」という）は長さ62cm、幅17cm、深さ7~15cm、西側のもの（以下「西壁石埋設壇」という）長さ52cm、幅19cm、深さ11~21cmをはかる。いずれも墓壙壁面との間に20cm弱の間隙があるが、その部分は両埋設壇の内側より10cm程度高く設定している。墓壙の底面は平坦ではなく、墓壙に直交する方向では南北両壁から中央に向って緩やかに下り中央付近が最も深くなっている。また、主軸方向では東壁石埋設壇付近から西壁石埋設壇に向って次第に下がるものとなっている。したがって、床面は西壁石埋設壇付近が最も深く設定されている。この位置での深さは約60cmである。

この墓壙は墳丘盛土上面から掘り込まれたもので、底面は地山を10cm程度掘り込んでいる。したがって、墳丘盛土後に墓壙が掘り込まれたことは明らかであり、この点では1、2号墳の中心主体部と構築過程に相違がみられる。

なお、墓壙北東隅に東西1m、南北70cmをはかる楕円形土坑を検出している。深さは10~20cm程度で、埋土は淡黒灰色土である。また、坑内の中央やや北寄りの位置に直径10cm程度の小ピットを検出している。第1主体部の墓壙埋土を切って掘り込まれていることから後出することは明らかであるが、その性格は不明である。



第37図 第1主体部墓壙実測図

(3) 石室構造・規模

長短両側壁間で石材、特に基底部の設置方法に顕著な違いがみられる。東西両短側壁は埋設壇内に扁平な安山岩塊石を立てて基底石とし、その上部に1枚扁平な塊石を小口積みして構築している。基底部の地中への埋設深度は10~15cm程度で、地上への露出高にほぼ等しい。したがって、その安定化のための措置は万全とみてよい。

南北両長側壁は扁平な塊石あるいは板石を2~4段小口積みして構築している。使用石材は安山岩及び花崗岩である。若干の持ち送りは認められるが、低い壁体であるためさほど顕著ではない。基底石及び2段目の石は比較的大型の石材を使用しており、上面を平坦に揃えるため空隙の部分に小さな板石を補填するような構築手法である。したがって、両壁体の上面に凹凸はみられないが、上端レベルは東に向って次第に上昇するように設定されている。この上昇傾向は墓壇底の斜面に一致する。

床面の平面プランはほぼ同幅の長方形とみなしうる。しかし、東短側壁の隅部が直角に近いのに対し、西短側壁付近は基底石を内側に寄せることにより弧状を呈するものとなっている。

壁体石と墓壇壁との間隙は黄色系粘質土による裏込めがなされているが、部分的に拳大~人頭大の塊石も使用されている。墓壇底に置かれた石は少なく、ほとんどある程度土による裏込めがなされた後その上に設置されたものである。したがって、ほとんどの裏込め石は壁体石とその上面レベルが揃ったものとなっている。

蓋石は計6枚使用されている。いずれも安山岩の板石を使用しているが、西端のものは短冊形であるのに対し東端のものは正方形に近く、東に向って蓋石の平面積が大きくなる傾向がある。蓋石による被覆幅は75cm~1mに及び、ほぼ長側壁の石積み部分も覆隠すものとなっている。架設方法は6枚の石を並列に敷き並べたものではなく、1枚おきに上下に重ねたものである。すなわち、3枚の板石を壁体石に接するよう架設した後、他の3枚を下部の空隙を埋めるように上部に設置するというものである。また、この蓋石は壁体石の上面に1~3cmの厚さで黄色粘土を敷き詰めた上に設置されていた。これらは石室内を密閉するための工夫として注目される。

蓋石の上部はさらに被覆粘土による密閉化が図られている。黄色粘土をドーム状に盛り上げたもので、その厚さは7~20cmである。被覆範囲は石室部分に留まらず、墓壇壁にまで及ぶ。したがって、壁体石や裏込め石は完全に密閉された形になっている。

石室床面は安山岩板石による敷石がなされている。上半身大の板石2枚を敷きその間隙に小板石3枚を充填したもので、敷石範囲は石室内床面のほぼ全域に及ぶ。また、南北両長側壁の基底石中にはこの敷石上に設置されたものもあり、長側壁の構築が床面の敷石後であることを示している。東西両短側壁と敷石の前後関係については不明であるが、前者が先行すると見たほうが自然であろう。

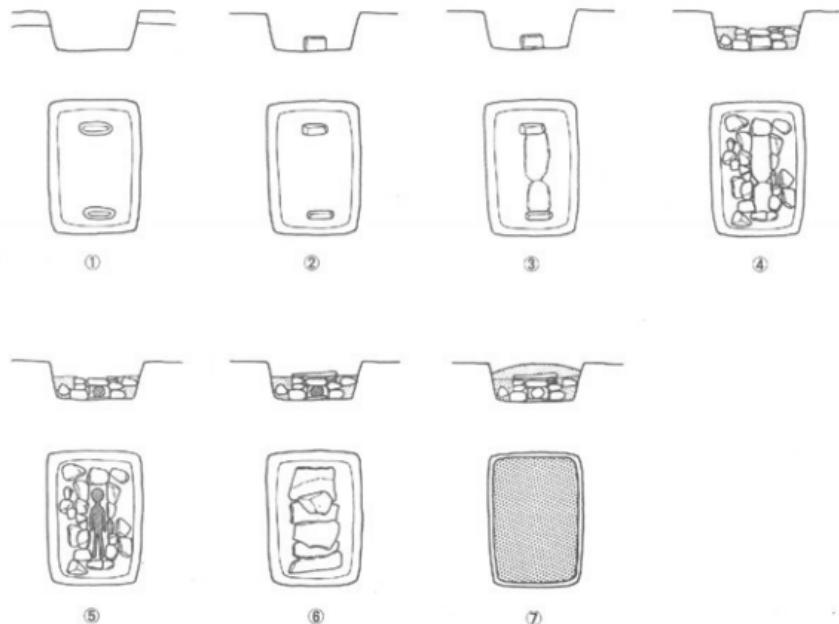
石室の内法は長さ1.66m、幅は東端で34cm、東端から60cm西の位置で40cmと最大幅を計り、西端では24cmとかなり狭くなる。高さは30cmで均一である。主軸方位はS 67° Eである。

第1主体部はいわゆる小豊穴式石室の範疇で把握しうる構造といえようが、規模からみて内部に木棺を納めていたとは思われない。機能的には床面の敷石上に直接遺体を安置する棺とみなすべきであろう。頭位については、東に向って石室床面及び上端面が上書きすること、東隅部が直角の平面プランを持つこと等から東頭位とみてよかろう。

石室内からの出土遺物は皆無であった。

(4) 構築過程の復元

墳丘築成及び遺体安置を含めた石室の構築過程について整理しておく。



第38図 第1主体部構築過程模式図

- ① 墳丘盛土後第2主体部を並列に構築することを予測し、後内部中央よりやや北寄りの位置に墓壙を掘削する。この時点で石室の位置が決定されるが、さらに東西両壁石埋設壙を掘削することにより石室の規模も決定される。
- ② 東西両壁石埋設壙内に扁平な塊石を立てた状態で埋設する。
- ③ 東西両短側壁内側の墓壙床面に板石を敷き、遺体を直接安置する底床とする。
- ④ 南北両長側壁等を構築し四面の壁体を完成させる。その際、粘土と塊石による裏込めを行い、壁体の安定化を図る。
- ⑤ 遺体を石室内に安置する。
- ⑥ 蓋石を載せて石室を完成する。その際、壁体と蓋石との間に粘土を充填し石室内を完全に密閉する。
- ⑦ 蓋石、裏込め石等を全て覆う形で被覆粘土を施す。

被覆粘土はドーム上に施されているため、その上面、特に縁辺部と墳丘面との間には20cm程度の隙間が生じている。この部分は黄褐色土を充填することにより上面を揃え、全ての構築・埋葬を終了している。

3 第2主体部

(1) 墓 壇

墳丘精査の段階で墓壙とともに小塊石の露頭を確認した。蓋石をはじめ壁体石も半数程度持ち去られており盜掘による搅乱も認められたが、石室裏込め部分は遺存しておりやはり墳丘盛土後掘削されたものである。位置は第1主体部の南側で、両者の主軸間の距離は約2mである。また第2主体部墓壙南壁間の距離は約70cmである。

平面形は隅丸長方形を呈し、長さ2.66m、幅1.16～1.34mをはかる。長さは第1主体部とはほぼ同じであるが、幅が30cm程度狭く全体に細長い印象を受ける。位置的に墳頂部から南にやや下る位置であるため、深さは北側で34cm、南側で8～17cmと差異がみられる。底は地山面まで掘り込まれており、第1主体部より10cm程度高く設定されている。

床面には第1主体部と同様東西両壁石埋設壙の掘り方が検出された。ただ、西壁石埋設壙が25cm内側に入った位置に掘り込まれているのに対し、東壁石埋設壙は東壁に接して掘り込まれているという特徴がある。また、西壁石埋設壙は長さ46cm、幅22cm、深さ11～22cmをはかるのに対し、東壁石埋設壙は長さ39cm、幅15cm、深さ13cmとかなり小規模な掘り方である。

墓壙床面は第1主体部と比較し平坦に設定されているという特徴がある。特に主軸方向での傾向が顕著である。また、西壁石埋設壙の内側と外側とでレベル差がみられないというのも第1主体部と異なる点である。主軸と直交する方向ではやはり中央に向って緩傾斜をもち、中

央が深くなるように設定されている。

(2) 石室構造・規模

第2主体部は壁体の西半部と床面の板石敷の大半部が残存するのみで、壁体の東半部、蓋石及び被覆粘土等は全て盜掘により取り除かれていた。しかし、残存部の構造に第1主体部と伸相違は認めがたく、ほぼ同様の小堅穴式石室構造であったものと予想される。また、東壁石埋設壇の残存により石室規模の復元も可能である。

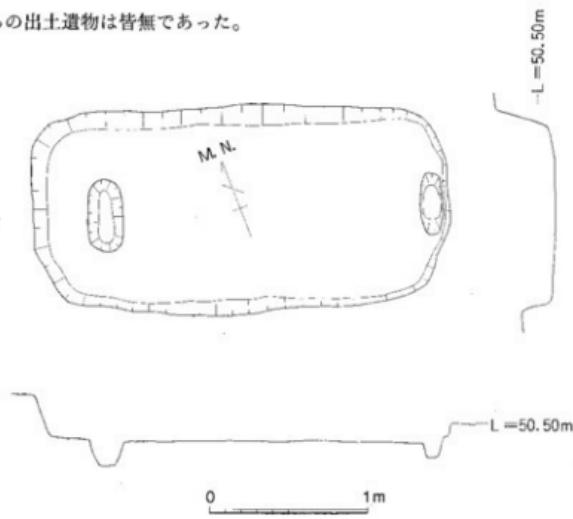
基底石は計7個残存していたが、いずれも扁平な塊石を使用している。西短側壁石は立てた状態で下半部を壁石埋設壇内に埋設している。南北両長側壁の基底石は寝かせた状態で最長辺部を内側に向けて使用している。その上部は扁平な塊石あるいは板石を小口積みにしており、最大で4段、高さ26cmが残存する。第1主体部と比較し、この残存高が本来の壁体高とみなすことができよう。

石室の残存長は1.63mであるが、西短側壁から東壁石埋設壇間の距離を本来の石室長とみなせば1.88mとなり、第1主体部を22cm上回る。石室最大幅は36cmで若干第1主体部を下回る。主軸方位はE21°Sでほぼ第1主体部に平行する。

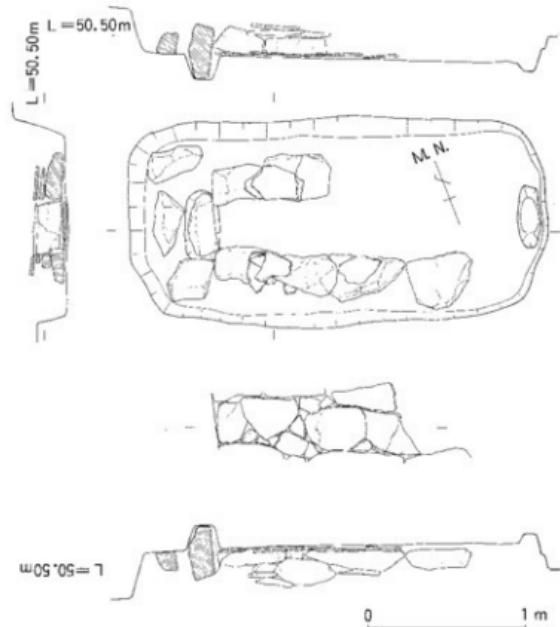
床面は安山岩の小板石を敷きつめている。敷石の上面レベルはほぼ水平である。

蓋石被覆粘土は全く残存していなかったが、壁体以下構造が第1主体部と全く同様であるため本来は存在していたものと考えられる。

石室内からの出土遺物は皆無であった。



第39図 第2主体部基壇実測図



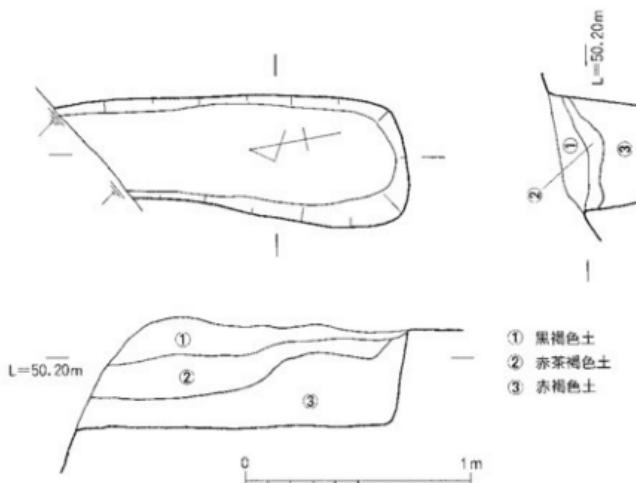
第40図 第2主体部実測図

4 第3主体部

第1主体部の西方、後円部から前方部への移行部分に位置する土壤である。墳頂部からは約60cm下った部分に構築されている。北端付近は琴電架設時に掘削を受けているが、大半の部分が残存している。3号墳構築以前の土壤である可能性も考えたが、墳丘盛土部分の上面で検出しており3号墳に伴う遺構であると考えられる。

隅丸長方形を呈し、推定長1.65m、幅は南端付近で56cmと最大幅をはかり、北に向って次第に狭くなり北端付近では42cmをはかる。深さは東壁部で46~54cmをはかる。主軸方位はN10°Eである。底部レベルは南から北に向って次第に低くなり、両者の比高差は約3cmである。平面形及び底部レベルからみて、南頭位の埋葬が行われたものと推定される。

埋土は上下2層に分かれ、上層は黒褐色土、下層は赤褐色土である。下層中から土師器が出士している。底面に棺痕跡は認められなかった。



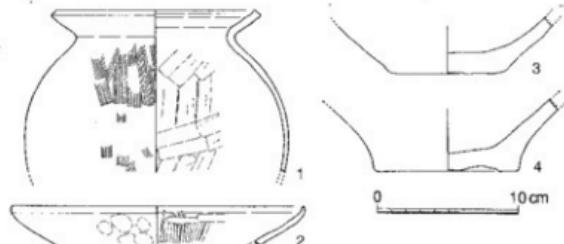
5 遺 物

第41図 第3主体部実測図

3号墳から出土した遺物は第1主体部から出土した鉄片、第3主体部から出土した土器、後円部南裾周辺から出土した土器片に大別される。鉄片については墓壇裏込め部分の最上層から出土したものであるが、細片のため器種等詳細は不明である。

第3主体部から出土した土器（42図1）は口径14.0cmを測る甕で、ほぼ球形の体部をもつ。口縁部は緩く屈曲し、端部は上方に拡張している。体部外面にタテハケを施すが、中央付近はナデ消しを行っている。内面は口縁部近くまでヘラケズリを行っている。

2～4は墳丘上から出土したものである。2は椀状の杯部をもった高杯で内面のヘラ磨きが顕著である。胎土は精良で、茶灰色を呈する。3、4は底部片である。3は径8cm程度の平底を留める。摩滅が著しく調整は不明。石英、長石を多量に含み淡黄灰色を呈する。4は幅10.4cmの明確な平底をもち、外反しながら体部に移行する。淡黄灰色を呈する。形態をからみて弥生前期に属するものであろう。

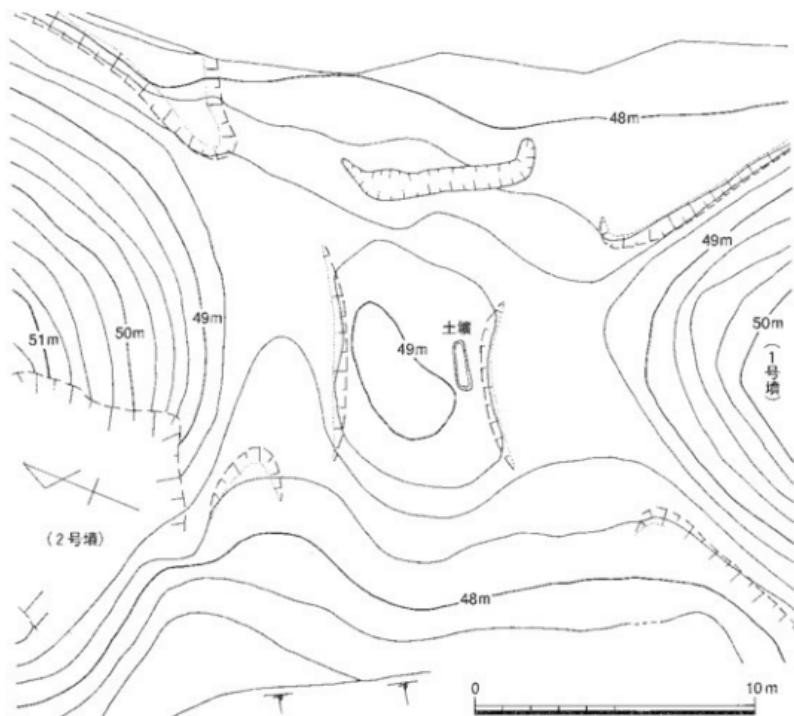


第42図 3号墳出土土器実測図

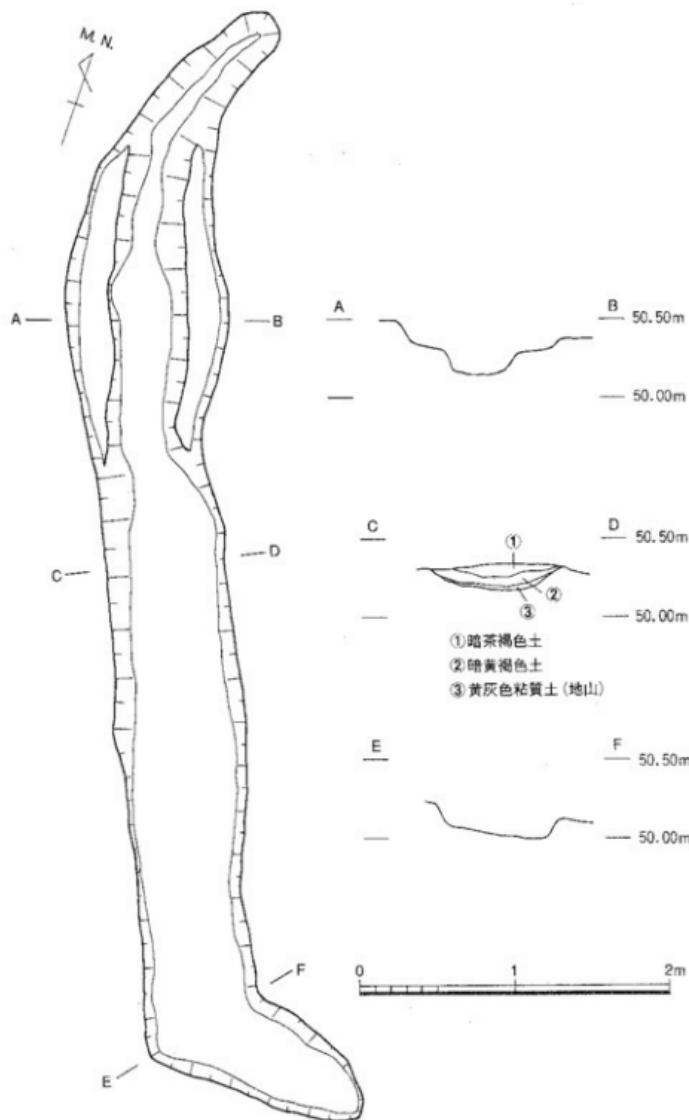
第7章 4号墓

1 墳丘

調査開始時にはわずかに隆起が認められる程度であったため、墳形のみならず古墳であるかどうかかも不明瞭であったが、調査の結果比較的明瞭なマウンドとともに主体部を検出したため墳墓であることが判明した。マウンドは先述のとおり1、2号墳築造時に基底部付近を削り込まれており、本来の形状・規模等は明確でない。



第43図 4号墓測量図



第44図 溝状遺構実測図

主体部である土壙の東約5.2mで南北に直線的に走る溝上遺構を検出しているが、これが土壙に伴うものであるとすれば…辺12m程度の方形マウンドを持つものであった可能性もある。この溝状遺構は4.7m南北方向に直線的に走った後、南北両端でくの字形に屈曲する。屈曲後の延長は約80cmである。幅は65~106cmをはかり、深さは直線的な部分では南端で14cmと最も浅く、北に向って次第に深くなり北端の屈曲部付近で35cmと最大深度をはかる。しかし、溝底レベルは北から南に向って次第に下っており、両者の比高差は約15cmをはかる。したがって、南に向って振り方上方の削平が著しくなっている可能性も考えておかねばなるまい。北端付近は2段掘りになっており、屈曲部以北は下段部のみが延長する形になっている。溝内の埋土は2層に分かれ、上層が暗茶褐色土、下層が暗黄褐色土である。遺物が出土していないため構築時期が不明瞭であるが、平面的に規格性が認められ、かつ土壙とは直角方向に構築されたものであるため、4号墳に伴うものとみなすのが妥当であろう。土壙の西側では同様の溝状遺構は検出されなかった。

溝状遺構の内側の振り方から墳頂部までの高さは約70cmであるが、南北両側の基底部からは20~30cm程度の高さしか持たないものであったと思われる。全体的に低平で特に墳頂部は平坦である。マウンドの北側裾部は2号墳構築、南側裾部は1号墳構築によりそれぞれ削り込まれている。掘削深度は前者が30~40cm程度、後者が20cm程度である。先の推定墳丘からすれば、前者は1m、後者は5m墳丘部が削り込まれることになる。この部分に溝状遺構が本来構築されていたかどうかは不明である。

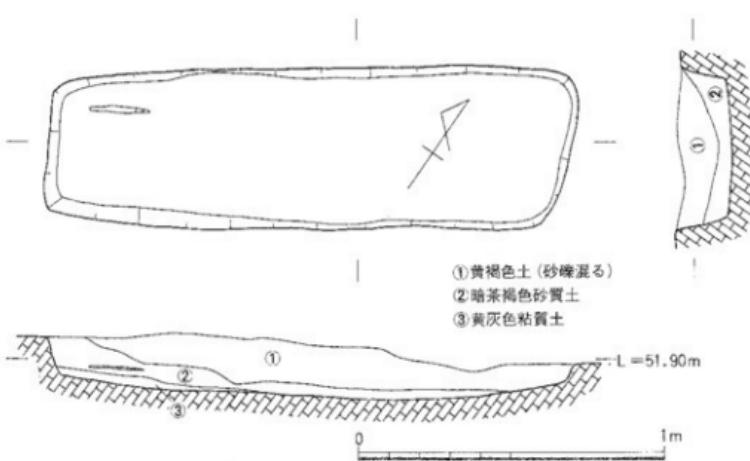
墳丘は地山整形のみに形成されており、盛土は認められなかった。主体部の遺存状況からみて墳頂部はさほど削平を受けているとは考え難く、本来盛土はなされていなかったものと考えられる。

2 主体部

マウンドの最高所に土壙を1基検出した。主軸長1.7m、幅45~52cmの隅丸長方形の平面プランをもつ。主軸方位は尾筋及び先述の溝状遺構の走行方向に直交するN55°Eである。深さは12~20cmで、底面は東西両端付近が浅く中央に向って次第に深く設定されている。棺痕跡は認められなかった。

東西両端部の底面レベルは若干西側が上回るが、振り方の幅は逆に東側が上回る。したがって頭位については明確な根拠がなく不明である。

北西隅部から刀子1が出土している。床面から2cm浮いた状態の出土であり、土壙に伴なう遺物とみなしてよかろう。

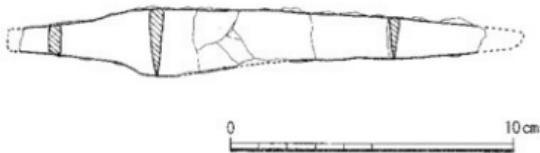


第45図 4号墓主体部実測図

3 遺 物

4号墓から出土した遺物は土壤中から出土した刀子のみである。

鋒先端と茎端部を欠損するが、推定長18cmを測る。刀闊は斜めに作られ、茎部は端に向かって次第に狭くなる。刀身部も先端に向って緩やかに幅を狭めている。



第46図 4号墓主体部出土刀子実測図

第8章　まとめと考察

I 石塚山2号墳の石積み墓壙について

石塚山2号墳第1主体部は墳丘築成と並行して構築された整美な石垣状の墓壙を持つことが大きな特色として挙げられる。その内部の竪穴式石室は安山岩の板石を小口積みするもので普遍的に見られるものであるが、問題となるのは周囲の石垣状墓壙の出自及び系譜関係である。県内では確実な類例がなく、また他県では奈良県メスリ山古墳^(註1)、長野県森将軍塚古墳^(註2)、徳島県蔵原1号塚^(註3)などで類例がみられるが、点的な分布を示しており系譜関係を想定するのは困難であろう。原段階では地域色としてあるいは点的な共有関係として把握するに足る資料も集積されておらずその意義を検討するのは不可能に近いが、将来的な類例増加の可能性に関する予察も含めて若干の考察を行っておきたい。

石塚山2号墳の石積み墓壙は既に述べたように地山整形面上の第1次盛土面を基盤とし、人頭大の塊石を墳丘築成と並行して積み上げて構築したものである。墓壙底部には同様の塊石による敷石が行われ全体として箱状の施設を構成している。墳丘がほぼ完成した時点で中空の箱状施設が完成していることになり、その後内部で石室の構築が行われる。石積みの内面が面を揃えて整美な外観を呈していること、石室との間隙には塊石による裏込めが入念に行われていること等からみて、この石垣状の施設が墓壙としての機能を果たしていたことは明らかである。県内では初の例であるが、果たしてこのような施設が例外的なものとみなしうるのであろうか。結論からいえば積石塚に同様の施設が構築されていた可能性が高いと考えている。

積石塚は本県の前期古墳を特徴付けるもので、石清尾山古墳群を中心として県内各所に分布が見られる。埋葬施設として竪穴式石室、小竪穴式石室、刳抜式石棺等が確認されている。これらのうち後2者は棺としての機能を持つものではなく、遺体を直接安置する棺として構築されたものである。墓壙も積石もさほど深く掘削する必要がなく、墓壙壁崩壊の危険性も少ないことから墳丘築成（積石）後に墓壙を掘削したものとみなすことができる。

問題となるのは中心主体部として構築された1m以上の高さを有する竪穴式石室が墳丘築成後に掘削された墓壙内に構築されたのかどうかという点である。積石塚の場合そのような墓壙構築手法を探れば作業自体が困難を極めたであろうし、その結果形成された墓壙の内面は不安定とならざるをえない。何よりもその内部に構築される竪穴式石室が不安定とならざるをえない点が最大の欠陥として指摘できよう。本県の積石塚で石室が開口し周辺部の状況も確認できる古墳としては、鶴尾神社4号墳、猫塚古墳、横立山経塚古墳、翁ヶ松古墳、ハカリゴーロ古墳、野田院古墳、大窪経塚古墳等がある。いずれも後世の攪乱が著しく原状は判然としない

が、墳丘築成後の墓壙掘削を想定するのは困難とみられる。解体調査例もなく、また積石塚の特性上裏込め石と墳丘積石との識別も困難であるため実証性はないが、墳丘と墓壙の関係については次の2通りの手法が採られたものと考えられる。

- (a) 墳丘築成と石垣状の石積み墓壙が並行して構築され、墳丘完成と同時に墓壙も完成しているというものの、石室はこの石積み墓壙内に構築される。
- (b) 石室壁体構築と墳丘築成が同時に行われるというものの、この場合は墓壙は存在しないということになる。

(a)の手法は同じく積石塚である徳島県萩原1号墓でその存在が確認されている。萩原1号墓は円丘部の中心付近を方形状に削り出し、その裾四周に石積みを行って石室を取巻く石垣状の墓壙を構築するもので、この構築は墳丘部石積みと並行して行われている。同墓は円丘部の高さが約80cmと本県の諸古墳と比べて極めて低いにもかかわらずこのような入念な墓壙構築が行われていることからすれば、積石塚では主体部や墳丘の石積み崩壊が常に付きまといつの防止策が最大の関心事であったことが推測される。本県の積石塚でも姫塚古墳、北大塚古墳、稻荷山姫塚古墳等で墳丘の外表面に石垣状の石積みが行われているが、この手法は墳丘を高く壮大に見せるという視覚効果を狙っただけでなく、墳丘の崩落を防止する目的で行われたものとみなすことができよう。萩原1号墓よりはるかに高い墳丘を構築する上で石積みの崩落防止策はさらに徹底されたであろうし、先述のとおり石垣状に石積みを行う手法は墳丘部ではかなり普遍的に実施されたであろうから、墓壙についても同様の手法が採用されていた可能性は高いといえよう。萩原1号墓の例は決して例外的なものではなく、積石塚では普遍的に行われた墓壙構築手法であるとみなすべきであろう。

積石塚が石垣状の石積み墓壙をもっていたと仮定すれば、石塚山2号墳の例は阿波・讃岐地域を中心とする積石塚文化圏からの影響のもとに成立したものとみなすことができよう。ただ、石塚山2号墳は後述するように弥生時代終末期に築造された可能性が高いが、当該期における讃岐地域の積石塚の様相は明らかではなく、どの地域からどのような影響のもと成立したかについては不明瞭な部分が多い。むしろ県内では初現的な位置付けを行うべきかもしれない。

ところで積石塚分布の中心をなす右清尾古墳群中では鶴尾神社4号墳で讃岐地域で生産されたとされる下川津B類土器の出土が顕著にみられ、その製作地も周辺の高松平野にある可能性が高いと考えられている。現時点では下川津B類土器の製作集団と右清尾積石塚古墳群の被葬者を結びつける積極的根拠はないが、萩原1号墓や鶴尾神社4号墳では供獻土器の中心をなしており、同様の傾向が強い石塚山2号墳との関係の一端を示すものと考えられる。

メスリ山古墳、森将軍塚古墳等の例は前代の阿波・讃岐の積石塚文化圏で普遍的にみられた手法をさらに整美、壮大化したものと位置付けるべきであろう。また、「地域的にも時期的にも限定されない構築法」との評価は再検討の余地があるものと考えられる。

II 石塚山1号墳の竪穴式石室について

第4章で概要を述べたように石塚山1号墳は後方部中央に竪穴式石室、その南側に箱式石棺を並置している。これらのうち、中心埋葬と考えられる竪穴式石室の構造について若干の検討を加えておきたい。

石塚山1号墳の竪穴式石室は構造上の5点が大きな特徴として挙げられる。

- ① 墳丘盛土と並行して壁体が構築される。
- ② 壁体及び粘土棺床下に礫敷きが行われる。
- ③ 壁体を1～3段積み上げた後に粘土棺床設置と割竹形木棺の安置が行われる。この粘土棺床により壁体は密閉され石積み内面は見えないものとなる。
- ④ 壁体の平面プランは東に向って広く、四隅は丸みをもつ。
- ⑤ 棺設置後壁体のより上方への構築はなされず、盛土により棺及び石室が被覆される。

以下、個別に検討を加える。

(①について)

この竪穴式石室は地山面からあるいは墳丘盛土後に掘り込まれた墓壙内に構築されたものではなく、壁体構築と墳丘盛土を並行して行うという極めて珍しい手法が採られている。もちろん県内の古墳では類例ではなく、現時点では例外的なものという位置付けを行うしかないが、石塚山2号墳の第1主体部に先駆的なものをみることができる。

2号墳例は墳丘築成と石積み墓壙壁の構築とを並行して行うものというものであるが、盛土後墓壙を再掘削しないという点では共通するものである。1号墳の場合低い壁体構造であるため墓壙壁を省略し、墳丘と石室とを並行して構築したものと考えておきたい。

(②について)

石室の基底部構造に関する特徴であるが、この分野については既に多くの研究成果があるためそれらとの対応関係についてのみ触れておきたい。ただし石塚山1号墳の場合墓壙底面で行われた礫敷きではなく、墳丘盛土に先立って礫敷きを行っておりその行為自体が石室の位置、規模、方位等を決定するという意義を併せ持つため単純な比較は注意を要する。ここでは礫敷き範囲が粘土棺床と壁体部の下部のみに限られており上部が盛土の部分には及んでいないことから石室の基礎構造としての側面を積極的に評価し、通常の墓壙内礫敷きと同一レベルに扱うこととする。

墓壙底あるいは粘土棺床及び壁体下に礫敷きを施す基底部構造は北野耕平氏により「礫敷式」^(註6)として分類されて以降、田中勝弘氏、^(註7)山本三郎氏、^(註8)都出比呂志氏も分類上の重要な視点とされている。ただ、厳密にはいずれも粘土棺床と壁体とを礫敷き上面の同一レベルから構築するものと粘土棺床上面まで周囲に礫を充填した後に壁体を構築するものとを同一型式に扱っており、

石塚山1号墳例を安易にこれらの諸型式に含めるのは疑問が残る。

近年新納泉氏は墓壙底の板石・礫の使用法、粘土棺床の構造、壁体構築位置等の変遷過程を想定しているが、^(註10) 壁体の構築を始める位置については新しくなるほど次第に高くなるという変遷観を示した。この変遷観に従えば石塚山1号墳は壁体構築位置に関する限り古式の様相を持つものと考えられる。また、三木弘氏は棺床の位置と壁体構築位置の2点から棺床構造の分類を行い、墓壙底に礫等を充填し粘土棺床設置と壁体構築を礫上面の同一レベルで行っている構造をⅡ類として1型式を設定している。^(註11) その意義として氏は墓壙底に直接両者を設置する型式（Ⅰ類）より排水機能を高めたものであるが、「類例に乏しく亜流的な存在であった」可能性を示唆している。石塚山1号墳例はまさにこのⅡ類に該当するものと考えられる。

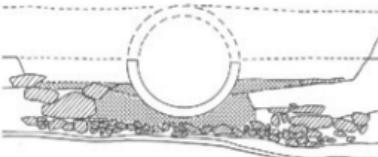
三木氏も指摘するように類例が乏しく近似する例は玉手山9号墳が挙げられるに留まる。ただ、玉手山9号墳が鷺の山石を使用した剝抜式石棺の出土を伝える玉手山3号墳（勝負山古墳）や同石を使用した松岳山古墳に近接し、石塚山古墳群が鷺の山自体に近い位置に所在している点は偶然とは思われない。両地域の交流関係が古墳時代前期においてかなり密接であったことを示す一例として位置付けるべきであろう。

（③について）

壁体が粘土棺床により被覆され、墳丘高との関係等からさらに上方には石積みは行われていなかったと推定されるなど通常の竪穴式石室とは構造を異にするという特徴である。これまで便宜的に竪穴式石室と呼称してきたが、石積みにより木棺を内包するという構造を持つものではないため厳密には別な名称を設定する必要があろう。とはいえたく以下に述べるように通常の竪穴式石室の基底部分をのみ採用したとの位置付けが可能であるため、今回の報告では暫定的に竪穴式石室の呼称を与えておきたい。

石室構築過程は先に述べたように1～3段の壁体構築後剖竹形木棺を搬入し、粘土棺床設置とともに安置される。壁体上面は棺身部分の高さ以下に抑えられ、粘土は一部壁体の上面まで及んでいる。したがって、壁体自体は構造としての機能を果たすものではなく、粘土棺床を固定する程度の意義を持つにすぎないものである。^⑤ とも関連するが棺蓋に相当する部分は壁体の石積みが行われず、墳丘盛土による被覆が行われたものと考えられる。

近藤義郎氏によれば「最古型式の前方後円墳の竪穴式石室が石室下半部の築造→木棺安置→石室上半の持ち送りによる構造という通じた約束をもつて」構築されていたと考えられている。椿井大塚山古墳は山本三郎氏により粘土棺床設置以前に壁体の数段がつまれていたと考えられている。また、^(註12)



第47図 1号墳竪穴式石室断面模式図

浦間茶臼山古墳では粘土棺床が先行して設置されたとされるが、棺身の高さに相当する4～5段は1枚ごとに粘土で被覆しながら積まれており、上部壁体の基礎構造としての位置付けがなされている。^(註35) 壁体構築の途中特に木棺の身と蓋の境付近で一時作業を中断し何らかの儀礼を行っていたとの指摘を考え併せれば、この段階に石室構築過程の大きな節目があったとみなすことができる。

こうしてみると石塚山1号墳例は全体としての構造は極めて珍しいと言えようが、石室基底部構造のみを採用したものと考えれば例外的なものではない。石室構築過程でこの段階に大きな節目があるのが一般的であれば、その上部構築を省略する手法が存在するとみるのは困難ではない。もちろん上部をなにゆえ省略したのかという問題は検討を要するが、ここでは粘土棺床を持つ通常の竪穴式石室の基底部構造のみを採用した石室構造である点を指摘するに留めておきたい。

ところで、壁体の基底部石積みが棺床等の粘土により被覆される例もかなり多く存在している。県外では椿井大塚山古墳、神原神社古墳^(註36)、浦間茶臼山古墳、七つ塚1号墳等が知られ、県内では諏訪神社本殿古墳^(註37)、六ツ目古墳^(註38)、鶴尾神社4号墳等が知られる。時期的には古式の様相を持つ古墳に多く認められるようである。壁体の数段を先行して積み上げ、その後粘土棺床を設置したとすれば必然的に基底部付近が粘土により被覆される場合もある。しかし、意図的に低い壁体全てを被覆した例や被覆された部分とその上部の部分とで壁体の石積み方法が変化する例がほとんどであり、むしろ意図的に行われたものと考えるべきであろう。例示した諸古墳は壁体構築と粘土棺床設置レベルが同一であるという特徴もあり、壁体を先行して数段積み上げ粘土棺床を後に設置する場合かなり普遍的に行われた手法である可能性が高い。

本県では石塚山1号墳、六ツ目古墳、諏訪神社本殿古墳等低い壁体を粘土により被覆しその上部へは石積みを行わない例も多く、これらは壁体が柳としての機能を持つものではなくむしろ粘土棺床の固定化のために用いられた觀が強い。棺蓋部分にも被覆粘土を用いていたかどうかは不明であるが、柳としての機能はむしろ粘土棺床が備えているとみなすべきかもしれない。とすれば、粘土柳の祖型としての意義が与えられる可能性も考えられるが、現時点では最古式の竪穴式石室の基底部構造のみを採用した埋葬施設と考えておきたい。

(④について)

壁の内法は東端で94cm、西端で74cmとかなりの開きがある。内部の粘土棺床にはこれほどの差異が認められず、また壁体は粘土により被覆されてしまうものであるため、構造上の理由で幅に差を設ける意味がなく木棺形態に規制された構造ともみなしがたい。幅に差をつけること自体に固有の意味があったとみなすべきであろうが、その意味は今のところ明確ではない。

壁体の隅丸構造については既に三木弘氏により、このような構造をもつ古墳の石室幅と長・幅比のいずれもが大きいことから「石室幅を広くするという構築上の要件に耐えるため、側壁

と端壁を連続的に構築することで、………隅部を強固に保つことを指向した」結果であると考えられている。幅広で壁体の高い竪穴式石室を構築するためには壁体の安定化が最大の課題であり、そのための構築手法を考えるのは合理的な解釈である。しかし石塚山1号墳例は石室幅がそほど広いものではなく、壁体の高さも極めて低いものであるため広い壁体幅を強固に安定させるため用いられた構造とはみなし難い。構築上の要件に耐えるためではなくむしろ当初から隅丸に意図的に構築された可能性が高い。

どのような意図で構築されたかはにわかに決し難いが、周辺地域の翁ヶ松古墳、野田院古墳、御館神社古墳等石室幅が80cm～1m程度の竪穴式石室でも採用されており、地域的にはかなり一般的に用いられた手法と考えておきたい。三木氏は隅丸石室では割竹形木棺以外の型式の木棺使用を考えているが、讃岐の諸例にも当てはまる見解である。その中で石塚山1号墳では割竹形木棺を使用している唯一の例であり、この点も注目される特徴である。

(⑤について)

この構築上の特徴・意義については既に述べてきたので、ここでは古墳建築に関しての儀礼について触れておきたい。1号墳は石室内での朱の使用が認められず、墳丘上あるいはその周辺でも供獻土器は出土していない。前期古墳建築に際して再三にわたって繰り広げられたであろう葬送儀礼や埋葬祭祀の痕跡が極めて少ないという特徴を指摘できる。

竪穴式石室構築に際していえば棺身設置段階で葬送儀礼が行われた可能性を指摘できるのみで、副葬品の欠如からその配置に伴う儀礼を欠くものと考えられ、棺蓋設置後は墳丘の完成まで一気に仕上げているとみなされるなど儀礼の省略化が顕著である。時期的に先行するものと考えられる2号墳では供獻土器の出土が比較的顕著であったことからすれば、そこに省略化とともに逆行現象を見出すことができる。それらの意義も不明とせざるをえないが、古墳の本質に係わる問題であり今後検討を加えていくことにしたい。

III 石塚山古墳群の築造時期について

石塚山古墳群は出土遺物に乏しく、墳丘形態が主体部構造等一般的な古墳とは異なる要素が多いため築造時期を明確にすることが困難である。限界はあろうが2、3号墳出土土器、1号墳主体部構築手法等をもとに相対的な築造時期を検討しておきたい。

2号墳から出土した土器は位置的に第1主体部上の円碟群中と墳丘南斜面から基底部周辺にかけての部分とに大別される。後者は墳丘上に置かれていたものが転落したものか、本来基底部周辺での葬送儀礼で使用され廃棄されたものかは判然としないが、色調は茶褐色を呈し金雲母及び角閃石を含む特徴的な胎土のものがほとんどを占める。高杯は杯部の屈曲が明確で上半部は強く外反する。上半部は内外面ともにヨコナデであるが、内面は強いヨコナデによる凹面

がみられる。台付小型壺、長頸壺も胎土は同一であり下川津B類土器である。台付小型壺は坂出市川津元結木遺跡S D04、S D11出土資料に類例をみると、石塚山2号墳例に比べて体部から口縁部にかけての屈曲が弛緩し後出的とみなしうる。体部が鋭く屈曲し上半が内傾する算盤玉状の形態は萩原1号墓出土例に近い。^(註2) 長頸壺は体部片と頸部片が出土しているが、前者は屈曲の緩い算盤玉状の形態をもち外面の丁寧なヘラ磨きと内面下半部のヘラ削りに特徴がある。頸部は体部との接合部に近い部分の破片であるが、外開き気味に直線に伸びる傾向が伺える。鶴尾神社4号墳出土資料は頸部の内弯傾向が顕著であり、やはり萩原1号墓出土例に近いものとみなすことができよう。下川津B類土器の編年観は大久保徹也氏により示されているが、それに従えば下川津IV式並行とみなすことができる。弥生時代終末期に位置付けられようが、注目すべきはほぼ同時期と考える萩原1号墓と様々な面での類似性である。供獻土器群は下川津B類土器が中心を占める種構成にも大きな隔たりを感じさせない。先述とおり竪穴式石室を内包する石積み墓壙も同様の手法で構築され、さらに石室上面に敷設された白色円碟群も共通する。使用された木棺が箱形木棺と推定される点も同様である。墳丘が盛土と積石である点、突出部の有無、墳丘高等に墳丘に関する要素は相違をみせるが、その他の古墳を構成する諸要素の類似性は両被葬者の密接な関係を伺わせるものとして注目しておきたい。

石塚山1号墳は出土遺物が墳丘盛土中の弥生土器片のみであるため遺物面からの時期決定是不可能である。主体部について粘土棺床をもつ割竹形木棺を使用している点は2号墳より後出する要素といえよう。また、IIにおいて検討を加えたように第1主体部が壁体構築を粘土棺設置と同一レベルの碟敷き上から行っている点、最古式の竪穴式石室基底部構造のみを使用している点等はある程度細かな時期を行う根拠になろう。主体部構成、第2主体部である箱式石棺の構築手法、IVで検討するが墳丘主軸と直交・平行に構築された讀岐では例外的な主体部主軸方位等の諸特徴は奥3号墳に類似するものといえよう。現時点では積極的に特定する根拠はないが、前期でも新しく位置付けられる根拠がなく前期初頭から前葉にかけての所産であろうと考えておきたい。

4号墓は1、2号墳構築時に墳丘が削り取られており両者に先行することは明らかである。後期後葉以前の所産であろうがそれ以上の特定は困難である。3号墳は第3主体部から出土した甕が弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。1、2号墳を前後する時期であろうが、第6章で述べたように墳丘築成の際に2号墳の墳丘域を意識した様子が伺えることから、2号墳より若干後出するものと考えておきたい。3号墳出土土器に下川津B類土器が含まれていない点は、他地域との交流関係の変容を示すものとして注目される。

IV 讀岐における弥生時代終末期から古墳時代前期の埋葬施設

1はじめに

1970年代に大川郡雨滝山塊の奥古墳群、高松市南部の円養寺遺跡等の発掘調査が行われて以降、香川県内でも弥生時代終末期の墳丘墓あるいは成立期の古墳等の発見が相次ぎ、前方後円墳成立前後の墓制が次第に明らかになってきた。畿内を中心とする前方後円墳体制が成立する過程及び古墳を構成する画一的な諸要素の系譜関係を検討する上で讀岐地方は看過できない地域であると筆者は考えているが、当該期におけるこの地の総合的な考察は未だ行われていない。墳丘形態については最古式の前方後円墳の墳丘形態を詳細に検討し、バチ形前方部の起源を讀岐地域に求める考え方も提示されているが、埋葬施設あるいは副葬品に関する整理・検討は不十分と言わざるをえない。

古墳の成立に関して画一的あるいは普遍的とされる諸要素の中にも、弥生時代以来の地域毎の伝統や小地域間で顕在化する要素が少なからず含まれるが、讀岐地域は特に東西方向の主体部主軸方位、積石塚、割竹形石棺等地域的特徴として挙げられる諸要素は数多い。それらの総合的な検討は別稿を期することとし素描を試みるに留めておきたいが、今回の整理・報告にあたっては石塚山古墳群で検出された各種埋葬施設を県内の趨勢の中で位置付けることが責務と考える。その中で地域的な諸要素の成立と分布に関する私見も併せて述べておくことにしたい。

2 当該期の墓制概観

県内で弥生時代後・終末期に位置付けられる可能性が高い墳墓は数多く検出されているが、いずれも詳細な報告書がなく、断片的な資料が提示されているにすぎない。また、出土遺物も稀少であり、供獻土器の編年についても不明確な部分が多いため、当該期に位置付けられる確証を欠くものも多い。それらの中には今後の検証により古墳時代前期に属するものが含まれている可能性があろう。とはいえて定型化した前方後円墳を構成する諸要素を欠いていたり、県内の小地域間で特徴的に分布する要素を兼ね備えているものが多く、それらの比較・検討が普遍的な諸要素波及以前の存地色・地域色を把握するうえで一定の有効性は有しているものと考えられる。視点をかえれば普遍的な諸要素が波及した首長より劣位の階層的位置に属する首長の墓制とみるべきかもしれないが、小地域内を律する秩序の地域性を表徵するものとして積極的に評価すべきと考える。そこで、ここではそれら普遍的な諸要素を欠く墓制を小地域ごとに概観し、地域的な当該期の墓制の一端を明らかにしておきたい。

(1) 雨滝山周辺地域

東讃地区の中でも古墳密集地域として著名であるが、中でも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓・古墳が数多く検出されており、本県の古墳文化成立期の動向を検討する上で

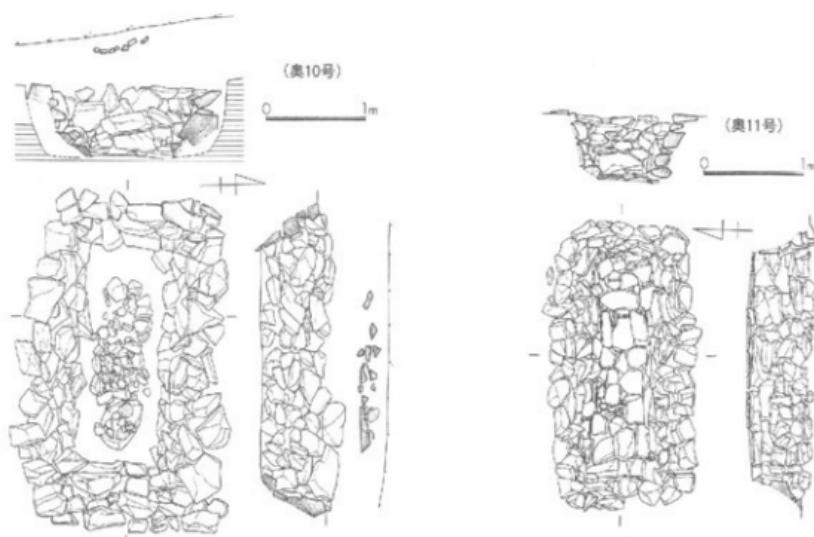
欠くことのできない地域である。雨滝山南麓には細かな時期決定はできないが土壙群、箱式石棺、壺棺等を埋葬施設とした古枝遺跡群が所在する。古枝12号遺跡は土壙8基から成る集団墓であり、6号遺跡は溝で区画された5基の方形台状墓で構成されることから、弥生時代後期以前の墳墓群と考えられる。さらに、弥生時代後期後葉から終末期に至り特徴的な埋葬施設をもつ奥10、11号墓や大井遺跡等が築造される。以下それら3基について諸要素を個別に検討する。

① 奥10号墓

1辺あるいは径14m、高さ2.5mのマウンドをもち、堅穴式石室、壺棺各1基を埋葬施設と/orしてある。出土土器から弥生時代後期後葉に位置付けられている。堅穴式石室はほぼ東西方向に主軸をもち、上に向って外開きとなる特徴的な構造を有する。3層に分かれる墳丘盛土の最下層上面から掘り込まれた墓壙内に自然礫を5段程度積んだ壁体構造で、墓壙と石積みの間に控え積みはない。石室床面は平坦で組合式木棺の安置が想定されている。石室上に拳大～人頭大の集石がみられ、供獻土器等の遺物が集中的に出土している。

② 奥11号墓

径16m、高さ1～2mの円形墳丘墓で、堅穴式石室2、土壙1、壺棺1を埋葬施設とする。奥10号墓と近い年代観が与えられている。2基の堅穴式石室はいずれも東西方向の主軸をもち、



第48図 奥10・11号墓堅穴式石室

上に向って大きく外開きとなる構造は10号墓と同様である。1号石室は床面に平石を敷きつめしており、2号石室では最下段の石材が急角度に配列され棺の安定を図っていたものと考えられている。いずれも組合式木棺が使用されていたものと思われるが、2号石室では床面の断面が丸みを持つことから箱型の木棺ではない可能性が高い。

③ 大井遺跡^(国史)

兩滝山西方の独立丘陵上に営まれたもので、3地区に分かれて調査が行われた。A地区は径13m、高さ0.5mほどのマウンドをもち、基底部列石が認められた。中心主体部は2段掘の土壙墓であるが、同一マウンドから14基の壺棺が発見されている。A地区から尾根筋を北に下ったB地区では箱式石棺1、土壙墓3等が検出された。土壙墓内には木棺が使用されていたとするが、とすれば箱型の組合式木棺であろう。A地区から西に下ったC地区では竪穴式石室1、土壙2、壺棺2が検出された。竪穴式石室は上に向って外開きとなる構造で、床面は平坦である。蓋石は無かった可能性が高い。

② 高松平野東・南部地域

円養寺遺跡、諏訪神社本殿古墳の他、箱式石棺、石蓋土壙、壺棺等が各所で発見されている。こごては、木棺を内包する施設を主体部としてもつ上記2遺跡について概要を述べる。

① 円養寺遺跡^(国史)

3基の墳丘墓が確認され、A、C、D墳丘墓と呼ばれている。A墳丘墓は径30m、高さ1.5mの円形マウンドをもち、周囲を平石で囲った浅い土壙を主体部とする。底面には粘土床が施され、その上面は平坦である。C墳丘墓は全長40mの前方後円墳状のマウンドをもち、竪穴式石室、箱式石棺を主体部とする。竪穴式石室は垂直に近い5段程度の石積み内に粘土床を設けている。粘土床の断面形は逆台形である。D墳丘墓は径18m円形マウンドをもつが、突出部が存在する可能性がある。長さ約2.7m、幅約1mとやや幅広の竪穴式石室を主体部としている。石室は床面を若干掘り回めて棺床としている。棺床面は平坦であるが、壁体との間には20cmの間隙があり、木棺の形状は想定困難である。A、C、D墳丘墓とともに石室の主軸方位は東西から20~30°振った方向にあり、石塚山古墳群に類似する。

② 諏訪神社本殿古墳^(国史)

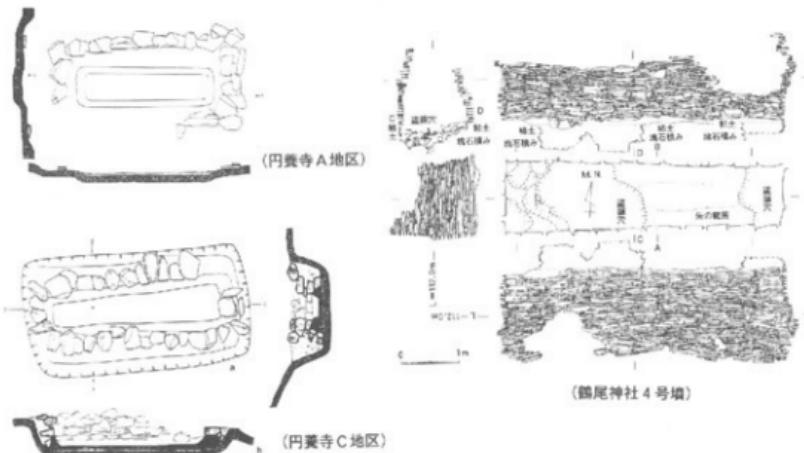
最大径12.5mの椭円形墳丘をもち、竪穴式石室を3基を主体部とする。第1、第2石室は塊石積みの低い壁体が残存し、床面は板敷きである石室内に粘土の使用が認められるが断面がU字形を呈さず、底面は平坦で垂直気味に立ち上がる点に特徴がある。2号石室では赤色顔料を塗布した土器枕が置かれており、その出土状況が使用木棺は側板と蓋のみであった可能性も考えられている。1号石室は床面全域に薄く粘土棺床が設けられ、底板の存在が考えられる。細かな木棺形状は明確ではないが、組合式木棺あるいは底面に平坦部をもつ削抜式木棺の使用が考えられる。

(3) 高松平野西部地域

積石塚分布の中心地域である石清尾山塊を含む地域であるが、弥生時代終末期と推定される鶴尾神社4号墳以外に当該期の墓制は不明確である。したがって、積石塚成立に至る段階の墓制は不明とする他ない。鶴尾神社4号墳は詳細な調査が行われた積石塚唯一の例である。バチ形に大きく開く前方部をもつ前方後円墳で、堅穴式石室を主体部とする。石室は板石を下半部は垂直に、上半部は持ち送りに積み、床面には若干凹んだ粘土棺床を設けている。割竹形木棺の使用を想定するのは困難で、組合式木棺あるいは底面がゆるく弯曲する削抜式木棺の使用が考えられる。

(4) 丸龜平野南東部地域

大東川上流域にあたる綾歌町栗熊地区で石塚山古墳群をはじめ平尾墳墓群、定連遺跡など近年急速に資料が増加している地域である。平尾墳墓群の詳細は未報告であるが3基の前方後円形のマウンドをもつ古墳あるいは墳丘墓が検出されている。詳細は本報告をまちたいが、2、4号墳で割竹形木棺を使用したと推定される断面U字形の土壙が検出された他、3号墳からは断面U字形の粘土床を持つ堅穴式石室が検出されている。石塚山古墳群と相前後する時期の所産であろう。



第49図 高松平野の堅穴式石室

(5) 丸龜平野西地域

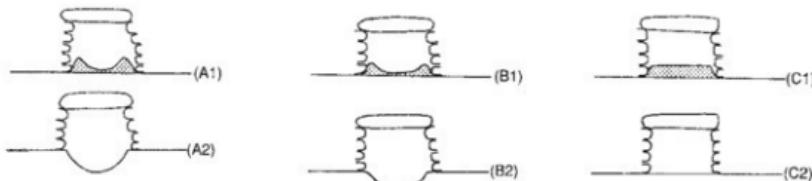
普通寺市を中心とする地域で、当該期の墳墓遺構が数多く検出されている。ただし、小竪穴式石室、箱式石室、壺棺等を中心としており、木棺を内包する構としての機能を備えた埋葬施設は未確認である。同様の傾向は西讃の三豊地域においても指摘できる。王墓山古墳北東斜面上の調査では、小竪穴式石室、箱式石棺等14基の埋葬施設が検出された。^(註) 中には堀切状の溝をもつものがあり、小規模なマウンドをもった墳丘墓の可能性が高い。

以上県内5地域について弥生時代後・終末期の墓制を概観したが、小地域ごとに異質な要素と類似した要素とが混在している点は注目される。しかもその異質性と類似性とは墳形、石室構造に留まらず床面構造、棺型式など多岐にわたっているという特徴が指摘できる。

3 石室床面構造の分類

これまで概観してきた諸墳丘墓のもつ様々な要素のうち、木棺形状を痕跡的に示す石室床面の構造が多様なあり方を示す点が注目される。竪穴式石室に納められた木棺については典型的な割竹形木棺の他に様々な型式のものが存在することが指摘されているが、吉留秀敏氏は北部九州を中心として体系的な整理を行い、典型的な割竹形木棺を含む剥抜式木棺の型式分類を行うとともに、^(註4) 埋葬施設間の階層序列についても言及している。讃岐地域讃岐地域では木棺遺存例がなく棺型式の細分化作業は困難とせざるをえないが、棺構造分類の最大の視点となる断面形については棺床部の状況からある程度推測可能である。木棺型式の詳細な検討は今後に委ねるとして、ここでは石室の床面構造に焦点を絞りその分類作業を行っておきたい。

石室床面の構造はその断面形から大きく次の3タイプに分類される。A型式は断面U字形の床面構造をもつもので、粘土棺床を持つものをA1、持たないものをA2型式とする。通常割竹形木棺の使用が考えられるものである。ただし厳密には既に都出比呂志氏が指摘するように、半裁した木材を剥抜いたものではなく木材の三分の1程度の部分を利用した棺が使われた可能性もある。また、当然両小口の大きさに差があるものとないものとを細分する必要は認められる。現時点では資料不足のため断面U字形の粘土棺床を同一型式として扱っておく。B型式は浅く凹む床面構造を持つもので、粘土を棺床部に使用するものをB1型式、素掘りの掘り方の



第50図 床面構造分類図

みのものをB2型式とする。棺の側面及び蓋部の構造が不明であるが舟形木棺に近い形状の木棺型式が想定される。C型式は床面が平坦なものではやはり粘土使用の有無からC1, 2型式に細分される。この棺床部の場合通常組合式の箱形木棺の使用が考えられているが、粘土棺床(C1型式)の場合側面の立ち上がりが垂直に近いものと外傾が顕著なものとに細分されるため、箱形木棺とは異なる型式の木棺が使用されている可能性は高い。ここでは平坦な底部をもった棺を安置した基底部構造として考えておきたい。

以上の分類をもとに各墳丘墓の埋葬施設について石室の構築手法や床面構造を一覧表にするところ下表のようになる。木棺構造について予想されるものを記載した。

主軸方位については30°程度振れる石塚山1号墳、円養寺C墳丘墓を除けばいずれも東西方

地域	墓名	施設の構造			床面構造		木棺型式
		石積み	主軸	規模	施設	断面型式	
(1)	奥10号	上開き	東西	2.1×0.9×0.65	粘質土敷	C2	箱形木棺
	奥11号(第1)	上開き	東西	2.2×0.6×0.6	平石敷	C2	箱形木棺
	奥11号(第2)	上開き	東西	1.4×0.4×0.45	なし	C2	箱形木棺?
	大井C地区	上開き	東西	2.1×?×0.6	玉砂利敷	C2	箱形木棺
(2)	円養寺A	配石状	東西	3.4×2.2×0.2	粘土棺床	C1	箱形木棺
	円養寺C	垂直	東西	2.8×0.7×0.4	粘土棺床	C1	箱形木棺
	円養寺D	垂直	東西	2.7×1×0.8	なし	C1	舟形木棺?
	諏訪神社境内第1	垂直	東西	2.6×0.85×?	板石敷 粘土棺床	C1	箱形木棺
	諏訪神社境内第2	垂直	東西	2.5×0.8×?	板石敷	C1	箱形木棺
(3)	鶴尾神社4号墳	下半部 垂直	東西	4.7×1.23×1.6	粘土棺床	B1	箱形木棺
(4)	石塚山1号	垂直	東西	4.04×0.94×?	粘土棺床	A1	割竹形木棺
	石塚山2号	不明	東西	2.1×0.6×0.7	板石敷	C2	箱形木棺
	平尾3号	垂直	東西	2.6×0.5×1	粘土棺床	A1	割竹形木棺
	平尾4号	配石状	東西	3.5×1.4×0.3	なし	A2	割竹形木棺

向に近く、古墳時代前期において特徴的とされる主軸方位が既に弥生時代後期後葉から終末期にかけての段階で成立した可能性が高い。しかもこの主軸方位は中讃から東讃にかけてかなり普遍的であり、首長間でその共有関係があったとみなすことができよう。ただし王墓山古墳北東斜面部の集団墓は地形と直交する方向に放射状に配置されており、規則性は見出だし難い。東西の主軸方位を共有する関係は木棺を内包する櫛としての機能をもった埋葬施設に限られ、遺体を直接安置する棺として構築された小竪穴式石室、箱式石室、土壙墓等にまで及ぶものではなかった可能性が高い。

石室の石積みについては多種多様なあり方を示すが、雨滝山周辺地域のように極めて類似しつつ開きという特徴的な構築手法を探る地域もある。床面構造については次の項で変遷観も含め検討することにしたい。

石塚山古墳群との構造上の類似点も比較的多く見出だすことができる。石塚山2号墳の竪穴式石室上面で検出された白色円碟群は奥10号竪穴式石室でもみられる。木棺安置のために平石を敷詰める手法は奥11号第1号墓石室、諏訪神社本殿古墳等でも採用され、さらに木棺の側面に塊石を配置して棺を固定する手法は奥11号墓第2号石室に同様の例がみられる。時期的にやや下ると思われる石塚山1号墳の竪穴式石室は壁体内面を棺床の粘土により被覆しているが、木棺型式の違いはあるものの同様の例が諏訪神社本殿古墳でも確認されている。東西主軸方位と併せ、ある一定レベルまで小地域内の画一化は進んでいたものとみなすべきかもしれない。

4 床面構造、棺型式の分布と変遷

床面構造について先の一覧表をもとに検討する。棺床部の施設についてはバラエティに富むあり方をみており、小地域間の特徴も見出だし難い。この点はさらに詳細な時期が判明すれば再整理も可能と思われるが、奥11号墓や諏訪神社本殿古墳など同一墳丘内でも異なる床面構造を持つ竪穴式石室が構築されている例もあり、階層的位置も含めた検討が必要であろう。

粘土の使用は雨滝山周辺地域では認められず、諏訪神社本殿古墳、円養寺墳丘墓群、鶴尾神社4号墳等高松平野で顕著である。丸龜平野南東部においては石塚山2号墳では使用されておらず、同1号墳、平尾3号墳等で使用されている。この点は前者が弥生時代終末期に築造されたと考えるのに対し、後二者はいずれも割竹形木棺の使用からみて古墳時代初頭以降の所産と考えられ、時期的な差異を示すものと思われる。同様の傾向は雨滝山周辺地域でも指摘しうる。上記の墳丘墓3例がいずれも箱形木棺を使用し、粘土は使用していないのに対し、最古の前方後円墳である奥3号墳は割竹形木棺とともに粘土棺床も導入している。雨滝山周辺地域と丸龜平野南東部地域（綾歌町栗館地区）とでは床面構造において同一時期に画期が求められる点は注目される。また、この2地域ともに弥生時代終末期において粘土棺床の使用が認められないものとすれば、県内で最も早く粘土棺床を導入した地域は高松平野である可能性が高い。^(註4)しか

し、その使用は後述するように割竹形木棺を安置するためではなく、箱形木棺あるいはそれに類似する平坦な底部をもった木棺の固定を目的とするものである。木棺の構造は割竹形木棺ではなく箱形の型式であるという点で雨滝山周辺地域等と共通するが、その安置・固定の手法の入念さに相違があるという評価が可能であろう。

次に床面の断面構造とそこから予想される木棺構造について検討する。石塚山1号墳と平尾墳墓群が時期的に古墳時代初頭以降に下るものとすれば、断面構造はC1、2型式が圧倒的多数を占める。しかもC1型式は雨滝山周辺地域と丸龟平野南東地域に、C2型式は高松平野東・南部地域にそれぞれ集中した分布傾向を示している。両者は底面は平坦であることから同一のC型式に含めているが、後者は粘土棺床立ち上がり部が外開き気味であることから箱形木棺とは考え難く、別な断面型式を設定すべきかもしれない。ただ、奥10号、11号墓の外開きの石室壁体が木棺構造を反映している可能性もあり、とすれば木棺形状に差異がなかったともみなされる。ともかく、県内では底部が平坦な木棺の使用が一般的であったという特徴は指摘できるであろう。鶴尾神社4号墳は粘土床中央付近が浅く凹む断面形態で同時期にあってはむしろ例外的である。同時期の積石塚の様相が明らかになれば類例も増加するものと思われるが、現時点では舟形石棺状の木棺構造が考えられる兵庫県権現山51号墳、京都府元稻荷古墳⁽¹⁴⁾等の基底部構造に類似していることから、他地域との関連を想定すべきかもしれない。

弥生時代後・終末期には箱形、舟形木棺の使用が一般的であったことを基底部構造から想定したが、古墳時代前期初頭～中葉に至ってどのように変化を遂げたかを検討する。古式の様相を持つ古墳とその基底部構造及び棺型式を一覧表にすると以下のとおりとなる。

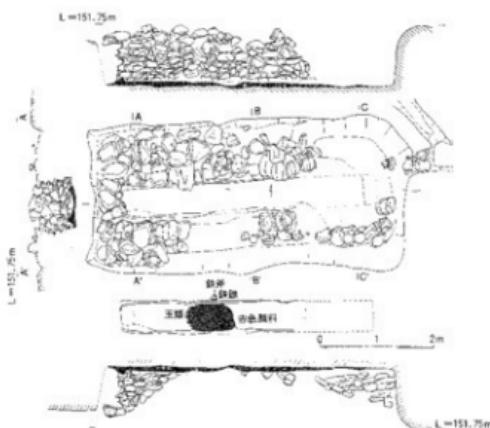
地域	古 墓 名	基底部構造	木棺型式	地 域	古 墓 名	基底部構造	木棺型式
(1)	奥3号墳	A1	割竹形木棺	(4)	平尾3号墳	A1	割竹形木棺
(1)	古枝古墳	A1	割竹形木棺	(4)	平尾4号墳	A2	割竹形木棺
(2)	北山古墳	C1	箱形木棺	(5)	野田院古墳	C2	箱形木棺
(2)	高松茶臼山古墳	C1	箱形木棺	その他	丸井古墳	C1	舟形木棺?
(4)	石塚山1号墳	A1	割竹木棺	その他	爺ヶ松古墳	C2	箱形木棺

その他積石塚の中に古式の様相をもつ古墳は散見されるが、主体部について未調査のため除外した。しかし、野田院古墳、爺ヶ松古墳等の積石塚例からみて箱形木棺あるいは舟形木棺が普遍的に使用されたものとみなされる。

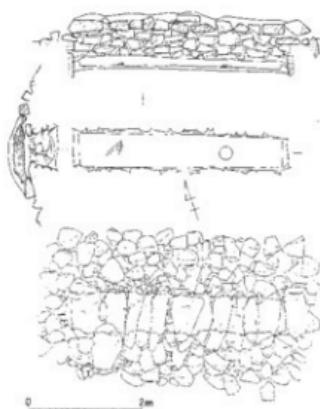
高松平野東・南部地域では前2期に位置付けられる高松茶臼山古墳が上面平坦な粘土棺床をもち割竹形木棺の使用は考えられない。前1期に位置付けられる丸井古墳も保存状態は不良であったが、粘土棺床上面が若干凹んでおり舟形あるいは割竹形の木棺使用が考えられる。また、数多く分布する積石塚は先述のとおり箱形木棺、舟形木棺の使用が一般的であったと考えられる。

こうしてみると、古墳時代前期には地域色がかなり明瞭になる。割竹形木棺を比較的早く導入した地域は雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部に限定でき、その他の地域は依然として箱形木棺、舟形木棺が主流であったものと考える。ただ雨滝山周辺地域に比較的近い長尾町丸井古墳も割竹形木棺の可能性があることからすれば、前者については割竹形木棺の導入地域がかなり広範囲にわたっていた可能性もある。

雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部地域についてはそれぞれ奥3号墳、石塚山1号墳等で割竹形木棺が導入されたと考えられるが、その後は前者が古枝古墳、奥13号墳、同14号墳と首長系譜のつながる前方後円墳で引き続き使用されている他。小円墳である奥2号の粘土櫛でも使用されている。後者はその後の動向が不明瞭であるが平尾古墳群で普遍的にみられる他、若干距離が離れた国分寺町六ツ目古墳等でも使用されていることからみて、周辺地域へ波及していく状況が看取される。両地域では割竹形木棺が導入後普遍的に使用されたものと考えられ、従来の箱形木棺等はむしろ駆逐された状況にあるものとみなすことができよう。



(丸井古墳)



(奥3号墳)

第51図 割竹形木棺使用の古式古墳

この両地域はその他にも主体部に関し他地域との差異が存在する。既に指摘されているように讃岐地域は墳丘主軸に斜交して主体部が構築された古墳が一般的な地域であるが、例外的な墳丘主軸に直交・平行する古墳が両地域に集中して築造されている。雨滝山周辺地域では奥3号墳、古枝古墳等が、丸亀平野南東部地域では石塚山1号墳、平尾4号墳等がその例として挙げられる。これらはいずれも割竹形木棺を使用した古墳であり、その使用と主軸直交・平行の主体部構築法がセット関係で導入された可能性は高いといえよう。福永伸哉氏によれば畿内と吉備地域では前期の古い段階では北頭位の埋葬と墳丘主軸の直交・平行主体部を両立させようとしたが、それが困難な場合は後者を優先されていたとされる。⁽⁴⁰⁾ 氏はさらに奥3号墳等の主体部主軸が東西方向からの若干の振れを許容しても墳丘主軸の直交関係を優先させていたと解釈し、畿内政権との関係を示唆している。同様の特徴は石塚山1号墳でも指摘できる。主体部は墳丘主軸に平行するが、東西方向からは34°⁽⁴¹⁾とかなり振った方向をとっており墳丘主軸との関係を重視した結果と考えられる。こうしてみると、雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部地域における割竹形木棺と墳丘主軸と直交・平行の主体部構築法との導入は、いずれも畿内との密接な関係のもとに成立したものとみなすことができよう。畿密には前者が墳丘主軸に直交する方向、後者が平行する方向に主体部が構築されており、葬送儀礼の質的差異を示すものかあるいは互いに異なる地域から影響を受けたのかなど細かな検討は必要であろう。とはいへ、突如として局地的に出現する2つの構築手法は、地域色豊かな讃岐地方にあって画一的、普遍的要素導入の第1歩として位置付けることができよう。

ただし、この2つの主体部に関する構築法導入は地域的な伝統を完全に払拭するものではない。それは若干の振れをもつとはいえ、奥3号墳、石塚山1号墳とともに主体部は東西方向を指向し、地域伝統の枠のなかに納まっているという点から伺い知ることができる。この地域的伝統をも払拭するのは前期後葉の吉岡神社古墳であり、また削抜式石棺を安置した同時期の快天山古墳、岩崎山古墳である。讃岐地域の主体部構築方法については地域的不均等をもって特定地域で部分的な畿内化が始まると、その畿内化は一気に地域的伝統を払拭するものではなく各要素ごとに序々に進展するという図式が成立しよう。

割竹形木棺を県内で一早く導入した雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部地域は、いずれも削抜式石棺を遅く導入した地域としても知られる。讃岐の削抜式石棺については渡部明夫氏により割竹形から底部が平坦な舟形石棺への型式変化が想定され、割竹形石棺は鷺ノ山周辺では快天山古墳、火山周辺では赤山古墳で導入されたことが明らかになった。さらに両古墳の被葬者は割竹形石棺を生み出す動きのなかで中心的な役割を果たし可能性を考えている。こうした動きは前者が主に津田湾周辺地域で石棺材として使用された凝灰岩を産出する火山に近接し、後者は丸亀平野から高松平野にかけて広く分布する石棺の石材（石英安山岩質凝灰岩）を産出する鷺ノ山に近接するという地理的要因が大きいことは言うまでもない。

それに加えて両地域は割竹形木棺を県内では最も早く導入し、その後は従来の箱形木棺等を試すとともに割竹形木棺を普遍的に共有・使用する伝統が培われていたという社会的要因も看過できない側面であろう。割竹形の棺構造を使用する基本的な原則があつてはじめて割竹形木棺の創出あるいは導入が可能であったろう。木棺から石棺への飛躍を自律的な創出とみるか、河内地域等畿内からの先導によるもとみるかは即断できないが、両地域が畿内を通じて不可分の関係を持ち割竹形石棺を創出あるいは導入する基盤がその前代から形成されていた可能性を指摘しておきたい。

4世紀末葉から5世紀初頭にかけて県内の他の地域でも最有力首長が剣拔式石棺を使用するが、それらはいずれも割竹形ではなく棺身内面あるいは底部が平坦に近い舟形の構造をしたものである。これは単に型式変化ととらえることもできようが、他の地域にあっては前代から箱形あるいは舟形の木棺構造を使用することが普遍的であったことを考えれば、その伝統を遵守し型式変化を促したものとみなされる。弥生時代後期から古墳時代前期を通じて棺構造に関する嚴然とした規律が小地域ごとに所在したものと考えられよう。

弥生時代後・終末期には雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部地域も石積み方法など細部の小地域色は発露していたものの、棺構造という埋葬の基本的な部分では他地域と同一歩調を採っていた。しかし、両地域は一早く畿内的な諸要素を部分的に導入し小地域で普遍化させるとともに、さらに割竹形石棺という地域色をも創出することになった。讃岐のなかで畿内化への動向と地域色の発現という相反する様相が、小地域ごとに複雑に展開する状況が伺える。

5 おわりに

埋葬施設に限って讃岐のなかの小地域色について検討してきた。雨滝山周辺地域と丸亀平野南東部地域は地域色が色濃くかつ小地域を律する規範なり伝統が保持される讃岐にあって、主体部構築手法や棺構造など様々な面で異質な地域であるという特徴が指摘された。石塚山古墳群はその中でも特に過渡期の実態を具体的に知ることができる貴重な古墳群である。2号墳は東西方向の主体部主軸や箱形木棺の使用などの点で県内の他地域と関係が認められ、石積み墓壙では積石塚群との関係が伺えた。1号墳では割竹形木棺の導入や墳丘との平行な主体部構築などで部分的な畿内化の動きが認められる。同一の古墳群を形成する両古墳に埋葬行為に関する変革が認められ、その後の地域の動向を決定付けていることを確認しうる点に同古墳群の第1の意義が与えられよう。

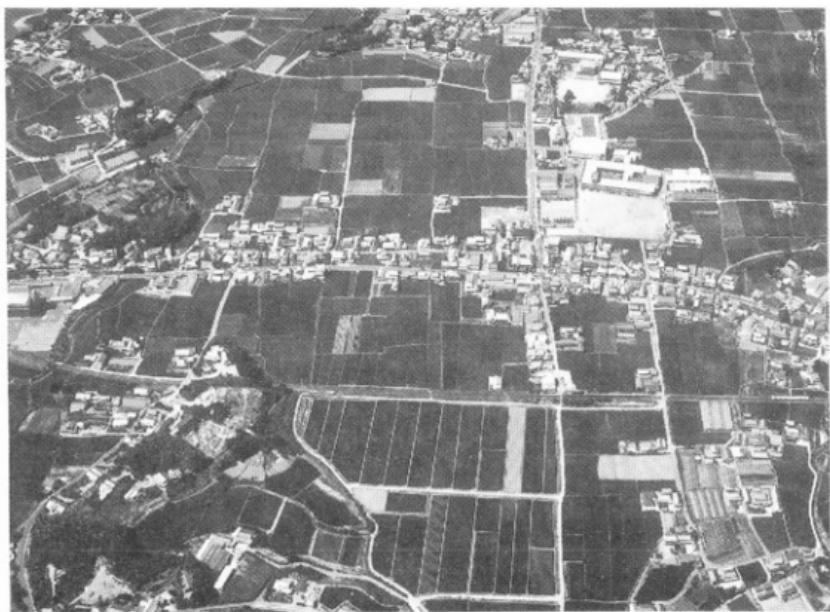
両地域は古墳時代中期以降も県内では一早く古式群集墳を形成させ、また甲冑の出土が顕著であるなど様々な点で他の小地域との相違をみせる。それらの総合的な検討は別稿を期したいが、石塚山1号墳及び奥3号墳の構築以降連綿と続く畿内政権との密接な関係を抜きにしては

成立しなかったであろう。両古墳が政治的にも大きな時期を表徴しているとの位置付け可能であるかもしれない。今後、墳丘形態や副葬品等を含めた検討がなさればさらに詳細な地域色や小地域間の交流・政治的関係等が明らかになろう。讃岐地方の古墳文化研究の深化と発展を祈念して結語としたい。

参考文献

- (註1) 伊達宗泰ほか『メスリ山古墳』奈良県橿原考古学研究所 1977年
(註2) 『史跡森将军塚古墳 — 保存整備事業発掘調査報告書』更埴市教育委員会 1992年
(註3) 菅原康夫『萩原塚古墳群』徳島県教育委員会 1983年
(註4) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津遺跡』香川県教育委員会 1990年
(註5) 三木 弘「森将军塚古墳の堅穴式石室」全掲註2文献
(註6) 北野耕平「前期古墳における内部構造の問題」「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室 1964年
年
同「摂津会下山二本松古墳における内部構造の考察」『兵庫史学』第65号 1974年
(註7) 田中勝弘「前期古墳の堅穴式石室構造について」『史想』16 1973年
(註8) 山本三郎「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点 — 埋葬施設の構造を中心として — 」『ヒストリア』87 1980年
(註9) 都出比吕志「埴輪編年と前期古墳の新古」「王陵の比較研究」 1981年
(註10) 新納 泉「石槨構造とその編年的位置」「岡山市蒲間茶臼山古墳」 1991年
(註11) 註5に同じ
(註12) 安村俊史ほか『玉手山9号墳』柏原市教育委員会 1983年
(註13) 近藤義郎「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学』第6巻 變化と画期 1996年
(註14) 註8に同じ
(註15) 註10に同じ
(註16) 都出比呂志「埴墓」「岩波講座日本考古学』第4巻 集落と祭祀 1986年
(註17) 前島己基、松本雄雄「島根県神原社古墳出土の土器 — 土器型式にみるその編年的位置について」『考古学雑誌』62巻3号
(註18) 『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査班 1987年
(註19) 山元敏裕「諏訪神社遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成2年度 1991年
なお詳細については山元氏のご教示を得た。
(註20) 森下英治「六ツ目古墳」「四回横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」平成元年度 香川県教育委員会 1990年
(註21) 註5に同じ
(註22) 渡部明夫『翁ヶ松古墳調査概報』香川県教育委員会 1975年
(註23) 「野田院古墳」「香川の前期古墳」1983年
(註24) 善通寺市に所在する古墳で平成4年度に発掘調査が行われた。詳細については善通寺市教育委員会渡川龍一氏のご教示を得た。

- (註25) 註4に同じ。
- (註26) 片桐孝志『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会 1991年
- (註27) 註3に同じ
- (註28) 註4に同じ
- (註29) 古瀬清秀「原始・古代の寒川町」『寒川町史』1985年
- (註30) 岩本直文『丁瓢塚古墳調査報告』『史林』第71巻6号 1988年
- (註31) 六車憲一『ゴルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』1972年
- (註32) 註29に同じ
- (註33) 大久保徹也「雨滝山遺跡群・奥10号墓」『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会 1988年
- (註34) 註29に同じ
- (註35) 「大井遺跡」『大川町史』1978年
- (註36) 松本豊巣『高松市円養寺遺跡調査概報』1971年
- (註37) 註19に同じ
- (註38) 渡部明夫ほか「香川県」「前方後円墳集成」
- (註39) 平成4年度に鍾歌町教育委員会が発掘調査を行った。詳細は第3章参照。
- (註40) 鍾川龍一『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会
- (註41) 吉留秀敏「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』第20集発刊記念論集(中)九州古文化研究会 1989年
- (註42) 雨滝山東麓に所在する森清古墳は上面が平坦な粘土床を持ち、堅体石の固定にも粘土が多用されていたとされる。出土遺物が無く時期決定は困難であるが、奥3号以前の可能性もある。(細川信晃『森清古墳発掘調査中間概報』1985年)
- (註43) 近藤義郎ほか「櫛現山51号墳」1991年
- (註44) 西谷真治「向日町元福荷古墳」『京都府文化財調査報告書』第23冊 1964年
- (註45) 松本豊巣『高松市茶臼山古墳』『香川の前期古墳』1983年
- (註46) 福永伸哉「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳—統括編』大阪大学文学部考古学研究室 1990年
- (註47) 渡部明夫「横岐の削抜式石棺について」『香川史学』第19号 1990年



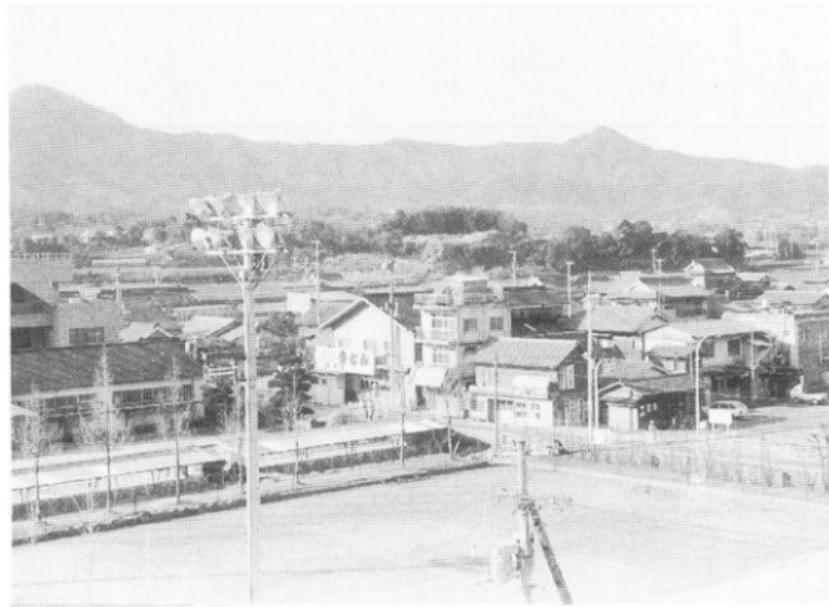
図版1-1 古墳群周辺の航空写真



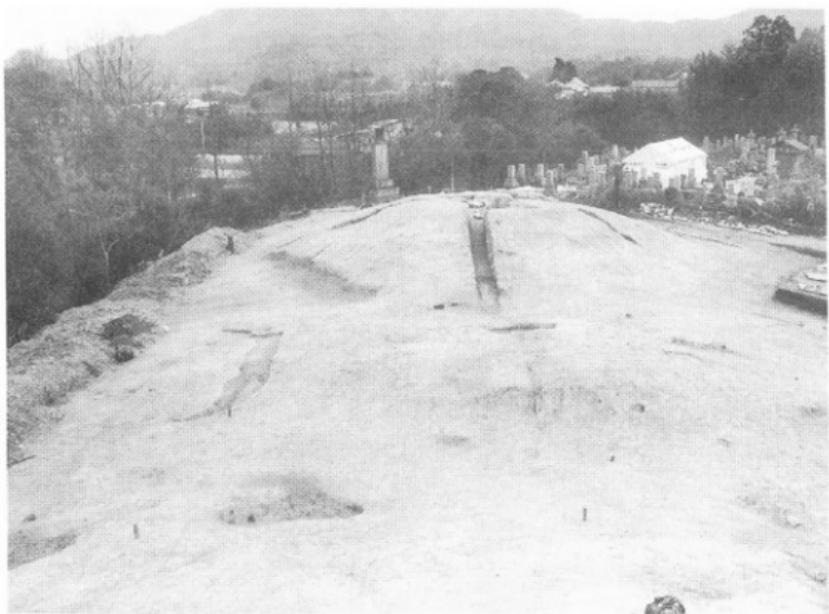
図版1-2 調査前の古墳群造景（東から）



図版 2-1 調査中の古墳群遠景（西方町役場より）



図版 2-2 調査中の古墳群遠景（北方絃歌中学校より）



図版 3-1 1号墳墳丘（2号墳より）



図版 3-2 1号墳墳丘（北から）



図版 4-1 1号墳南くびれ部



図版 4-2 1号墳北くびれ部



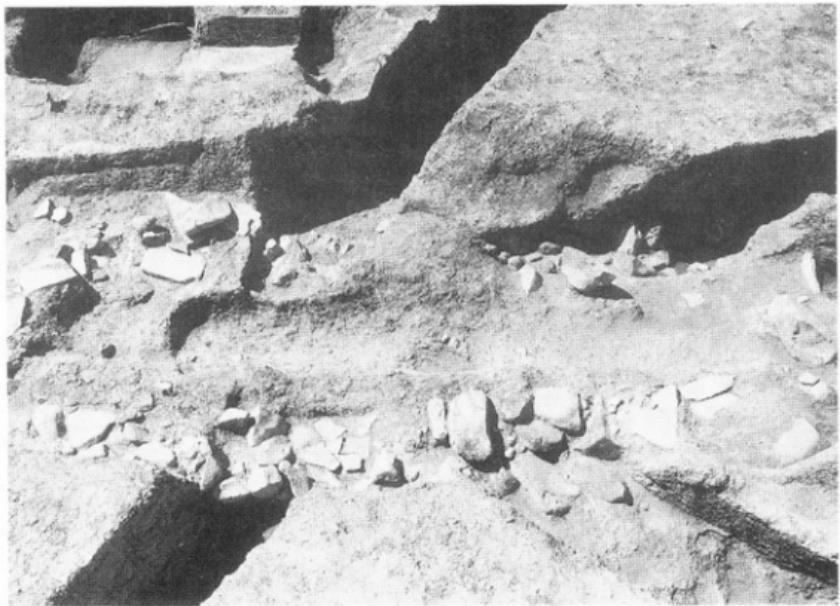
図版 5-1 填丘南邊側溝



図版 5-2 第1主体部内埋土



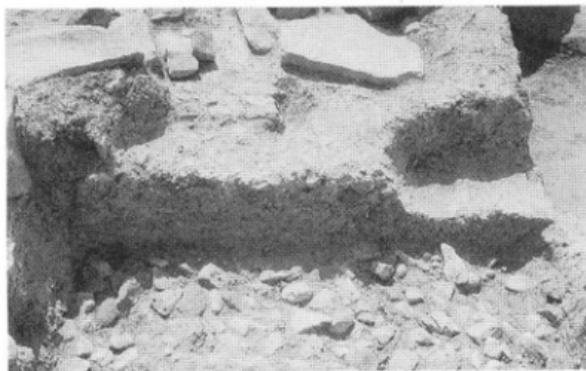
図版 6-1 第1主体部完掘状況（東から）



図版 6-2 第1主体部完掘状況（北から）



図版7-1 第1主体部完掘状況（西から）



図版7-2 粘土床たちわり状況



図版 8-1 第1主体部粘土床下の礫敷



図版 8-2 矢敷及び壁体石積み状況



図版 9-1 碓敷・壁体構築状況



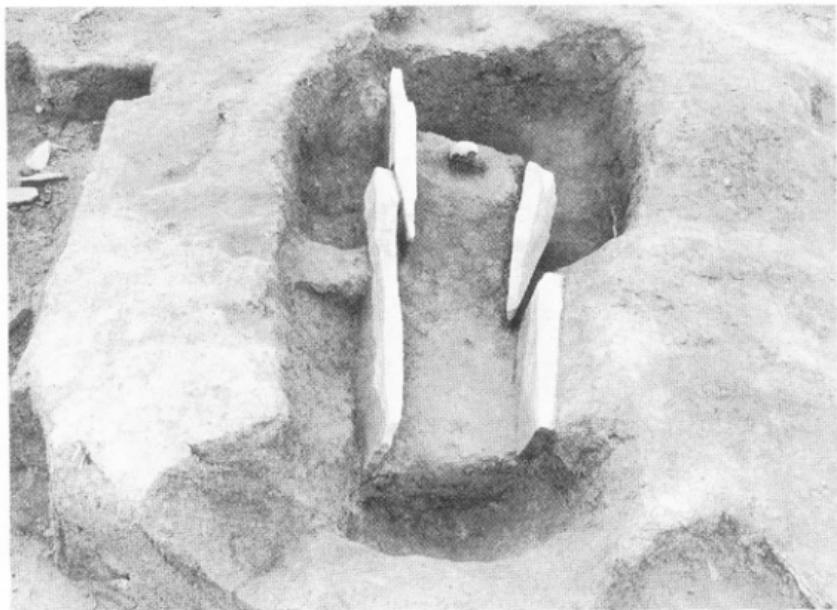
図版 9-2 第1主体部周辺の墳丘盛土状況



図版10-1 第2主体部検出状況



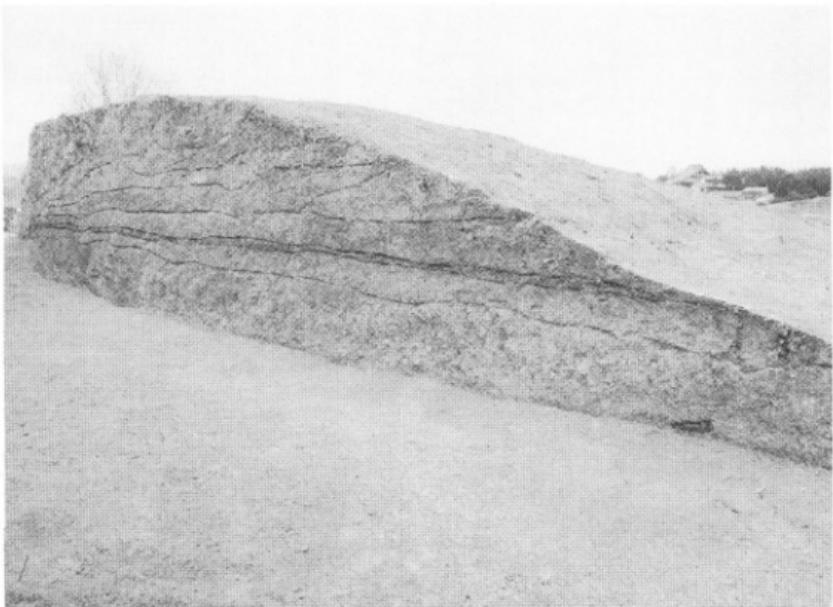
図版10-2 第2主体部蓋石除去後の状況



図版11-1 第2主体部完掘状況（西から）



図版11-2 第2主体部完掘状況（南から）



図版12-1 1号墳埴丘たちわり土層(北辺側)



図版12-2 1号墳埴丘たちわり土層(南辺側)



図版13-1 2号墳調査前の状況（西から）



図版13-2 2号墳南アセ土層